三浦梅園集

價原

禹謨に德惟善政、政在養民、水火木金土穀惟修、正德利用厚生惟和、といへり水火木金土穀これを六府と云正德利用厚生これを三事と云後世之治、千術萬法有といへども此六府三事に出ず禹謨に水火木金土穀といへるを其後は穀を土に合して五行とも五材ともいへり天下の至寶といふ者は此六府なり禹謨の後洪範に是を五行と謂て箕子の所述始めて禹謨に違ひて後世五行家の禍胎とはなれり已に尙書に出たれば後世の人これを左右動すことならで其後の歷歷方も色色の曲說を設けて調停せりされど天地の條理を取て禹謨と相照して是を觀れば箕子の誤傳掩ふべからず古の聖人と云者は天下を有する人なりこれを王者と云王者の材とする所は水火木金土穀なり城郭橋梁屋壁舟車耒耜釜甑刀劍陶瓦百の器械烹熟煨炙衣服飮食何れか五行の外に出る是天下の至寶にして得やすく塞やすく足り易き者にして必得難き者にあらず得難き寶は寶に

書經の禹謨に「德は惟れ政を善くす。政は民を養ふにあり。水火木金土惟れ修め、正德利用厚生惟和す」と云つてゐる、水火木金土穀はこれを六府といひ、正德利用厚生はこれを三事といふのであるが後世の政治も、千差萬別の法があつて、やはりこの六府三事から出てゐる。禹謨に水火木金土穀といつてゐるのをその後、穀を土に合せて五行とも五材とも云ふやうになつた。天下の至寶ともいはれる者はこの六府である。禹謨の後、更に「洪範」にこれを五行と謂つて、箕子が述べてゐる。これが始めであつて後世五行家の禍根となつたものである。已に「尙書」に載せられたので後世の人はこれを絕對のものとして動かす事がならず、その後の歷々方も色々の說を設けて解釋しようとした。然し天地の條理から云つて禹謨と相照して見ても、箕子の誤傳であることは掩ふことができない。古への聖人は天下の所有者である。これを王者といつた。王者の材とするところは水火木金土穀である、城郭、橋梁、屋壁、舟車、耒耜、釜甑、刀劍、陶瓦、百の器械、烹熟、煨炙、衣服、飮食等何れも五行の外に出るものでない。これは天下の至寶であつて、

あらずたとひ連城の璧十二乘を照すとも燈火の千家萬家に滿て照すの功に比すれば對用すべきにあらず此故に得難きの寶は得ずしてもすむ者なり得やすきの寶は民生須臾も離るべからざる者也むかし人質撲にして奢靡文飾に走らざりし世は是にて用足りたり世移り俗變じて次第に移り飾る世になりて得易く塞易き者の財たるを忘れ謾に得難く給難き者を求めて至寶と思へり其至寶は無用の者にして王者の寶は有用の者也我國は漢土に比すればをそく闢けたる故風俗も最淳撲にして立けりされば銀は人皇四十代　天武天皇白鳳三年對馬より出し銅は四十三代　元明天皇和銅元年武藏の國より出し金は四十五代　聖武天皇天平二十一年陸奥の國より貢ずといへども然まで多きにもあらず錢の通用も白鳳以來有りしかども今の樣なる事にはあらず博多にもろこし船來りし頃は宋錢を以て物を辨じ近く室町殿の頃までも明朝永樂錢にて事すみぬ東山殿は國用乏しとて三度まで明へ錢乞れし中にも文明の頃乞れしには十萬貫を賜らば國用足んと歎き申されき十萬貫幾ばくぞや今の富人一人の產とするにだも足らず然れば今錢幣の多きこと辨ぜずし

而も得やすく、足り易いものである、必ずしも得難いといふものでない。得ることが難しいものは寶でない。たとひ連城の璧十二乘を照す寶石であつてもこれを燈火が民の千家に滿ちて照すのに較べれば、その效用は一つの寶の比でない。それであるから得難い寶といふものは無くても濟むものである。得易い寶は人民が生活してゆくのに須臾も離すことができぬものである。往昔人々が質樸で奢侈文飾に走らなかつた頃は、これで用が足りた。ところが世の中が變つて、文飾が行はれる世になると、得やすく滿ち足り易い者が財寶であることを忘れ、みだりに得難い手に入り難いものを求めて至寶だと思ふやうになつた。その至寶とは無用の者で、王者の寶とするところは有用の者である。我國は支那と較べると、開けたのが遲い。それで風俗もまだ最も淳樸である。銀は人皇四十代天武天皇の白鳳三年、對馬から出で銅は四十三代、元明天皇の和銅元年、武藏の國から出た。それから金は四十五代、聖武天皇の天平二十一年、陸奥國から貢したとあるが、極く僅少なものであつた。錢の通用も白鳳以來有るにはあつたが、今のやうなことはなかつた。博多に唐の船が來た頃は宋の錢で事物を辨じてゐたし、近く室町殿の頃までも明朝永樂錢で事がすんでゐた。東山殿(足利義政)は國用に乏しいといふので、三度までも明へ錢を乞はれたといふが、中にも天明頃の請求は十萬貫あれば事足

で知べしかく迄財貨に富る世を金銀少き樣に心得たるは僻事なり一通りに考れば金銀少ければ世の中ゆたかなる者かと思へども然にあらずここにて得と天下の至寶は六府に過ざる事を察すべし東坡いへる如く使天而雨珠、寒者不得以爲襦。使天雨玉、飢者不得以爲粟。にて金銀瑠璃硨磲碼碯琥珀など云て世には賞玩すれども民用に何の益もなければ王者これを寶とせず是故に古の王者は五官とて水火木金土に各其長を置て治められしなり金とは五金の總名也分つていへば皆金也五金の内にては鐵を至寶とす銅これにつぐ鉛これにつぐ如何となれば鐵は其價廉にして其用廣し民生一日も無んば有るべからず銅は器物の用あり鉛は軍中の用あり金銀は有ば有る處の用あれども無ても先すむ者也さる程に餘の金は此方にはをそく見え得れども鐵は神代の昔より有りしと見えたり金銀は諸貨に易へて用ゆるを以て其用とす金銀並に錢これを幣と云珍にして小也諸貨の重大にして移し難きにはこびをつくる者なれば其用舟車に近き者なり金銀は貴重なり能大物を運ぶ錢は賤しふして衆し能小物を

りると歎いたものであつた。その十萬貫が現在は何であらう今の富豪一人の財產にも足りぬものである。かういつて見れば今の世には錢貨幣の多いことは云はぬとも解るであらう。かくまでに財貨に富んでゐる世を金銀が少ないやうに心得るのは僻事である。普通の考へですれば、金銀が少なければ、世の中が貧しく、金銀が多ければ世の中が豐かだと思はれるのであるがさうではない。玆に於て篤と天下の至寶は六府にすぎるものがないことを察しなければならぬ。蘇東坡が云へるやうに「天をして珠を雨ふらしめよ、寒者は以て襦と爲すを得ず。天をして玉を雨ふらしめよ、飢者は以て粟と爲すを得ず」であつて金銀、瑠璃、硨磲、碼碯、琥珀などいふものは世間で賞玩するが民用には何の資するところもないものであるから、王者はこれを寶とはしない。この故に古への王者は五官と云つて水火木金土に關し、各々その長さを置いて世を治められたのである。金とは五金の總名である分けて云へば金銀銅鉛鐵であり、合せて云へば皆金である。この五金の内では、鐵が一番の寶である。銅がその次で鉛は又その次である。何故かと云ふに鐵はその價が廉であり、その用途も廣く、民の生活には一日も缺くことができぬからだ。銅は器物を作る用がある。鉛は軍中彈丸の用に供せられる。金銀はあればあるだけの用はあるが無くても先づすむものである。さて他の金は我國では後世發見されたも

運ぶ貴賤輕重あるを以て銀以て金を分つべく錢以て銀を分つべし此故に是を金銀といへば錢も亦其内にあり先天下の勢を慮る人は能財の有用無用を辨知すべし譬へば海内に如此澤山に充る所の金銀今悉く盡き果てたりとも他の五材あらましかば民生立ぬと云事の有るべきや蓋金銀は處じ處出る所有りといへども佐渡の山天下に甲たり上杉謙信佐渡を攻取金を取れしかば國用饒に有し由豊臣太閤知給ひて公料となし金を採れしかども出ず慶長五年關ガ原事畢りて後銀を出すこと夥し銀やんで金を出す今に至て絶ず有然錢は白鳳以來元明の和銅開珍　孝謙の萬年通寶より絶ず鑄給ひしかども甚少き事にやと思はる異國世世の錢は京錢と云きは小田原氏康東國を領せられし時の勢永樂錢貴くして他錢四五文を以て其一文に充しかば他錢を禁ぜられし程に關東は專永樂錢行はれて他錢をはびたとていやしみ京畿には他錢盛んにしてこれを京錢と稱しき慶長の比錢鑄けると見えて稀に慶長通寶を見ることあり輪郭字樣頗る明錢に似たり開元乾元之錢は異國千年の故物なれども得難からずして慶長通寶は得難ければ幾程も鑄ざりしと覺ゆ慶長十三年永樂を禁じ京錢を用ひしより永樂多くはつぶしに成て世に隱れぬ寛永十三年　猷廟江戸と近江坂本の二處にて寛永通寶を鑄さしめ給ひしより財用世に饒になり諸貨の通利自在なりしかば諸貨を賤しみ金錢を貴む風とはなれり金銀貴くして六府賤し六府賤しくして國本薄し姑其故を說くべし譬ばこゝに一島あり土地人民足り米粟布帛魚鹽他島を假らず一切事足り唯金銀のみ無らんに民粟を以て器械庸作に易へて金銀の貴きをも知らで立ざる事やはあるべき迫迫に錢一萬を入れて他の用を通ぜんに一萬の錢其一島の用を足らしむべし是より增して十萬に至らば十萬の錢其一島の用とつり合をなして一萬の錢決して一島の用を辨ぜじ其初は島の諸用一萬の錢とつり合をなし米一石五百錢に當らば其五百錢以て一奴を買べし又入れて十萬に至る日は一石の米五千錢につり合べし此時五百の錢總に數十日の人を雇ふに過じ然れば前の五百錢もてると後の五千錢もてると數は一倍乃至增して千倍億なりとも一島に出す所の米粟布帛多きを增さじ米粟布帛多きをまさずして獨金銀のみまさんに多きと少きとかはる事はなく多ければ多き程煩し

のであるが鐵は神代の昔からあつたやうだ。金銀は諸々の物貨に易へて用ひるのであるから金銀竝に錢はこれを貨幣といふのである。珍貴なものでその形は小さい、物貨といふ重く大きく移し難いものに運びを與へるのである、その用は舟車に近い。金銀は貴重であつて、能く大きな物を運び、錢は賤しくて多く能く小さな物を運ぶ。その用に貴賤輕重があるからして銀で以て金を分つことができ、錢で以て銀を分つことができる。この故にこれを金銀といへば錢も亦その中に含まれる。先づ天下の勢ひを慮る人は、能く財政の有用無用を辨へ知らなければならぬ。譬へば海内にこのやうに澤山に行渡つてゐる金銀が、今悉く盡きて無くなつたとしても、他の五材があつたならば民の生活が成立たぬといふことは無い。金銀の出所は諸所にあるが、佐渡の山が天下一である。上杉謙信が佐渡を攻めて金を得たので國用が豊かになつたことを、豊臣秀吉が聞いて、公料として金を採つたが出なかつた。慶長五年關ヶ原の戰爭が終つて後銀が夥しく出た。銀が止んで金が出て、今に至るも絶えない、然し錢は白鳳以來元明の和銅開珍、孝謙の萬年通寶より絶えず鑄たのであるが、甚だ少なかつたやうに思へる。異國世々の錢は京錢と云つた。これは小田原の北條氏康が東國を領した時の時勢が永樂錢を貴んで他錢四五文を以てその一文に充へてゐたのであるから、他錢は禁ぜられてゐた

程で、關東は一帶に永樂錢が行はれ他錢をびたと稱して賤しんだ。京畿地方では他錢が盛んであつてこれを京錢といつた。慶長の頃錢を鑄たと見えて稀に慶長通寶を見ることがある。輪郭字樣が頗る明錢に似てゐる。開元乾元の錢は異國千年の故物であるけれど得やすいのに、慶長通寶は得難いから何程も鑄なかつたものと見える。慶長十三年に永樂錢を禁じ京錢を用ひてから、永樂錢は多くつぶしになつて世に隱れた。寛永十三年猷廟（德川家光）が江戸と近江坂本との二ヶ所で寛永通寶を鑄造せしめたので、それ以來財用が世に饒かになり、諸貨の通利が自在となつた。其處で諸貨を賤しみ金銀を貴ぶ風とはなつた。金銀が貴くて、諸材諸貨卽ち六府（水火木金土穀）が賤しくなり六府を賤しめる爲めに國本の影が薄くなつた。今その故を說明しよう。譬へば玆に一つの島がある。土地人民もあり、米粟、布帛、魚鹽も他島から借りなくても一切ことが足り、唯金銀のみが無かつたとすると、人民は粟で以て器械庸作に易へ、金銀の貴さをも知らないで立つてゆかないことはないのである。追々錢一萬を入れて他の用を通じたとすれば、それはそれでその一島の用が足つてゐた。これが增加して十萬になると、十萬の錢がその島の用とつり合をなして一萬の錢が一島の用を辨じなくなる。その初めは島の諸用が一萬の錢とつり合をなしてゐて米一石五百錢に當るとすれば、その五百錢

きを增しその多き金銀に就て游手を增し天地より生ずる財を費す者次第に出來るべし我國の昔も幣はなくて立しなり和銅の比太宰府及播磨より始て銅錢を獻ぜしにこれを民間にしき民に交關せしめし時は穀六升に付一文なりしとかや蝦夷などは今にその土地の產物を出して我米穀烟酒をかえて錢を用ひずとなり此故に金銀多ければ物價貴し金錢少ければ物價賤し物貨賤きは金銀の貴也物價貴きは金銀の賤き也諸工の造り出す所の者を見るに古代の物は精巧にして今の者は粗惡也是其用の廣きより起るといへども半は金銀の賤しうして物價の貴きに係れりされば漢の初天下に縱して恣に錢を鑄さしめしかば米一石五千錢に至りしなり漢の一石と云は今の京升には大概一斗程の事なり其後幣の勢を抑へ段々人を農にかへし趙過など云人出で農の道を敎へ耕をすゝめ代田を見るに古代の物は精巧にして今の者は粗惡也是其用の廣きより起るといへども半は金銀の賤しうして物價の貴きに係れりされば漢の初天下に縱して恣に錢を鑄さしめしかば米一石五千錢に至りしなり漢の一石と云は今の京升には大概一斗程の事なり其後幣の勢を抑へ段々人を農にかへし趙過など云人出で農の道を敎へ耕をすゝめ代田を復し後には一石の價五錢に至りしなり天下の勢をとる事を權柄といへり權とは稱の錘なり柄とは其錘を自在によくつり合はするなり今衡は持すれども懸る者の輕重を稱錘をもて自田にする事あたはずんば權柄を何にかせん稱錘は重きをまさず輕きを加へず輕ければ輕きに從ひ重ければ重きに從ひつり合をつけて平を持すもし權柄を執る人米粟布帛百の器財費用と金銀と其つり合を見て多少其宜しきを得せしめば增減に從つて平を得べし此故に稱錘をかへよとにはあらず輕重に從ひてつり合をとる事なりこれを執權柄といふ也然れば金銀の多少は强て有國者の患とすべきにあらず唯金銀の用は何物ぞ米粟布帛百の器財庸作の用は何物ぞと察すれば金銀の盛に行るゝの有益無益知るべきなり今金銀の通用を好むこと獨日本のみならず萬國同じく然り萬國同じく金銀を好むといへども金銀の多き事我國の如きは稀なり其徵には海舶の長崎にて交易する者價太だ廉なり商賈の手に入り賣買する日和物の價と相比すれば海外直廉なる事知るべし金銀少ければ少きにてつり合ひ多ければ多き程のつり合ひになる者なりされば國家の始は米價一石二三四五六斗金一兩に當りし時は江府諸物の價も廉にして土庶の苦む沙汰もなし元祿十二年己卯八月十五日の大風に依て一兩纔に七斗を糴ふ是より歲荒りに登らず工商の營、食に給するに足らず都下餓莩多しこれ憲廟職に在せし日也それより　憲廟の世を終へ

で奴婢を一人買ふことができる。それが十萬となつた日には一石の米は五千錢でつり合ふであらう。この時五百の錢は纔かに數十日、人を雇へるに過ぎない。然らば前の五百錢をもつてゐるのと、後の五千錢をもつのとは數は一倍してゐるが用は異るところがない、更に增して千萬億錢に至つても一島に出すところの米粟布帛の生產がそれに伴はず、獨り金銀のみ增すとしたならば、多と少とは替ることがなく、多ければ多い程煩しさを增し、その金銀を多くもてば遊んで暮すものができてくることになり、天地から生ずる財を費すものが次第に出來てくる。我國の昔も貨幣がなくて立つてきた。和銅の頃、太宰府及び播磨から始めて銅錢を獻じたのに、これを民間にひろめ、民に交換せしめた時は穀六升に付一文であつたとか。蝦夷などは未だにその土地の產物を出して我が內地米穀煙草酒とかへて錢は用ひてゐない。故に金銀が多ければ物價が貴い。金銀が少なければ物價が賤しい、物價が賤しいのは金銀が無いことだ。物價が貴いのは金銀の賤しいことだ、諸工が造り出すところの物を見るに、古代の物は精巧であつて今の物は粗惡である。これはその用の廣いところから起るものとは云へ、半ば金銀が賤しくて物價の貴きによつてである。されば漢の初め天下に恣に錢を鑄せしめた時は、米一石が五千錢に至つた。漢の一石と云ふのは今の京升では大略一斗程のことである。その後錢幣の勢ひを抑制し、段々人を農業にかへし、趙過などと云ふ人が出で農の道を敎へ、耕を進め代田を復したので、後には一石の價が五錢になつた。今天下の勢權をとることを權柄と云ふが、權とは錘の名である。柄とはその錘を自在につり合すのである、今衡を持つとすると、懸けるものの輕重を稱錘を以て自由にすることができなかつたならば、權柄は何の用にもならない。稱錘は重さをまさず又輕くもならない、輕ければ輕い方に從ひ、重ければ重い方に從ひ、つりあひをつけて平衡を持する、若し權柄を執る人が米粟布帛百器財費用と金銀との釣り合をみて、多少その宜しきを得せしめたならば增減に從つて平衡を得るであらう。これであるから稱錘をかへよといふのではない。輕重に從つてつり合をとることである。これを權柄を執ると云ふのである、されば金銀の多少と云ふことは、强ひて憂國者の患ひとすべきことではない。唯金銀の用は如何、米粟布帛、種々の器財庸作の用如何と察したならば、金銀が盛んに行はれるにつれて有益無益がわかる筈だ。今金銀の通用を好むことは獨り日本のみではない、萬國が同じくさうなのだ。萬國が同じく金銀を好くとは云ふが、金銀の多いことは我國の如きは稀である。その證據は海舶の長崎で交易する物の價が太だ廉であつて、商賈人の手に入つて賣買する日和物の價と比較すると海外の物價の廉いことが知られる。金

つかせ給ひ正德元年辛卯の秋米價やや賤くなりて壬辰の春に至りては九斗一兩に相當れり　章廟の時乾金の沙汰あり　有廟の時西國の苗稼悉腐るに逢て享保辛丑の夏一兩纔に米六斗餘を糴ふ元祿の頃糶俄に貴とかりしには餓莩多かりしかども二十餘年これに慣れたれば治生の道これに居り合ひ出來りたればこれが常となりぬ元祿目前米價賤しふして士庶苦しまず元祿の始米價貴ふして士人は利を得工商は飢ゆ以來米價依然として工商は苦しまず士人は餧ゆもし今日米價元祿の舊に復せば士人手足を措く地なけん是居り合ふと居り合はざるとの間にして權の入り用若かか有る時の事なるべし

是春臺經濟錄による江府の米價也又東匡盍簪錄を讀に先　元明天皇民に幣財交通の道を敎給ひし始和銅三年の詔を引て曰諸國之地、江山遐阻、負擔之輩、久苦行役、宜時一囊錢作たり、此時錢貴ふして銀賤し二十文以銀一錢に當る新銀出て八十文以て銀一錢を買ふ然れば正德中脆粟米二百錢と云も四貫文なり油九錢と云も百八十文なり今よりして觀れば世豈如此廉價の物あらんや今文の字銀元文元年發行

銀が少なければ少なくてつり合ひ、多ければ多いでつり合ひは成るものである。だから德川初期には米價一石(二三四五六斗)金一兩に當つた時には、諸物の價も低廉で武士町人の苦しむこともなかつたが、元祿十二年己卯八月十五日の大暴風で一兩で纔かに米七斗しか買ふことができない有樣となつた。この歲以來頻りに五穀が實らないので工商の營食だけでは需要を給するに足りなくなり、都下に餓ゑて倒れたものが多かつた。これは將軍綱吉が職にあつた日である。それから綱吉が職を去つて德川家宣が職に就くに及び正德元年辛卯の秋、米價がやゝ下落して壬辰の春になると、九斗一兩に相當するやうになつた。將軍德川家繼の時に乾金の沙汰があつた。德川吉宗の時には西國方面の苗稼が悉く腐つて不作を來し、享保辛丑の夏には一兩纔かに米六斗を買ひ得たこともある。元祿の頃買ふ米が俄かに高くなつたから餓莩も多かつたけれども爾來二十餘年これに慣れたので、政治も玆に折合が出來てそれが常態となつた。元祿以前は米價が安く士庶民は苦しまなかつた。が、元祿の始め、米價が高くなり、士人は利を得たが工商人は飢ゑた。それ以來米價が依然としてその儘でゐる。さうなると今度は工商が苦しまないで士人が飢ゑるやうになつた。もし今日米價が元祿の舊に復したならば、士人は手足を措く餘地さへなからう。これが居り合と居り合はざるとの間を彷徨するのであつて臨機應變の計を必要とする時のことであらう。

以上は春臺「經濟錄」によつた江府の米價である。又伊藤東涯の「盍簪錄」を讀むと、先に元明天皇の時代に民に幣財交通の道を始めて敎へられた時、和銅三年の詔を引いて、「諸國の地、江山遐阻、負擔の輩、久しく行役に苦しむ、宜しく一囊錢を持すべしとある、この時は錢が貴く銀の方が賤しかつた。二十文で以て一錢に當る新銀が出て八十文で以て銀一錢を買ふことができた。だから正德中、脆粟米に二百錢と云ふのも四貫文であり、油九錢と云ふのも百八十文である。今からして見ると世にかく廉價の物はあるまい。今文の字銀を元文元年發行の時、十五貫目を以て享保十五貫目を收めると錢五十文上下を以て銀一錢に替へることが出來た。然るに今の三幣(金銀銅)は愈々惡く、金は黃色くなく、銀は白からずといふわけで、新鑄の錢は鐵を用ひてある。若し强く擲てば碎ける。物價は歲々にあがる、貧乏人の苦痛は勢ひ止まるところを知らないのだ。

安永壬寅十月東涯は追加して「予が此の書を著す時は猶銀一錢は錢六七十文に當つた。今は已に百を越してゐる。そして米價は京都大阪では百錢に當ると傳へられてゐる。春以來價を尙ほ增してゐるだらう。」と云つた。

蓋し金玉はもと土石の精英で得難く朽ち難いものだ。これ卽ち至小のものを以

て時十五貫目を以て享保銀十貫目を收れば錢五十文上下以て銀一錢に替たり然るに今三幣愈麁惡、金黃ならず銀白からず新鑄の錢鐵を用ふ若痛く擲てば碎く物價歲歲に增す賤人其勢の止る所を知らず

安永壬寅十月追加して曰予この書を著する時猶銀一錢、錢六七十文に當る今は已に百を過ぐ而して米價京師浪華百錢に充つと傳ふ春來猶價を增すべし

夫金玉はもと土石の精英にして得難く朽難し是を以て至小以て大に對すべく米粟布帛諸貨の擁塞を通ずべし神農日中爲市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所而貨通、といへば其由て來ること最遠し然して諸貨の能する所は金銀の能せざる所にして金銀の能する所は諸貨の能せざる所あり是を以て諸貨は物大にして數積む運漕甚難し夫金銀の用とする所は則銀西の米粟舟軍を假らずして關東にして炊ぐべし北陸の布帛牛馬に駄せずして南海にして衣るべし此故に行旅の人萬里糧を裹まず腰纏の用車馬と敵することを得諸貨の如きは通利惡しき程に米は衣と成難く衣は薪と成難く金銀銅錢の小物は分つて用ゆべく大物は聚めて價ふ

べきの自在に如ざる事遠し是天下之靡然としてこれに向ふ所なり蓋金銀銅の三幣金は大用有て瑣碎に用ひ難く錢は小碎に便にして大用に便ならず銀は中間にあるものにして三幣の代る代る用をなすところなり昔は人質撲にして金は砂金銀は炭吹様のもの多く通じたり天正の頃より大判小判丁銀など始り慶長四年始て一分判出來慶長六年の後大判小判一分判丁銀豆板等改らるこれ國家の造幣にして目來元祿享保元文近來に到て三幣色色の製とも出來りし也夫金銀は幣の用を主とす民用に於ては鐵を主とす然して銅は幣器兼用る者なり金銀若し幣の用を除けば刀の緣頭佛殿の裝嚴漆匠の描金など玩物に過ず藥用も有れども要藥にはあらずされば近來は費多くなりて然までに多き金銀猶給する事能はず楮鈔大に世に行る金銀の用は唯諸貨運輸の用ばかりなれば楮鈔にても飛錢にてもすむ者也餘貨の如きは寒を凌ぐことは布帛にあらざれば能はず飢を愈すことは米粟に非ざれば能はざるにて金銀本來の面目を知るべし此故に天下の權を執て經濟に心を用ゆる人は有用の貨を日日に生殖し無用の貨を貴ばぬ樣に致すべき事なり金銀を以て天下の豐

て至大のものに對すべく、米粟布帛諸貨の流通運用に供した。「神農日中市を爲し天下の民聚に敎ふ。天下の貨は交易して退き、各其の所を得て貨は通ずるなり」といふところを見るとその由つて來るところが實に遠い。そして諸貨の能くするところのことは金銀の能くしないところであつて、金銀の能くするところのことは諸貨の能くしないところである。左樣であるから諸物貨は形質が大きくて數量を積重ねて運漕するのに甚だ不便だ。それで人々が金銀の用を借りると鎭西の米粟が舟車の便をからないで關東にゐながら、これを炊ぐことができる。又北陸の布帛をわざ〳〵牛馬に積んでこなくても、南海にゐて手に入れることができる。故に行旅の人が萬里をゆくにも糧を持たなくても、路金一つで車馬の用が足りる。諸物貨の如きは、通利上具合が悪いから、米は衣となり難く、衣は薪となり難い。それは金銀銅錢が小物は分つて用ひられ大物は聚めて償ふことが出來るといふ自在さに及ばないのである。これ天下の人々が靡然として金錢に共鳴して至便とする所以である。蓋し金銀銅の三貨幣の中、金は大用があつて瑣碎のことに用ひ難く、錢は小材には便であるが大用には不便だ。銀はその中間にあつて三つの代用をなすものである。昔は人が質撲で金は砂金、銀は灰吹樣のものが多く通用した、天正の頃から大判、小判、丁銀などが始まり、慶長四年始めて一分判が出來たが、同

儉を病む人は回天の功は有難かるべし大學に財を生ずる大道を生之者衆、食之者少、爲之者疾、用之者舒、則財恒足矣といべり是則禹謨の利用の工夫也有國者常に此語を體認せば天下將に指掌に在んとす然るを今の世は何にもならぬ金銀を何にもかえぬ至寶と思ふより只上も下も寐ても寤ても金銀を聚る工夫の外他事なし人は四民とて士農工商の四に過ず士は上に事へ下を敎え禮義を道とし政刑を權とし社稷を守ち國土を安んずる者なり農は黍稻桑麻を作り出して自他を養ひ筋力を以て徭役を務め餘算を得て工商と相通ずる者也工は天下には色色の器財なくてかなはぬ者故に朝夕其道を鍛錬し百の器物を造り出し民生の用に不自由なき樣にする者也商は農のつくり出せる米麥布帛工の造り出せる百の器械こなたに餘りかなたに足らず此にあり彼になきを通用させて天下の用を成す者なり此四つの者は一つも闕ては天下の用を成しがたし是を以て人たる者士農工商の本業に本づき各職分を務めて怠らざるを敬て天に事ふるとするなり此外に遊びて民の用をなさず天下の物財を費す者を遊民と云て國家の蠹とするなり是を以て金銀は四民共に

六年大判、小判、一分判、丁銀、豆板等が改鑄された。これは國家の造幣であつて、爾來元祿、享保、元文、近來に至つては三幣が色々に製せられるやうになつた。蓋し金銀は幣の用を主とし、民間に於ては鐵を主とする、そして銅は幣器を兼用するものである。金銀が若し幣として用ひられることがなかつたならば、刀の緣頭、佛殿の裝嚴、漆匠の苗金などの玩具に用ひらるゝに過ぎない。藥用としても用ひられるが要藥ではない。そして近來は費用が多くなつてさまでに多い金銀も十分給することが出來なくなつた。其處で楮鈔が大いに世に行はるゝことになり、金銀の用は只諸貨運輸の用ばかりであるから楮鈔でも飛錢にてもそれで用がすむものである。金貨の如きであつても寒を凌ぐことが布帛でなければできないし、飢ゑをいやすことは米粟でなかつたならばできぬのであつて、それによつても金銀本來の面目を知ることができる。この故に天下の權を執つて經濟に心を用ふる人は有用の貨を日々に生殖し、無用の貨を貴ばぬやうに致すべきことだ。金銀を以ても病む人は回天の功を爲し難い。「大學」に財を生ずる大道を「之を生ずる者衆く天下の豐儉して、之を食する者寡く、之を爲す者疾くして之を用ふる者舒なれば、財は恆に足る」といつてゐる、それは則ち禹謨（聖人禹の政治上に於ける行き方）の利用の工夫である。國を支配する人達が常にこの語を體認したならば財用始終足

有無を通ずるの要物なれども專交易を事とする者なる故に金銀の運びを假ること專要なり頼朝府を鎌倉に開かれしより足利織田豐臣繼興るといへども唯馬上を以て天下を治めんと欲して民を軌物に入るるの擧なく實の太平と云事は無かりしに國家興りしより德妖氣を消し治封建にならひ百六十年來四海波を揚げず吾儕小人に至るまで緩帶鼓腹早く寢ね旰て食ふことを得るも何れか恩波の及べる所にあらざらん蓋國初藤堂高虎足利の先轍を鑑み自夫人公子を東都の邸に入れられてより諸侯後るる者なく身封國に就くといへども家東都にあり隔年朝覲の禮有て割據虎視の勢變じて四海一家の化となり戸とざさぬ御世となり侍りぬ此故に今日諸侯費用朝覲を主とす次に公事屬役の事あり然りといへども是はこれ主盟控擊の權のある所これを戰爭の難に比すれば九牛が一毛なり譬で財を節せば國用は定めて足るの道あるべし人久しく太平の化に浴し安樂に慣れ安んじ奉養の道日を追て華靡に走る是故に飲食は人生を養ふの用を外にして遠味珍品烹熟の道調和の品日暮れ夜明るに連る衣服は寒暑を防ぐの用を外にして巧を衒ひ奇を競ひ月を重ねて

り、天下は將に指掌の中にあるであらう、ところが今の世では何もならぬ金銀を何物にもかへられない至寶だとするばかりで、只上下共に寐てもさめても金銀を聚むる工夫より他に餘念がない。人は四民といつて、士農工商の四つを出ない。士は上に事へ下を教へ禮儀を道とし、政刑を權として社稷を守り國土を安んずるものである。農は黍稻桑麻を作り出して自他を養ひ筋力を以て使役を務め、餘算を得て工商と相應ずるものである。工は天下には色々の器財がなくてはかなはぬものであるから、朝夕その道を鍛錬し、いろ〳〵の器物を作り出し、民の生活の用に不自由なきようにするものである。商は農の作り出した米麥布帛、工の作り出したいろ〳〵の器械の、こなたに餘り、かなたに足らぬものを巧みに相通じ、此にあつて彼に無いものをよく通用させて天下の用をなすものである。だから人は士農工商の本業に本づいて各々職分を努めて怠らないことが肝要だ。

この外に遊んでゐて民の用をなさず、天下の財物を費すものを遊民と云つて國家を蝕む徒輩だ。かく考へると金銀は四民共に有無を通ずる必要物ではあるが、專ら交易を事とするものだから、この事については、金銀の運びを假ることが第一必要である。源頼朝が幕府を鎌倉に開いてから、足利、織田、豐臣の諸氏がついで興つたが、何れも武力で天下を治めようとしたもので、民をその途に安んぜしめ

一端の帛を繡にし時を踰て一匹の錦を織出す燕安の屋宅隨身の調度彫錦幾刻鏤を窮め財を生ずるの道日日に疎く巧を費やすのこと歲歲に多しここに於て人巧を費すの道を日日に求めて金銀を運ぶの巧漸になる博奕富なと云樣のことを興行し富む者は貯へて其息をとり富ざるものは營營として東に走り西に走り天地生生の財を唯飲潰し食潰し日を終へ年を終ふ終には園莫象戲俳諧樣の物までも賭になり侍りて殺風景甚しされば金銀の用貴ければ其權重し重ふして貴ければ人能くこれを積む積む者多ければ乏しき者多し然れば今の多債に困窮することは金銀多きの致す所なり金銀は無情の物なれば人を苦しめん樣なし唯所置宜しきを失すれば權傾くの致す所なり噫昔は天下國家を有するをこそ富貴とは申し侍れ然るに今の有國者は媚を素封の家に求め陶朱猗頓が徒齊魯の如き國を見ても己が家内の出納の如く思ふ程に貴き者は貧しく賤しき者は富みて富貴胡越を隔てたり是を以て今先金銀に餒る者は諸侯也廉耻の風を導んと欲すとも倉廩實て禮節を知る民なればいかでか是を導き得ん金銀既に多く費用既に廣し債の多き所なり古を稽へ今を察

る擧に出ない爲め眞の太平を致したと云はれなかつたのである。然るに德川氏が國家を治めるやうになつてから德が四海に及び、封建政治が行はれてよく國が治まり百六十年來四海波立たず、我等小人に至るまで太平樂をならべることができて、枕を高うして寢ね、安んじて食ふことができるやうになつた。その恩は廣大である。蓋し國初、藤堂高虎が足利の先轍に鑒みて自ら夫人公子を東都の邸に入れてから諸侯もこれに後るゝものなく、身は封國にゐても家を東都に置いた。そして隔年朝覲の禮があつて、群雄割據の勢ひは變じて四海一家と云ふべき德化の御代となつて人々は平和に安んずることができるやうになつた。然しそれが爲め今日諸侯の費用としては朝覲がその主なものとなつた。次に公事屬役にも相當費用がかゝる。然しながらそれ等はこれ主權者の威力を保持する爲めに必要の存するところでこれを戰爭の災害に比べたならばその負擔も九牛の一毛である。依つて平生謹んで財を節約したならば國用は必ず足るものだ。唯茲に注意すべきことがある。人々が久しく太平になれて安樂に安んずると奉養の道が日を追うて華靡に走り、飲食は人生を養ふ用以外のものになり、遠國の美味珍味とかに憧憬れ、それに伴つて料理、調度に日夜心を奪はれる。衣服は寒暑を防ぐ爲めのものであるのを今日は巧を衒ひ奇を競ひ、月々、一端の帛を繡にし、時を踰えて一匹の錦を織出

するに金銀當今を盛なりとす然して金銀に窮するも今の如きはなし故に人人相あへば唯金銀のなきを語る天下に通じて然り人皆金銀のなきを語らば何れの處に隱るるとする試に今金銀のある處を索るに諸侯の國よりして士農工共に金を畜へず然らば則商賈にあること知るべし商賈一同ならずといへ共其能巨萬を積むもの他にあらず商賈已に素封の富を有すれば千里控擊の權半は已に其手に歸す蘇秦張儀者流會計の道を以て往往六國の印を帶ぶここに於て其徒身公門に鞠躬すといへども心實に千乘を呑む其心農工を見ること奴隷の如し唯彼見て奴隷の如くするのみならず農工も亦彼を仰ぐこと主君の如しここに於て四民唯金銀のみを見て是れに走ること水の下に赴くが如し當今建靈の世なれば兵馬の功は立つべき樣なく寰宇艾安なれば修文の業も施す所なく屯を亨し塞を濟ふの用文武の德にもまさる故に金銀にだに富る人は無藝無能にても不禮不德にても上下に渴仰せらるれば最興じ難きは廉耻の風なりここに於て是を借るものは年年息を出しこれを貸す者は年年息を收む貸せば金銀世に散る樣なれども實は本錢を囮にして以て

すと云つた具合になり、居宅、調度の品々に至る迄華美をつくすのである、ところが肝腎の財を生ずるの道には日々に疎くなり衣食住の技巧に力を費すことが歳々に多いといふわけである、茲に於て人巧を費す道を日々に求めてきて金銀を追求する巧利の具を生じ博奕(ばくち)富などといふことを興行して富者は財を貯へてその利息をとり、貧乏人は營々、東奔西走して天地生々の財を只飲潰し食潰して日月を送り、終には圍碁、象戲、俳諧樣のものまでに賭けするやうになり、殺風景を極めるに至つた。故に金銀の用が貴ければ、その權も重く、重くて貴ければ、人はよくこれを積む、積むものが多ければ、貧乏者が又多い。してみれば、今の多額の負債に困窮するのは金銀の多いことから起ることだ。金銀は無情のものであるから、人を苦しめるといふことはない。只その處置の宜しきを失すると、權勢が一方のある者に傾いてゆく。噫、昔は天下國家を得ることを何よりの富貴としたが、今の大名は媚を素封の家に賣て歡心を求める。だから、支那の古代の富豪陶朱猗頓の如き徒は齊魯にひとしい大藩の財政を見ても自分一家の出納同然と思ふほど氣位が高くなつた。だから貴族貧しくして、卑賤の輩(商人)が富み、その間、胡越(胡は北狄、越は南夷)の隔りを生じた、今日第一に金銀に餒ゆる者は諸侯である。彼等が廉恥の風を勵まさうとしても「倉廩滿ちて禮節を知る」といふ民である以上どうして

天下の金銀を羅す富家の息年を逐て增せば國家の用年を逐て乏し乏しければ上の人下に求めざることを得ず上の人下に求むれば下乃上に給す豐臣太閤以來租稅之法三分之二地領取之三分之一耕民之取之昔戰鬪の世にさへ是にて事足りしなり今を以て國初に比すれば人多く田野闢けたり租稅侯國皆昔より多しされども費用昔にまさるを以て百計聚斂の道興る聚斂興つてこれを受る者は農也農事本艱なりこれに加ふるに百の徵求あり終に生を遂ること能はざれば民本務を捨てて工商庸作百の技術水に走り山を分ち百計して財を求む已に多技に走れば本產に怠らざる事能はず深く耕し厚く培んと欲すれども得ず肥たる地は瘠せ廣き地は狹く終に本產に放れ流亡して游民となる者數ふべからず今水に走り山を分ち百計して財を求むれども此亦聊饑渴を救ふにもあらず半は侯家に輸する也受て納る樣なれども侯家も農工も畢竟富家役をとるものなりされば戰國の頃は日夜鬪爭やむこと無かりしかば手を拱いて人に命を授くべき樣もなければ人防禦を主として僧も俗も農も商も其實は武士なりき今や昇平の世中にして唯苦しむことは金銀なれ

正當に導き得ようぞ。金銀が既に多く、費用が既に廣しとすれば、それは借金の多いことである。古今を通觀すると金銀は當今がその最も盛りに達してゐる。そして而も金銀に窮してゐるのも今のやうなことが以前にはなかつた。それで人々相逢ふと「金がない」と云ふ。それは天下を通じての話である、天下を通じて人皆金銀が無いと云つてゐるところを見ると、一體何處にそれが隱されてゐるのか。試みに今、金銀のあるところを探つて見るに、諸侯の國からして士農工共に金を蓄へてをらぬ。だから商賣人のもとに金が集つてゐることが知れよう。勿論商人一同といふわけでないがその能く巨萬の金を積むものは商人より他にない。商人が既に素封の富を有すとすると、千里控擊の權は半ば彼等の手に歸したものと云はねばならない。即ち支那の雄辯家、蘇秦、張儀と云つた風のものが會計の上で六國(齊、楚、燕、韓、魏、趙)の相たる印綬を帶びると云つた勢ひを生じて來た。それで富豪の徒は身を低くして公門を潛つてゐるとは云へ、その心は實に大諸侯の威を呑み、農工業者を見ること奴隷の如くであるだらう。只々彼等が奴隷の如く見たばかりでなく、農工業者も亦彼等を仰いで主君の如く見るに至つた。茲に於て四民は只金銀のみに心を取られて、その方へ走る有樣が丸で水の低きに就くが如くだ。當今は和平の御代であるから、兵馬の功は立てられぬし、文敎も定つてゐるの

ば上下をしなべて唯一心專念金銀にありこゝに於て其形はさまざまかはれども心は何れか乾沒に在らざらん一得一失の理勢誠にいかんともすべからざるものなるべしさればこの天下の毒勢を開くに何方を尋ねても郡縣の人は年年に減り都會の人は年年に增す由也是衡をとる人は最眼を着くべき所なり夫天下國家を有する人の豐饒と云は全く金銀の上にあらず金銀を有して豐饒とするは商賈のことなり此故に今は上下交利を射て錙銖を爭ふ程に惡く心得たる人は政を執れる身にも商賈の術を以て國を治めんとする人もあり乾沒と經濟と同じく利を求むる者なり其差別商賈は利を以て利とす經濟は義を以て利とす昔鄒穆公鳧雁の類を畜れしに粟をば用ひず常に粃を用ひられしに折ふし粃竭きたり有司これを民間に求めしに民粃一石を以て粟二石にかへんと云有司これを損也として粟を以て鳥に畜んと請ふ穆公否爾がしるところに非ず夫百姓の手を煦して耕し背を曝して耘ること豈鳥獸の爲にせんや粟米は是民の上食なり何とて鳥にはかふべきぞ汝小計を知つて大會を知らず周の諺にも甕漏貯中と云り夫君は民の父母なり倉の粟をとりて民に移す民に有ても我粟なり鳥もし鄒の粃をはまば是我粃を食むなり何ぞ鄒の粟を害はんと有しかば是より下に至る迄上のことに思ひつきて上下一體の思ひをなしけり國家を有する人は國家を一身と見る時は民にあると我にあるとの隔なし商賈は人に有せらるゝを損とし自有するを得とす君其民を外にすれば民の物を己に得て得とし民に散じに在り詩に彼に有遺秉此有滯穗伊寡婦之利といへり政を執て利を下に遺す一視同仁人に君たる者の利なり誠に田地をはしばしまでも籍すれば水難多し幣を鑄るに無を雜ゆれば盜鑄多し租稅重く上にとれば凶年には庶民凍餒して又急に農に力を盡すことを得ず孝悌を誘ひ禮讓を勸めん暇も無れば上に內難多く下に獄訟繁く財を費し人を損す是有國者細民の利を以て利とし民と利を爭ふの幣也これ治國者の利商賈の利と同じからざる所なり是故に庫の財を費して國の風俗を勵し農を勸め工を利し財貨を國人に積ましむべし是等を費と見る程に勸定を入れて元に合はぬことをば損とてせず是を市井の心と云是故に財を生ずる大道生之者衆しとは天

で修文の業もない。金で何事も濟むことであるからその用は文武の德にもまさるとされる。金銀に富んでゐる人は無藝無能でも不禮不德でも、上下に渴仰せらるるのであるから、最も興し難いのは廉恥の風である。玆に於て借金する者は年々利息を出し、これを貸す者は年々利息を收める。貸せば金銀が世に散るやうではあるが、實は本錢を囮(おとり)にして、天下の金銀をかき集めるのである。富家の利息はかくして年を逐うて多く增加してゆくにつれ國家の財用は年を追うて乏しくなる。從つて上の人が下に求めざるを得ない。上の人が下に求めるならば、下は乃ち上に給する。豐臣太閤以來租稅の法が「三分の二は地頭之を取る、三分の一は耕民之を取る」といふ昔戰國の世でさへこれでこと足つたのである。今と國初とを比べれば人は多く、田野は闢けてゐる、租稅の收入は侯國皆昔より多い。だが、費用も昔にまさる爲めか百計聚斂の道も興つてゐる。聚斂が興ればその影響を第一に受ける者は農民である。農業は元來困難が多い。これに加ふるに百の徵求が爲され終に生を終ることができなくなれば農民は本務をすてて工商勞働等の方面へ走り山や水をわけてどうでもして財を求めようと血眼になる。農民がかく多技に走ると、本業を怠らざるを得ない。深く耕し、厚く培ふことが出來ぬ結果、肥えた地は瘦せ、廣き田畑は狹くなる。到頭本業から離れて流亡して遊民となるのが無數だ。今水に走り、山を分けて百計して財を求めたとしても、これ亦聊かの飢渴を救ふことすらできなくてその得たところは半ば侯家に渡るのである。それを受け納むるやうではあるが、これも償金の爲めであるから實は侯家も農工も畢竟富家の役をとるものである。されば戰國の頃は日夜鬪爭が止むことが無かつたが、手を措いて人に命を授くべきでないから、人は防禦を主として僧も俗も農も商もその實は武士となつてゐた。今や昇平の世の中であつて唯苦しむことは金銀の上にあるから上下おしなべて只一意專念、金銀に眼を注ぐ。玆に於てその形はさまざまかはるが心は孰れも金錢上の一得一失に支配されてゐる。この一得一失の理勢は誠にいかんともすべからざるものだ。それで今天下の事勢を見ると何方を尋ねても地方人は年々に減じて都會人は年々增加する。これは爲政者の最も著眼を要すべきところである。思ふに天下國家を有する人からすれば、豐饒といふことは全く金銀の上のことを意味しない、金銀を有して豐饒とするのは商賈人のことである。政治を執る人でも商賈の術を以て國を治めんとする人もあるが、財利と經濟とは同じく利を求むる者である、只その差別は商賈は利を以て利とし經濟は義を以て利とする點にある。昔、支那の鄒國の穆公は鳧雁の類を蓄つたが、粟を餌とせず、粃を常用したので粃がなくなつた。それで役人がこれを民間に求めると、百姓

下の財日日地より出でて民生の用をなす物なり其品は水穀魚鹽を始とし麻絮竹木等の類より工人の造り出せる物なり夫權を執る人は輕重已か手に從ふむかし亂世武猛の俗も今は昇平游惰の民となれり是に由て忌へば今たとひ權金銀に歸したりとも大有力をして衡を持せしめば終に其錘を移し人儉勤に復り廉恥禮讓の風興るもなどか難からん輕重に從つて權を移す人は其病根をしるにありもし其本に本づかず唯金銀を增減して其平を持せんとならば懸る者の重きを見て錘を重くし輕きを見て錘を輕くするの道にして無術と謂つべし宋の頃錢ひたすらに增す程に後は小く輕くなりて絪環錢とて縷に貫き水に入るれば縷に引れて沈みやらぬ程になり物の價しきりに貴くなりて後には一斗の米價一萬錢にいたりしとかや近年錢は鐵となり銀は鈔となる程物價騰躍する者絪環錢と同意にて衡傾きし故なるべしもし其柄を正さずして其低昂に從んとならば金銀愈多くして富家は則愈金を積み貧家は則愈債を重ねん惡幣盛んに世に行はるれば精金皆隱る夫富家大なる者は巨萬を儲へ小なる者は數金を儲へ小家は數金の家にかり大家は巨萬の家にかる借

は粃一石を粟二石となら交換しようと申出た。役人は「それでは損だ」と思ひ、穆公に粟を餌とせんことを願つた。公はこれを聞いて、「このことはお前たちの知つたことではない。百姓は平生、手を働かして耕し、日に背を曝して雜艸を取り、勤勞するが、それは鳥獸の爲めにしてゐるのでない。粟米は百姓の上食だから、鳥の爲めにそれを濫費するわけにゆかぬ。だから、お前は眼前の小計を知つて大計を知らぬと云ふものだ。周の諺にも囊貯中を漏るとある。主君は百姓の父母だ。倉にある粟をとつて、これを民の手に移したとしても、これは民に取つても、彼等の爲めの粟とならう。鳥が若し鄒の粃を食すれば、自分の粃を食するのだから迷惑を民に及ぼさないで濟む。だから粟の方を減少しないやうに心がけて民をいたはらねばならない」と諭した。國家を有する人が國家を一身と見る時は、民に財があるのと我に財あるのとその何れにも隔りがない。が、商賣人は人に財を有せられるのを損とし、自身が有するのを得とするこの理から推してゆくと君がその民を疎外すれば、民の物を已に得て自分の得とし民に財を散ずるとひどく損したと思ふやうになる。だから百計千慮聚斂に力めるわけだ、『詩經』に「彼に遺秉あり、此に滯穗あり、これ寡婦も之れ利とせん」とある。政治上の正しい行き方に於ては利を下のものに遺さなければならぬ。一視同仁は君たる者の利益である。田地をはしばしま

る者は本錢にして收る者は息を幷す小民の數金大人の數萬其勢倂くして同く富家の爲に金銀を毆者なりそれ叢には雀聚り淵には魚聚る叢に雀の聚るものは鶻外よりこれを毆ればなり淵に魚の聚るは獺の瀨よりこれを毆ればなり淵叢の力にて魚雀は聚らざれども鶻と獺との魚と雀とを好む故に却て淵叢に聚るなり金銀も其如く富家の力には中中聚る者に非ず債家これを毆る故に倍蓰什佰亘萬に至る抑債家何故にこれを毆るぞなれば歲計の常に足らざるより成る歲計の足らざるは奢侈賄賂昔に倍して制度未立ず節儉の道行はれざればなりされば　神君三河にましませし頃は知行とれる人の妻迎へにも負木と云ものありて歸には被かづかせ負木に腰懸させて迎へし由なりさる故に慶長十一年丙午江城修造ましましして次第に人民聚り會ひ蕃昌斜ならざりしかども竹輿とても武家願ひ達して用ひ町家などの用にはあらず槁本甚三郎と云しは上の御用をも達する大家にて後髮剃て深入と云ひしが珍しく澀張りの竹輿を免され不案内なれば下乘場に乘こし日附に糺され難義に及けるを朽木民部少輔殿見て橋本に下るべき物がのり物で

でも籍して居れば、水難が多く、貨幣を鑄るのには雜物を加へると盜鑄が多い、租税を重く上にとれば凶年には諸民が凍餒して、大いに府庫倉廩を費し盡して終ふ。と云つて急に農業に力を盡すといふことは出來ない。かくては孝悌を誘ひ禮儀を勸める暇もないから、上に內難多く下に訴訟が繁く、財を費し、人を損する。それは國主が細民の利を以て利とし民と利を爭ふことから生ずる弊だ。これ國主の利が商賣人の利と同じからざる所以である。故に府庫の財を有用に費して國の風俗をよくするよう勵し農を勸め、工を利して財貨を國人に積ましめなければならない。これ等を費えと見て勘定して元に合はなくても損とならいやうにありたい。私はこれを市井の心と云ふ。この故に財を生ずるの大道はこれを生ずる者多しといふのは天下の財が日々に地から湧き出て民生の用をなすものである。その品は水穀魚鹽を始めとし、麻絮竹木等の類や工人の造り出せるものである。政治をする人は輕重何れも思ひの儘だ。當今は曾て亂世武猛を主とした風俗も今は昇平遊惰の風を帶びそれにつれて金權に誇る富豪を生じたが今たとひ權力が金銀に歸したとも非常に有力な政治家が出て、公正な行き方をしたら終にその錘を移すことが出來て人が勤儉に復り、廉恥禮讓の國がおこるのも難しいことではないだらう、依つてことの輕重に從つて、政治上の權力を發揮する人は、社會の病根を知らねばなら

深入をして咎められけりと戯に挨拶有てすみし由なり是等も其類なきよりかかる過はありしなり唐も大和も昔は馬なりしがいつしか轎盛になり今は下下まで用る樣になれり馬は人の乘るものにして人は人の乘る者にあらずと古人これを畏れき心あらん人は慎むべきことなりこの比は三絃など云者は男子はもとより士商の婦女に至りて自奏でる樣のことはなかりし由なり何事も國初はこれにひとしかりしかば財用の費もさまで無りしなるべし今諸侯の家何れか節儉の令なからん唯滔滔の勢かへ難く且經濟に掣肘多く或は任ずる所其人にあらず任ぜらるゝ者其才を伸ることを得ざればなり是を以て人君はよく識鑒を貴むよく其人を目利して擧てこれに任じては其一盃の才を竭さしむべし掣肘とは其人に物を書せて後より肘を掣なり如何なる能書にても後より肘を時時掣かれては書度に書損じあり書損じさせて其過を忿らるゝこと筆取の難澁なり是をもて人主は人を得るに勞して政をするには逸するものなり事兩ながら全ふし難ければ廉耻の風荒めば人賄賂を好む禮讓の教至らざれば人爭奪を好む制度立ことなければ華奢等を躐ゆ今其

ぬ、もしその行き方が本に本づかず唯金銀を增減しその均衡を保たうとするならば懸ける者の重さをみて錘を重くし、それが輕ければ錘を輕くすると云つた具合で無術の道である。支那宋の頃に錢がひたすら增すにつれ後にはそれが小さくなつて輕く綖環錢と云つて絲に貫いてそれを水中に入れると絲に引かれて沈まぬ程であつた、物價がしきりに貴くなつて後には一斗の米價が一萬錢になつたとか云ふ。近年錢は鐵となり、銀は鈔となつて物價は騰躍したが、かの綖環錢と同じ意味で平衡を得ぬ故であらう。若しその柄を正さないでその低昂を操らうとするならば、金銀愈々多く富家は愈々金を積み、貧家は愈々債を重ねるであらう。惡貨が盛んに行はれゝば精金は皆隱れる。夫れ富家の大なる者は巨萬の金を貯へ、小なる者は數金を貯へ小家は數金の家に居り、大家は巨萬の家に居る。借る者は本錢であつて收める者は利息を合せる、小民の數金は大人の數萬に匹敵するわけだから、結局、富家を富ませる爲めに金銀を狩り集めると云つたことになる。叢には雀がくる、淵には魚が集る、叢に雀が集るのは顫(鷹の族)が外からこれを狩るからである。淵に魚の集るのは獺が瀨からこれを毆るからである。淵叢の丈の力では魚雀は集らぬ。顫と獺とが魚や雀とを好む故に却つて淵叢に聚るのである。金銀もその如く富家の力のみでは中々集るものでない。債務者がこれを毆るから巨萬

好むを好むに任せ躐るを躐るに任せ限なき人の慾を極り有る財寶にて償んことを求めば天下の大山高岳をして盡く金を出さしむるとも米粟布帛の至寶を生ずる者をして其業を棄しめ衣食器械にもならざる物に人巧を費さしむるにすぎず是を以て今たとひ金銀をして天下の米粟布帛の如く多からしむとも世唯債數の多くなるまでにて至寶の生路は目々に薄く人の賑ふことは有るまじきなり但しかくかたむきし勢に處するには金持てるよりよきはなし金を持つべき樣は乾沒にしくはなし此故に今の富人は十に九は商賈なり其一つも外面は異なる樣にても其實皆廢居をつとむるに繼て世を渡るに易きは游手也士農工は貧しき者也利を見て趨り害を見て避るは天下通態なり故に今の士農は本業をうたてに思ひなし十に二三は工商にうつり十に二三は工商にうつり十に三四は遊手に移れば從前よりは生も遂げ易き程に目を逐ひ年を逐ひ農を去の勢やまず農減ずれば財減ず財減ずれば國本薄し是郡縣の籍年を逐て減じ市肆の人目に隨て增す所なり我見聞する所を以てこれを云に此あたりにても七八十年以前は京畿大阪の邊より兒女をつれ下り家

の金が集るのだ。一體、債家が何故にこれを毆るかと云ふに歲計が常に足らぬ爲めだ。歲計が、かく足らないのは奢侈賄賂が昔に倍して行はれ、これを制する制度が未だ成立たず節儉の道が行はれぬからである。德川家康が三河に居られた頃は知行をとる程の人でも妻を迎へるのにも負木といふものがあつて、婦に被きかつがせ負木に腰かけさせて迎へたといふ。されば慶長十一年丙午江戸城が修造されて次第に人民が聚り繁華にはなつたが、竹輿とても武家が願ひを出して許されてからこれを用ひ町家などでは用ひなかつたものだ。橋本甚三郎と云ふ人は上の御用達をした大家の主で、後剃髮して深入と云つたが、珍しく澁張の竹輿に乘ることを許されたが、この方面の規則に不案内の爲め、目附に咎められ難儀した。折柄、朽木民部少輔がこれを見て、「橋本に下るべき者が乘物で深入をして咎められけり」と挨拶したので事濟みとなつた。これも當時から左樣した過ちはあつたのだ。日本も支那も昔の交通は馬であつたが、いつしか轎が盛んになり、今は下々迄これを用ひるやうになつた。「馬は人の乘る者であつて人は人の乘る者でない」と古人がこれを畏れたが、心ある人はこの點を思つて慎むべきだ。その頃は三絃などは男子は元より士商の婦女などは自ら奏でるやうなことはなかつた。何事も國初はかういふわけであつたから、財用の費えもさまで無かつたであらう。今諸侯の家は

につかひて近き頃迄も多かりき今其子孫猶幾も有り今はこれより只管に上ることばかりにて下ることはなし事小なるに似たりといへども時勢の變見つべし財貨控掣の權已に商賈に屬すれば米粟布帛魚鹽百品生ずるをそしと皆都會の地に向て輸す輸するあとは貧家は初より衣食に足らず富家は纔に其年衣食の料を留めて賣る程に農家の餘計地を拂つて空し輸するむかふは財寶四方より輻湊する程に諸貨常に餘計を貯へ其糶を停むれば國郡食に乏し糴を拒む目は郡縣金銀を仰ぐ所なしこれを以て郡縣餘計なければ惟是を都會に恃む都會又之を巨商に恃む郡縣已に財寶に餘計なき程に貧民皆本業を捨てて金銀を營む營み得て穀郡縣にかへる時價前より貴く量前より減ずこれに加ふるに送迎の費又幾ぞや都會はかく財寶に富る地なり游手とも日日夜夜に聚り會ひ文彩刻鏤音聲技巧人の目を奪ひ心を蕩かすことを巧み衒ひて良民力を盡して生出する者を費し人の囊中の物を釣り出すこゝに於て釣る者と釣らるゝ者と同じく民の膏血を貪り費す然れば金あれば成ざることなしと金を悅ぶ心は吾儕小人一身を安んずるの計にして天下國家を有する人

何れも節儉の令を發しないものがないのだが、唯々滔々の勢ひ、如何ともし難く且つ經濟に掣肘多く、或は適任者がなく或はその人があつてもその才を伸し得ないのだ。されば人君は鑑識を貴んで一度信じたら何處迄もその人を信じ、それに全權を委ね、その才能を十分竭さしめて掣肘してはならぬ。掣肘とは人に物を書かせ乍ら後より肘を掣くのだから、どんな能書でも左樣されると書く度に書き損ずる。左樣して置き乍らその過ちを咎めるのだから堪らない。だから人主は人物を得るのに心を勞して政をとるのに逸し易いものである。以上の事を二つながら全うし難いからそれにつれて廉恥の風が荒めば、人は賄賂を好み、禮義の敎へが至らなければ人は爭奪を好む。制度が立たなければ、華奢が竝を踰える。今その好みを好に任せ踰ゆるを踰ゆるに任せたならば限りない人の欲を極めるものである。これを財寶で償ふことを求めるなら天下の大山高岳から盡く金を掘出さしても駄目だ。米粟布帛の至寶を生ずる者をしてその業を棄てしめ、衣食器械にもならざる物に人功を恣にせしむるに過ぎない。だから今たとひ金銀をして天下の米粟布帛の如く多からしめても、世上唯々負債の數が多くなるばかりで、至寶の生路は日々に薄くなり、一般人が賑ふことは斷じてない。但しかくの如き傾いた勢ひに處するには金を持つのが一番である。金を持つには財利が一番だ。この故に

の悅びとすることにあらず金銀の通用は天地よりして觀る時は左の物を右に移し右の物を左に移すに過ずして布粟器械昨日までなきものの今日は天地の間に出來て造化の功を贊け饑渴を愈やし寒暑を禦ぐの功に何ぞたくらぶべき然れば此至寶を少しにても天地の間に生殖し少しにても天地の間に存し民生生生の用を助くる程天に事ふる務はあらじ唯勢偏にして郡縣に來歲凶饑の備なく都會には游手食り費すの煩ひ有て之を傷むの人に乏し故に民の風に梳り雨に沐ひ星に耕し露に耘りし膏血を文彩刻鏤音聲技巧の用に貪り盡し其生ずる者をして悶ぢ其費す者をして播さしむ意ある者豈藁目して憂ざるべけんや若これを憂ふる人あらば一郡一縣を治んにも何とぞ人を一人にても農にかへし一人にても游手を本業に本づかしめ財貨他より入るの路を開き器械他に求めざるべきこそ肝要なれ一國を治むる人は他國を以て壑とせざることを得ず白圭と禹と勢同じからざることありさて人の農に就き工に務め士上に廉耻禮讓の風を誘ひ民下に華靡淫奔の俗を改めば游手はいつしか少くなるべし是を生之者衆、食之者寡、爲

富人は十中の八九は商賈である。その一つ〳〵は外面は異るやうであるが、その實は皆他の家の廢れることに力めてゐるのだ。これに次いで世を渡り易いものには遊手なるものがある。一體、士農工商は貧しいものである。が、現時は利を見て趨り害をみて避けるのは天下の通態である。故に今の士農は本業を轉じようと思つて、十に二三は工商に移り、十に三四は遊手の方に移る。移れば前より生活もし易いわけだから逐年農業から離れるものが多い勢ひはやまない。農業が衰微すれば國の財源が減ずる。財源が減ずれば國本が薄くなる。これ逐年地方居住者を減じ都市の日增しに人口の增す所以である。自分の見聞するところで云へば、今住む邊りでも七八十年以前迄は京畿大阪の邊から兒女をつれきて家に使つた。今その子孫も猶ほ幾らかゐるがこれからは只上に許りゐて田舍へ下つてくることはない。事は小さいやうだが其處に時勢の變が見られる。財貨控掣の權が已に商人の手にあるとすれば、米粟布帛魚鹽等が地方に生ずると直ぐに都會の地に向つて輸出される。その後は貧家は初めから衣食に不足であり、富家は纔かにその物貨の半ばを衣食の料に留めて賣るわけだから農家の餘計は地を拂つて空しい。一方都會は財寶が四方から輻湊して諸貨が常に餘計に貯へられ、その取引を停止すれば國郡は食物に缺乏するし、取引を拒む時は地方は金銀を他から仰ぐところが

之者疾、用之者舒と云乃利用のことなり用を利する者は其生を厚ふせんが爲也論語に富之と云もの乃厚生なり今市肆の日日に榮へ人の彌增を蕃昌とはいへども郡縣の人も增し市肆の人も增さば實の蕃昌なるべきに郡縣の人は次第に減じ市肆の人のみ次第に增し侍らんには豈感慨の一つならずや王制有國の道を說て國無九年之蓄曰不足、無六年之蓄曰急、無三年之蓄曰國非其國也、と謂へり當今の世は控挈の權金銀にありこれを以てたとひ人家餘んの布、餘んの粟、有てもこれを蓄へんとする人はなし是貯へざる人の罪にあらず金銀の便利他貨に勝ればなり便利已に他貨に勝る誰か重高く運惡く息を生ぜざる他貨を貯へんやこの故に民擧て他貨を賣り貧者は富家の舊債を償ひ富家は貧者の求めを待つ吾儕小人勢しからざることを得ず吾儕小人の利とするところ有國者の利とする所にあらず其故如何んとなれば國中の米粟布帛金銀に兌えて都會に輸す然して其兌る所の金銀細民の手にとゞまらざれば凶饑軍國の慮何を以てか之に供せんさるにより今の世は一年立と云者なり一年立と云ことは一年に生ずる地上の財を一年に費し盡すなりもし天ない。其處で地方に餘裕がなければ唯之を都會に恃むのみである。そして都會は又これを巨商に恃むわけである。地方で已に財寶に餘裕がないとすれば貧民は皆本業を捨てて金銀のことを營む。それを營むことができて、穀物が地方にかへる時は價は前より貴く、量は前より減ずる。更にその送迎の費用は幾程であらう。都會はかく財寶に富める地である。遊食の徒が日夜集合して、文彩刻鏤、音聲技巧人の目を奪ひ心を蕩すことを巧んで良民が力を盡して生出する物を費し、人の囊中にある物を釣出すわけだ。茲に於て釣るものと釣らるゝものと同じく民の膏血を貪り費すことになり、金さへあれば成らざることがないといふわけになる。金を悅ぶことは我等小人一身を安んずるに留まることで天下國家を有する人の悅びとするところでない。金銀の通用は天地からしてみる時は左の物を右に移し、右の物を左に移すに過ぎないので、布帛器械の昨日までなきものが今日は天地の間に出來て造化の功をたすけて飢渴を醫やし寒暑を禦ぐ功とは較べることが出來ない。この至寶を少しでも天地の間に殖やし、少しでも天地の間に保存して、民の生々の用を助けることが天に事へる一番の務めだ。唯勢ひが一方に偏して地方には來る歲の凶作飢饉に對する備へがないのに對して、都會では徒食の輩が貪り費す怖れがあつてもこれを心配する人に乏しい。民の風雨の中に耕し耘りとつた

下永安の爲にこれを憂ふる人有らば金銀を只彼方此方へ處替へさすることを省き米粟布帛生植畜藏の道を謀るべし其年に生ずる者を空しく輸し盡し都會游手の娛樂に供すること惜むべきの甚しきなり古人は三年の蓄なきをだに國非其國と云しなり然るを稻登る時は麥民間に盡き麥熟する時は粟民間に竭く民いかでか荒歲を凌ぐことを得ん誠に一得一失の理にて昔金銀少かりし世は諸貨の通利あしかりしかばこれを運び盡さずして凶饑諸災の備も有き今金銀多く諸貨の通利自由になりしかばこれを都會に運び盡して舊穀新穀に及ぶこと能はず故に今捺掣の權をとる者は有金の家之を歛聚すれば上下財盡く竭くこれを以て名は諸侯米粟を有する者にして其實は富商に幷せられて纔の臣民を扶助するに難ず米粟はもとより滿易き者にしてもし一年豐熟する時は穀は食料に贏るものなり贏る所を畜れば四年に備ふべし是を賣り盡すに至りては豐年の後の年凶年の後の年に異なることなし是天下の良民金銀の爲に游手の奴隸となる所なり布帛米粟は諸貨交易に便ならず便ならざるを以て金銀の用廣し是を以て金銀の用は急にして布粟の用は緩し緩膏血を華飾の用に貪り費し盡してしまふのだ。かくして生產を減少させ、消費を增倍するのは大いに憂ふべきことだ。若しこれを憂ふる人ならば一郡一縣を治めるにも何とかして一人でも農にかへし一人でも遊食の徒を本業につかしめる。そして財貨が、他から這入る路を開いて器械その他を求めるといふことが肝要だ。一國を治める人は他國を以て自國開拓の地とすべきだ。通例治水については自國のみに資した白圭を惡く云ふが、場合によつては、禹の如く自他を益し得ないこともあるのだ、さて人々が農につき工を務め、士が上にあつて廉恥禮讓の風を勵まし、人民が下にあつて華靡淫奔の俗を改め除いたならば遊民はいつしか少なくなるであらう。これを「生ずるもの衆くして之を食ふもの少し之を爲すもの疾くして之を用ふるもの舒がなり」と云ふのだ。乃ちこれ利用のことで、用により利益を得るのはその生を厚うせんが爲めである。「論語」に「之を富ます」と云ふのは乃ち厚生といふことだ。今商市が日々に榮え、人口の增すのを蕃昌とは云ふが、地方の人も增し市肆の人をも增してこそ實の蕃昌であるべきなのに地方人は次第に減じ、市肆の人のみ次第に增して行つたならば、これ慨歎に堪へぬ次第でないか、王制有國の道を說いて「國に九年の蓄なければこれを不足と云ひ、六年の蓄なければ、これを急と曰ひ、三年の蓄なければ、國その國にあらずとする也」と

きを置て急なるを先んずる勢然らざることを得ず故に布粟にはことを足れども金銀たらぬ故布粟を貯るをば損と見て足るも足らざるも布粟は家にとどめぬ故金銀に富る人も米粟に餘りなき事は相似たり用多ければ借人多し借る人多ければ錢神足無ふして飛ぶ用少ければ借人少し借人少ければ錢權衰えて飛騰の用殺ぐ錢權衰ふれば布粟畜ふべし布粟畜ることを得て今年の熟以て來年の饑を禦ぐべく今年の布以て來年の寒を禦ぐべし有國の人は强に己か府庫に物を積まぬとて貧しきとは云難し昔亂國の頃は下民も農桑の暇無かりしかどもそこの籠城こゝの對陣と云に相應の兵糧は有りしとなり今は昇平の世にして纔に朝覲屬役のみなれども其臣僚の扶持にだに乏し萬一邊陲の警もあらば何を以て、祖宗の意に答へ國家百年の恩に報ぜん遠き慮なければ必近き憂あり有國者の急務何れか是より先ならん四民は之を有國者に仰ぐ有國者は是を有天下の人に仰ぐ天下の勢は有天下の人のなす所にして有國者の力の及ぶ所にあらず一國の勢は一國を有する人のなす所にして士民の力の及ぶ處にあらずよく權をとる人は能勢をつかふ勢をつかふは譬ば砂

云つてゐる。當今の世は控掣の權が金銀の上に握られてゐる、それでたとひ人家に餘りの布、餘りの粟があつても、これを貯へようとする人はない。これは貯へない人の罪ではない、金銀の便利が他貨に勝つてゐるからである。便利が已に他貨に勝るとすれば、誰も重高く運び難い而も利息の生じない他貨を貯へよう筈があるまい。だから民は擧つて他貨を賣り、貧家は富家の舊債を償ひ、富者は貧者が金を借る求めをまつものである。我等小人もさうなり易い。そして我等小人の利するところは有國者の利するところではない。そのわけは國中米粟布帛を金銀にかへて都會に輸出する。そして兌換した金銀が細民の手に止まらなかつたならば、凶飢に對し軍國のことに對する慮をどうして爲すのであるか、故に今の世は一年立といふのである。一年立といふのは一年に生ずる地上の財を一年に費し盡すことである。もし天下永安の爲めにこれを憂へる人があるならば、金銀は只彼方此方へ書替へらるゝことを省き、米粟布帛の生產貯藏の道が謀られるわけである。只その年に生ずるものを空しく輸出し盡して都會の徒食の輩の娛樂に供することは甚だ惜しいことだ。古人は「三年の蓄すら無ければ其の國に非ず」と云つた、然るのに稻に穗が登る頃は麥が既に民間に盡き麥が熟する頃は粟が民間に竭きてゐる。かくして民はどうして荒歲を凌ぎ得ようぞ。誠に一得一失の理であつ

を盆中に淘るが如し左に走らしめんも右に走らしめんも皆手中にあり然らば文に走らしめんも質に走らしめんも利に赴かしめんも義に赴かしめんも金銀を貴くするも布粟を貴くするも良民多からしむるも游手多からしむるもなすに從ふ者なり天下一年立の勢は有國者の回らすべきに非らざれども一國の勢は豈一國の勢あらざらんや其術卽生之者衆くこれを食む者少く之を爲る者疾く之を用る者舒なるにあり今は天下太平にして恩澤天の如くなれば何故かゝる安樂に恥るぞと思ひ回らすこともなく貴きも賤しきも衣服飲食居處交際只日日に華靡に走り有司も俸祿の外賄を恃みて事を辨ずる故田地の租稅も重からざること能はず臣僚の俸粟も減ぜざることを得ず故に農に餘利を見せて人を農にかへし工に力をそへて游手を力に食しめ財貨他國に出ざる樣にと思ふなりもし其病根を見ずして末を追ひ令を下して賄賂を禁じ奢侈をやめんと欲すとも禮樂講ぜず制度立ず民用の足らんことを求むとも綱を結ばずして魚を羨む類なるべし先大勢を治めんには大積りを知るべきことなり蓋十人の耕すを一人にて食し盡し十人の織るを一人にて著盡さば

て、昔金銀の少なかつた世には諸物貨の通利が惡かつたから、これを運び盡さないで凶飢諸災の備へも出來たわけだが、今は金銀は多く諸物貨の流通も自由であるからこれを都會に運び盡してしまへば、舊穀は新穀に及ぶことはできない。故に今控掣の實權を握るものは富裕の家がこれを買ひ占めれば、上下の財は悉く竭きる。これを以てすると、名は諸侯が米粟を有することになつてゐるが、その實は富商に併呑されて纔かの家臣を扶助するのにも苦しんでゐるのだ。米粟はもとより充滿し易いものであるから、もし一年豐作の時は、穀は食料として貯へられるし、凶年に對しても備へられる。然るにこれを賣盡すに至つては、豐年の後の年も凶年の後の年と異るところがない。これ天下の良民が金銀の爲めに遊食の徒の奴隸となる所以である。布帛米粟は諸貨交易に便でない。便でないから金銀の用が廣い。これを以て、金銀の用は急であつて布帛の用は緩い。緩いものを差置いて、急なるものに先んずるのは止むを得ないことである。故に布帛には事足るが金銀は足らぬから、布粟を貯へるのを損とみて、足るも足らざるも布粟は家に止めない。故に金銀に富む人も米粟は餘りないことに於ては同じい。用が多ければ借る人も多く、借る人が多ければ錢の神は足無くして飛ぶ。用が少なければ借る人も少ない、借る人が少なければ錢の權威も衰へて、飛騰の用も殺がれる。錢

九人は饑寒を免れざるべし此故に一夫耕し耘つて其妻子を養ふべく一婦蠶し繰つて夫子に衣すべし飲食これより美にすぎ衣服これより麗に過れば其人には贏あれども天下に通じては足らざるべし有力の人は匹夫と同じかるべきにはあらざれども細民の爲に慮るに於ては察せずんば有るべからず爽口は數金を費すにあらざれば一饗に供するに足らず美服は數月の力を用ゆるにあらざれば一衣となすに足らずもし齊民の風俗自然と此積りの外に出でば爭か饑寒に免れんそれ民を治るの道は赤子を保するが如しと云へり君上は父母にして民は則子なり子は甘旨膏膩の病を釀すをも泥土雨露の衣服を損ふをも知らず有るにまかせて用ひ仕まふ者なり民もその如くちと耕して餘資有れば色色のことを思ひ出して企て僧巫の徒緣を募り游技の輩間を覗ひ工人結構をなし國の富む方に心のつく者にあらず故に何程の仁政を行はれても湯を以て雪に沃ぐが如く財貨はとどまる者にあらず故に子の爲に甘旨膏膩をひかえ雨露泥土に衣服のぬれざる樣に節制を加えざれば給する者は暇なく用ゆる者は災をなす災を身に受くといへども節制を加ゆる日は父母を怨み泣き號ぶなり細民は已一身當前のことのみを見て大勢を見ざる者なれば或は一己に不便利或は情慾に伸びざれば嬰兒の父母を怨むる如く左や右興じて人心を動搖する者なり小利を謂て大利を害する者なり此時英斷の君にあらざれば其臣に任ずることあたはず剛毅の臣にあらざれば其業をなす事能はず是を以て政に制度を立ること甚だ要にして膚たゆまず目逃がざる人にあらざればなし得ることに非ず又制度に過つことあれば物を害すること限なければ假初にも立易きことにも非ず鄭の子產政をせしに都鄙有章、上下有服、田有封洫、廬井有伍、大人之忠儉者、從而與之、泰侈者、因斃之、かば興人之を誦して取我衣冠而褚之、取我田疇而伍之、孰殺子產。吾其與之と云しが三年を經ては皆誦して我に有子弟、子產誨之、我有田疇、子產殖之、子產而死、誰其嗣之と云子產死するに及んでは人皆慈母を失ふが如くに思ひしとなり唯上にも目前にて人によき人と謂れんことをはかる人は非常の功を立得ぬ者也非常の功を立る者は非常の才を抱く非常の才を知る人は非常の君なり君才を用る日譽る者半、謗る者半、利も又半、不利も亦半也

の權威が衰へれば布粟を蓄へるであらうし、布粟を貯へる事ができて、今年の作物が來年の飢を禦ぎ得るのであり、今年の布が來年の寒さを禦ぐことにもなる。有國の人は强ひて自分の府庫に物を積まぬとて貧しいとは云ひ難い。昔、亂國の頃は下民も農桑の暇もなかつたけれども、其處の籠域、此處の對陣と云ふのに相應の兵糧はあつた。今は昇平の世であつて纔かに參覲交替とその屬役とのみではあるが、その臣僚の扶持すらに乏しい。萬一國境が危險となつた場合、何を以て祖先の意に酬ひ、國家百年の恩に報いるか。遠き慮りがければ必ず近き憂ひがある。有國者の急務これより他にない。四民はこれを有國者に仰ぐ、有國者はこれを天下の人に仰ぐ、天下の勢ひは天下の人の爲すところであつて、士民の力の及ぶところでない。能く權をとる人はよく勢ひを使う、勢ひを使ふのはたとへば砂を盆中に淘るやうなものである、左に走らすも右に走らすも、利に赴かしめるも義に赴かしめるのも金銀を貴くするのも布粟を貴くするのも、良民を多からしめるのも遊人を多からしめるのも、なすまゝである。天下一年立の勢ひは有國者の回らすべきものではないが、一國の勢ひは豈一國の勢ひにあらざらんやである。その術は卽ち「これを生ずるもの衆し」でこれを食む者が寡く、これを爲す者は疾くして、これを用ふるものがゆるい上にある。今は天下泰平で恩澤は天の如くであるから、何故かゝる安樂に耽るのかと思ひ回らすことも無く、貴きも賤しきも衣服、飲食、居所、交際、只日々に華美に走り、役人も俸祿の外に賄をたのんでことを辨ずる故、田地の租稅も重くしないわけにはゆかず、臣僚の俸粟も減じないわけにゆかぬ。故に農に餘分の利をみせて、人を農にかへし、工業に力を致して遊人をして勞働して食を得せしめ、財貨を他國に出ださゞるよう考ふべきだ。もしその病根を見究めないで末を追ひ、令を下して賄賂を禁じ、奢侈をやめようと思つても、禮樂講ぜず制度が立たぬのみならず民用を十分にしようとしても網を結ばないで魚を羨む類に墮するであらう。先づ大勢を治めるには大積りを知るべきである。十人が耕して作るものを一人で食ひ盡し、十人で織るものを一人で著盡したならば、九人は飢寒を免れぬ。この故に一夫が耕してその妻子を養ひ、一婦は蠶をかひ絲を繰つて夫や子に著せるとしよう。飲食がこれより美にすぎ、衣服もこれより美麗となれば、當人には滿足し得られようが、天下に通じては足らぬ。有力の人は匹夫と同じやうにあつてはならぬが、細民の爲めは特に考へるところがなければならぬ。先づ民を治るの道は赤子を育てるやうなものだ。君主は父母であつて民は則ち子である。子供は何の考へもなく有るに任せて物を用ひるものである。民もその如く、ちと耕して餘りがあれば色々のことを思ひ付いて

苟識明に斷果なるに非ざれば事を優り人を損ふに過ず故に古より君臣の値遇を以て難しとすること故ある哉故に制度を立てざれば仁惠も益なし夫れ產自ら養ふに足らず或は餘計に迸散の路あらば有餘不足の相去ること近し王制に量入以爲出とは上王公大人より下輿儓薪隸に至るまで經紀の要語と知るべきなりさて天下一年餘計の布粟は皆富商に歸し富商これを都會に輸すここに於て郡縣空乏なり凶饑全く都會に仰ぐ都會空乏の變あらば郡縣給する所なからん都會の物を畜る常平倉に非ざれば本郡縣に給する爲にもあらず畢竟游手どもの餘餘なり此故に郡縣布粟に餘計なく都會積粟に蠹蟲あり穀は滿易して減り易しさるによつて一年年登れば天下に穀滿つ一年年儉なれば郡縣穀盡く滿れば人人糧乏しからぬ程に各職に就て本業に歸せんことを思ふ盡れば糧に仰ぐ所なき程に壯者は庸作に餬ひ弱者は乞丐に餬ふ本業を捨てて餘業に餬ふは勢の已むことを得ざるに出でて其本心にあらず故に年登るを見れば遠客の歸舟に逢ふが如く餘業を捨てて本業に歸らんとする程に庸作する者希にして餘業を務る者怠るここに於て諸價皆騰貴す然ふして金を徒費し、國の富む方に心を向けるものでない。故にどんな仁政が行はれても、湯を雪に注ぐやうなもので財貨は積まれるものでない。從つて子の爲めには鹽梅をみてやり、雨露には衣服を加減して節制を加へてやらなければ物資を給するものは暇がなく用ひる者はこれが爲めに災をなすに至る。災を身に受けるといつても節制を加へる時は小兒の如く父母を怨んで泣叫ぶのが細民の常だ。彼等は己一身の當然のことばかり見て、大勢を見ざるものであるから、左右に當り散して人心を動搖させるものであり、小利を目がけて大利を害するものである。この時、英斷する君主でなかつたならば、適當の臣に適當の處置をなさしめることが出來ぬ。又剛毅の臣でなくてはその重い任務を果すに堪へぬ。だから政治上、制度を立てることが肝要で露たゆまないで萬事見逃さぬ人でないと中々英斷し得ない。萬一、制度がよくないと、物を害することが大きいから輕々には爲し難い。鄭の子產（衞の大夫公孫僑）が政治をした時「都鄙に章あり、上下に服あり田に封洫あり、廬井に伍あらしむ。大人の忠儉なるものに從ひて之を與へ、奢侈なる者をば因りて之を斃す」といふ風にしたので、民衆は子產を謳歌して「我衣冠を取りて之を褚（たくは）へしめ、我田疇を取りて之を伍にす。孰か子產を殺さん。吾それ之に與みせん」と云つた。それから三年經つと、又子產を謳歌して、「我に子弟あり、子

一年穀熟せざれば雨後潦水忽涸るるが如く又本業をすてて餘業に走ることに於て諸價又賤し畢竟民一年立になりて定れる業の餬ふに足る者なければ也夫人情誰れか本業に歸し安きに就くことを願はざる者あらんや是郡縣に凶饑の備なく一度は本業につき一度は本業を離るればなりもし眞の太平を得んとならば金銀の通利を貴ばず餘布餘粟民家に畜へしむべしたとひ惡年にあふともみだりに本業をば失ふまじ本業を失はざれば價に貴賤なきこと能はずとも又格別のこともあらじ是故に國家の乏しきと云者は金銀通利の快きに布粟をつむの人なければなり布粟を積む人なき者は金銀を借る人多くして金銀の利布粟に倍すればなり利布粟に倍して運輸畜藏布粟より便りなりたとひ嚴刑を以てこれに臨むともこの勢にあたるべからず今の世の態をみるに庸作をはじめ其他の營につけても多くは皆其人の本業にあらず困苦の爲に金銀にせめられて己ことを得ずして姑くここに雨やどりをし雨の晴間を待つなり空少く晴れ行けばやがてふるべき空とてもいかで久しく其本陰には留るべきさる程に少しく衣食に休息あれば女子は嫁し男子は本業を求產之に誨ふ。我に田疇あり子產之を殖す。子產にして生せば誰かそれ之を嗣がん」と云つた。子產が卒去すると人々は皆慈父を失つたやうに思つたといふ。只上にも目前でよき人と云はれようと謀る人は非常の功は立て得ぬものだ。非常の功を立てる者は非常の才を抱く、非常の才を知る人は非常の君主である。君が才能ある人を用ふる時は、譽める者が半、謗る者も半分あらう。利も亦半、不利も亦半である。故に、尙も明識果斷でなかつたならば事を亂し人を損ふにすぎない。故に君臣の値遇を以て最も難しとしてゐるのも故あることだ、それ故、制度を立てなかつたならば仁惠も益がない。王制に「入るを量つて以て出づるを爲す」といふのは上、王公大人より下、車夫僕婢に至るまで守るべき言葉だ。さて天下一年の餘分の布粟は皆富商の手に歸し、富商はこれを都會に輸出する。玆に於て地方は缺乏を來たす。そして凶饑の場合、全部都會に助けを仰ぐ始末だ。都會に缺乏の變があつたならば、地方から給するものがないだらう。都會を物を蓄へてゐるのは常平倉でもなければ、本より地方に給する爲めにもならない。畢竟遊人の徒食するに任すことになる。この故に地方に餘分の布粟がなく、都會の倉庫には蠹蟲があるといふわけで穀は滿ち易くて減りやすい。それで年々天下には穀が滿つる、それに從つて年々地方に穀が盡きる。滿つれば人々は糧に缺乏しない間

め其務めに服せんことを願ふなり其務めに服せんことを願へども程なく年の荒るるに赴き餬ふの營みに懸ることもよの木陰を立出でさきの木陰に雨を凌ぐの心なり人に貧富の隔てこそあらめ豈人情に異らんや已に人情に異なければ老たる親、馴來し妻子には朝な夕なみもしみえもし打語らひ親しき友どちとひ問はんことを願はざる者あらんやしからば孰か其本業を棄て餘業につき撚娛を厭ふて勞苦を好む者あらん身を賣て人の奴隸となることは勢やむことを得ざればなり然れば世を平觀する時は庸作の人は本業を求めてかへる程悅ばしきことなし治國を以て任とする人は庸作の徒の本業につくが本懷なり今貧民の田は富家に幷せられ貧家は富家の賃田を耕す程に富家他手を假らざることあたはずも家他主を恃まざることあたはずもし陰陽變理の手を經て經界平に歸して穀祿郡縣に三五年をさゝゆること得富衆兼幷せず貧民本業に歸し游手勤むる所あり餘夫よく良民に左右して餘事に務むる所あらば本業他業を交交とらず物價高下あり とも粗定準の有るべきあらんすべて物には居り合ひと云者あり今の癖つきたるよりみれば海内皆富は各々職業についてゐて本業にしようと思ふ。が盡きると糧を仰ぐところがないので壯者は傭作に出で、弱者は乞食となつて生活する。本業をすてて餘業で生活しなければならぬのは勢ひの止むを得ないことであるがその本心ではないのだ。それで年貢が濟めば遠客が舟師に遇ふたやうに餘業をすてて本業に歸らうとする。其處で傭作する者は稀で餘業を務める者は怠る。茲に於て諸價は皆騰貴する。然し一年穀物が熟しない時は雨後潦れが忽ち涸るゝやうに又本業をすてて餘業に走る。其處で諸物價は又下落する畢竟民が一年立になつて定まつた業で生活するに十分でないからである。人情としてたれか本業につき、生活の安定を希はぬものがあらうか。而もその動搖するのは、地方に凶饑に對する備へがなく農民がその都合で一度は本業につき一度は本業を離るゝからである。もし眞の太平を得ようとするのならば、金銀の通利を貴ばず、餘分の布粟を民家に蓄へたがよからう。たとひ惡年にあうてもみだりに本業を失ふやうなことはあるまい。本業を失はなかつたならば價に貴賤がないといふわけにはゆかぬが又格別のこともなからう。この故に國家の物資缺乏を生ずるのは金銀通利のやうな具合に布粟をつむ人がないからである、布粟をつむ人がなく、金銀を借る人が多いのは金銀の利が布粟に倍するからである。利が布粟に倍して而も運輸蓄藏するには布粟よりも便利であまば奴婢の買ふべき無く傭作の人なくして却て難義なるべく思へども其居り合ひを見ぬ故なり今の貧民一年は本業に走り一年は餘業に赴く故に物價發動して定らず本業人あり餘業つとむる所あらば四海富んで人苦むのことあらんや古仁德天皇の朝には三年までみつぎをゆるさせ給ひしかど宮牆あれたるばかりの沙汰あつて其外さはれることも聞ず今の世の心をもて觀ればせ怪しき程に思はるれど漢の文帝の時竈錯が計に從ひ給ひ民に十二年租稅の半を給ひ明年終に民田の租稅を除き給ひしも猶大倉の粟は陳陳相よりしとなり和漢古今の相違はあれど地物を出すこと依然として人の身の長も縮らず腹の量もかはらねば陰陽變理の手をかばん人人六府の眞貨たるを覺り九年の水七年の旱とも終にささふる道なからんや今は唯六府の運となるべき金銀還て主となり平準立ち難く豐年には豐年に苦み凶年には凶年に苦む仁人位に在ること有て豈豐年を苦むことあらんや稱錘平を得ざる目は重き物を懸くれば錘さきへすべり輕き物を懸くれば錘あとへ隕るなり今奴婢諸物價の貴賤事微なりといへども關係小にあらず國家の權を執れる人最心を注ぐる。たとひ嚴刑を以てこれに臨んでも、この勢ひを制するわけにゆかぬ。今の世の中をみるに傭作を始めその營業にしても、多くは皆その人の本業ではない。困苦の爲めに金銀にせめられて姑らく雨やどりをしたので晴間を待つのである。空が少しく晴れてきたらやがてはふる空であつてもどうして久しくその木蔭に留まつてゐようぞ。さうしてゐる中に少しく衣食に休息があれば女子は嫁にやり、男子は本業を求め、その務めに服することを願ふものであるが、人に貧富の差こそあらうが、人情に異りはない、已に人情に異るところ無しとすれば、老いたる親、目馴れた妻子には朝夕見もし見えもし打談らひ、且つ親しい友との交遊も願はぬものがあらうか。左樣だとすると、誰かその本業を捨てて餘業に就き、歡樂を厭うて勞苦を好むものがあらうぞ。身を賣つて人の奴隸となることは止むを得ぬからだ。然れば世を客觀する時は傭作の人が本業を求めてそれに歸る程悅ばしいことはないのだ。治國を以て任務とする人は傭作の徒が本業につくのを本懷とすべきである。今貧民の田は富家に併呑され、貧家は富家の賃田を耕すといふわけで富家は他手を假らなければならぬのだし、貧家は他主を恃まなければならぬわけで、もし陰陽變理の道を辿つて、政治が公平に行はれ、經濟界が平靜に歸し、穀祿が地方に三、五年をさゝゆることを得たならば、富家に兼幷されることなく、

べき事なり庸作の人の遽に價を增すことは吾儕身の爲に憂ふることにして有國者の說ぶべきことなり其故は此機に乘り小民をして本業に歸らしめ兼幷の道を察し農をして專力を耕耘に歸せしめ荒たるを闢き堤防を脩し彼寒苦の細民をして老たる親、馴來し妻子と優游せしめ同じく太平の餘澤に浴せしむべき機あればなり其說ぶべきを憂るは衡の持し難きに苦しめばなりかくして人本業にへることを得ば民力專農桑に歸し地力盡すことを得て地の物を生ずることますます多くして男女餘布餘粟有り金銀偏重の勢なく各其力を以て金銀を蓄へ然して暇日孝悌忠信の敎を施せば人米粟布帛の貴きを知り金銀通利の物たるを知り廉耻禮讓の風興すべし慈愛惻隱の情養ふべし夫人人足る所あれば食まれず衣られざる金銀を誰あつて息を出し借る者あらん借る者なければ金銀を貯る人も游手となりて產業に成難き故これも各四民の務に本づくなり金銀通利の上より觀れば有金の人は最有用の人にして造化を贊くる上より觀れば頗る游手と相類す造化の功を贊くること士の太平を守ると農工の物を造り出すと商賈の有無を通ずる外皆游手なり游子勝てば四民の業つかる四民の業つかる貧民も本業に歸し、遊人も働くところがあらう。餘夫が良民に伍して餘事を務めてをつたならば本業他業をともに執られて物價の高下にほゞ定準があるべきだ。凡て物には居り合といふものがある。今の人からみれば海內が皆富んで奴婢の買ふべきものがなくては却つて難儀とならうと思ふであらうが、それはその居合を見ぬ故である。今の貧民は一年は本業に走り、一年は餘業に赴くので物價は定まらぬ。本業、餘業共にその人を得て務むるところがあつたならば、四海は富んで人が苦しむことがあるまいではないか。昔、仁德天皇は三年間、貢物を赦免されたが宮殿が荒れたといふ話だけで、その他に別に障りがなかつたやうである。今の人の心を以てすれば不可思議とも思はう。が、漢の文帝の時、鼂錯の建言を用ひて民衆に十二年の間、租稅の半を與へることとし、尙明年、終に民間の租稅を免除したが、それでも官庫の粟は澤山あつたさうだ。和漢古今の相違はあつても地上の作物を出すことは依然としてゐて、人間はと云へば、身の丈が縮まるわけでなく腹の量がかはるわけでもない。陰陽變理の手をかるなら、人人は六府(水火木金土穀)の眞貨なるを悟るに至らば、九年の洪水、七年の旱魃も支へ得られよう。今は只六府の運びとなるべき金銀が却て主となり、標準が立ち難く、豐年には豐年に苦しみ凶年には凶年に苦しむといふわけだ。仁人が位にあれば國本終に弱し今天下の勢末を追て金銀の便利を知り其息を積んで游手とならんことを冀ひ米粟布帛を賤んで餘分を家に蓄るの道を知らざる程に上下市井の心になりて久安の計に暇なくここに於て僧は佛を賣り巫は神を賣り學者は道を賣り醫は藥を賣り形はさまざまかはれども心は商賈に非らざるはなしかくまで久しく人の心に染たる金銀なればたとひ聖人出たりとも一朝一夕に金銀の輕く六府の重きをば知しめ難かるべし然りとて金銀を一切に除き去て治をなせとにはあらず何とぞ費用多き所の故如何とたづね借るべき天下の源を塞ぎ有金の家をして天下の百貨を網することを得ざらしめて諸侯の國小康を得四民其業を樂むことを得べし是平準の要領なり金銀もと美物國家を有する人は布粟金銀府庫に滿ち下をして兼幷偏重の勢なからしめば用を通ずるの能まことに諸貨の及ぶところにあらず軍中の捷利民間の必用有國者のかぐべき者にあらずそれ金の山にある土石の精英にして至て得難し至美至重萬國皆望をこれに屬す然ればこれを得んもの土石に如く思はんこと巧の勞疲を察せず上造化の精英を貪り國を傾け家を有する者は國を有する者は家を破る且各國ればどうして豐年に苦しむことがあらうぞ。稱錘が平を得ない時は重きものをかけると、錘が先きへとすべり、輕い物をかけると、錘が後へ落ちる。今奴婢諸物價の貴賤はこと微なりとは云へ、其關係は小でない。國家の政權を執る人は最も心を注ぐべきことだ。傭作の人達が、俄かに價を增すのは我等身の爲めには憂へることであつても有國者の悅ぶべきことだ。其故はその機に乘じて小民をして本業にかへらしめ兼幷の道を察して、農をして專ら力を耕耘に向はしめ、荒地を拓き、堤防を修築し、彼の寒苦に苦しむ細民をして老父母、妻子と安樂に生活せしめ、同じく泰平の餘澤に浴せしめる機會が作れるからである。かくして人が本業にかへることができたならば民力は專ら農桑に歸し、地上の作物益々多く、男女夫々餘計の布粟があり、金銀偏重の勢ひがなく、各々その力を以て金銀を蓄へ、そして暇々に考悌忠信の敎へを施したなら、人々は米粟布帛の貴さを知つて、金銀は單に通利の物たるを知り、禮讓廉耻の風が起り、慈愛惻隱の情が養はれるであらう。人々が足るところがあれば、食ふことも衣ることもできぬ金銀を誰れが利息迄出して借りようぞ。金を借るものが無ければ金銀を貯へてゐる人も遊び手となり、それが產業に成り難いからこれも各々四民の務に本づくやうになる。金銀通利の上からみれば有金の人は最も有用の人であつて、造化の上よりみれば頗

其境界あり界を出る者は再たびかへらず最愼まざるべけんや五事略に載せたる所を考るに長崎一所、官より海外へ出づる所、正保五年より寶永五年まで六十一年の間金二百三十九萬七千六百兩餘にして銀三十七萬二千二百九貫目餘銅寛文三年より寶永五年まで三十六年の間一億一萬一千百四十九萬八千七百斤餘此計の外なる者其幾と云ことを知らず大概これに三倍して我國現在に遺る者三分の一と云へり今猾黠の商賈一身の利をはかるが爲にしばしば金銀を海外へ洩すこと疾むべきの甚しきなり嗚呼金銀世の害をなす者ならんや人の金銀をして害をなさしむる也夫良醫は烏啄砒石を用ひてもよく病を癒す增して諸貨運輸の能船よりもとく車よりも速やかなるをや然れば則金銀は多くば多き程猶よかるべし是を以て衡を持する人權柄を得ざる時は多ければ多きに傾き少ければ少きに傾きて同じく人を苦しましむもし權柄を得る時は多少共に平を得るなり其故は六府の用に達し兼幷偏重の煩なければなりこれに就て世の費用を考ふるに古はなくてすみし物の今は去り難き物奢侈なども昔はなかりしとかや有る遊人と似てゐる。造化の功を贊けること、士の泰平を守ること、農工の物を造り出すこと、商賈の有無を通ずることその他は皆遊人である。遊人が勝ては四民の業は疲れる、四民の業が疲れゝば國本は終に弱い。今天下の勢ひは末を追つて金銀の便利を知り過ぎ、その利息を積んで遊食することを冀ひ、米粟布帛を賤しんで餘分を家に貯へるの道を知らない。上下皆卑賤の心になつて久安の計を謀るだけの暇がない。玆に於て僧は佛をうり、巫は神を賣り、學者は道をうり、醫者は藥をうつて形はさま〴〵に替るけれど心は商人でないものはない。かくまでに久しく人の心に染み込んだ金銀であるから、たとひ聖人が出ても、一朝一夕に金銀の輕く、人間の尊重すべきを知らしめることは難しいだらう。さりとて自分は金銀を一切に除き去つて改革せよとは云はぬ。何とかして費用の多き所以を究明して借るべき天下の源を塞ぎ、有金の家をして天下の百貨を引寄せて了ふやうなことがないやうにして、諸侯の國が小康を得たならば四民はその業を樂しむことができるであらうと思ふ。これ平準の要領である、金銀はもと〳〵美物である。國家を有する人は布粟金銀が府庫に滿ちてゐて下の者をして、兼併偏重の勢ひをなからしめたならば、用を通ずるの能はまことに諸貨の及ぶところではない。軍中の捷利、民間の必要は有國者の缺くべきものでない。それ金は山にあつて土石

益無益につきあらあらこれを數ぞふるに天文地理の學西洋を精しとする雖疽金瘡の治又相亞ぐ木綿火器望遠鏡自鳴鐘の類最重寶をなす天教、黴瘡、最疾むべし然して天教は已に根を絶つ黴瘡は世に蔓衍す薫は二百年の物茶は千年の物人家日用の具となる髮膏又古に見えず然ふして今や太平百六十年酒食技巧淫靡の風古にあらず妓樂博奕人を誤る者數を知らず若上古質樸の世に比せば民生日用の費と半せんとす豈見れざるべけんや

天文地理の學然最粗なり漢は寢精し然れども思量模索に出でて實測にうとし西洋は器を制し舟に駕し足跡至らざるの地なしこに於て天地を見ること掌葉の如し實に千載の大愉快なり西洋の醫治内を略して外に詳なり西洋に漢人藩圍の外に出づ漢人の治はむかしの人五運六氣五臟六腑など云ことを云始めしより終にこれに誤られて實測に暇あらず西人は意を實測に用ゆ故に人の臟腑筋骨の如きも數刻して眞に試む故に最精詳を盡す蓋天地に條理あり未條理を得ざれば實測ありといへども是を彷彿に得て猶眞に遠し故に造化を詑に至ては漢に木火土金水と云然に地水の王であるから仲々得難い、至美至重、萬國皆望をこれに屬してゐる。然らばこれを手に入れんもの、それを土石視するなら下、人々の勞疲を察せず、上、造化の精英を貪り、國を有する者は國を傾け、家を有する者は家を破る。且つ各國にその境界があつて、界を出る金は再び歸つてこない。最も愼まなければならぬ。

「五事略」に載せたところによると、長崎だけで官から海外へ出たのは正保五年から寶永五年迄の六十一年間に金二百三十九萬七千六百兩餘で、銀は三十七萬二千二百九貫目餘、銅は寛文三年から寶永五年まで三十六年の間一億一萬一千百四十九萬八千七百斤餘、この計算の外幾何あるかわからぬ程だ。大概はこれに三倍して我國に遺るものの三分一であると云ふ。今狡猾の商人が一身の利を計る爲めに度々金銀を海外へ密輸出すのは實に怪しからぬことだ。嗚呼金銀は世の害をなすものであらうか、人が金銀をして害をなさしめるのである。良醫は烏喙や砒石を用ひて能く病氣を治ぼす、まして金は諸物貨の運輸を能くする舟よりも速く、車よりも速かに役立つに於てをやである。されば則ち金銀は多ければ多い程よいであらう。それ故、政治の局に當るものが能くこれを支配しなければ、金が多ければ多きに傾き、少なければ少なきに傾き、何れにしても民人を苦しめる。若し能く支配が屆くなら多少共、物價の上に平衡を保つことが出來る。と云ふわけは所謂六府の用を達し、兼幷偏重、富豪を跋扈せしめることとなからしめるからだ。

火風と云西洋に水火土氣と云共に伯仲の說なり木綿は桓武天皇の頃崑崙國の人持來りしが殖せず文祿年中より廣まりて民生に益あること五穀につぎ桑麻の上に出づ鐵砲は後奈良帝天文癸卯八月薩州種子が島の主時堯これを蠻人武良叔舍並に喜利志多陀孟太と云二人より傳へ泉州堺橘屋又三郎と云者鍛錬の法を委しく傳へ今にたえず豐後にはこれに先達つと二年辛丑に當つてフランスクサベイと云者來りたり是は西洋波邏多伽兒と云國の者にて後天竺にて死したり唐の書には佛來釋古者といへり石火矢もこれが豐後に傳へたり始てうちし時衆皆潰えなだれて肝をけしたり因て國崩しと名付たり武良叔舍、佛來釋古者は皆一人にてフランスクスの轉音なるよし白石先生の說なり尤據とすゞしさて人これを大友亡國の兆といへり昔より銀漢などは水精など云て唯氣の樣に思ひたり近頃望遠鏡渡りて皆星なることを知れり蓋混地の體圓にして海水これに湛ふ其内大壤二つあり一つは北に在て東西に長し一は中に當つて南北に長し北にある壤を三大洲とす西を歐邏巴和人エロツパトモ云卽西洋也喝蘭地なども其中なり東を亞細亞唐日本天竺など其内也東西の中間なるを漢人利未亞と云西洋の人はアフリアと云中に當る壤を二大洲とす南を南亞墨利加洲と云北ヲ北亞墨利加洲とす又南大海の中墨瓦臘尼加と云地あり昔西洋の人見つけてこれを加へて六大洲と云しが追追尋ね見し所殊の外の小島ともいへり因て大洲五とす亞墨利加の地は大概此國の下に當れり北亞墨利加の内新伊斯把儞亞と云國有りこれは西洋の伊斯把儞亞とりて此名を加へたるなり慶長十五年の秋この新伊斯把儞亞の商舶風に放たれて我國に漂ひ着きたり官より其船を修理し資糧を具し放ち還さしめ給ひしが同じき十七年の夏其國より使船を遣はして恩を謝したり其時の禮物として自鳴鐘を獻じたりこれ自鳴鐘の始めなり是等の類は傳へて重寶とする所なり天主敎西洋の人はキリステアンと云和人は切死丹と云漢には明の隆慶萬曆の頃泰西の利瑪竇と云者明へわたり浙江府の内にて荒地の有りけるに一字を作り學文し書など著し人を誑しけるに追追龐廸我と云

これについて世の費用を考へると昔はなくて濟みしものが今は去り難きものが多い。佛敎は長い間行はれてゐるが、裳瘡に至つては昔はなかつた。有益無益の物について、ざつと考へると、天文地理の學は西洋の方が詳密で癰疽金瘡を治するにも西洋が優れてゐる。それから木綿、火器、望遠鏡、自鳴鐘の類も中々重寶だ。唯天敎（クリスト敎？）黴瘡は最もいけない。前者は根が絶つたが後者は、はびこるばかりだ。煙草は二百年の物、茶は千年の物で人家日用の具となつてゐる、髮膏も亦昔はみえない、そして今や泰平五六十年酒食、技巧、淫靡の風に至つてはこれ又昔見ぬところだ。妓樂博奕等人を誤るものは數知れない、もし上古質朴の世に較べれば、以上、奢侈その他に費すところが民生日用の費の半に達しよう。畏れ謹まねばならぬ。

天文地理の學、印度が最も粗である、支那は稍々精しい。然し思量模索に出て實測にうとい。西洋は器械を作り舟に駕して觀測に從ひ足跡至らざるところがない。玆に於て天地は掌上の菓子の如く見られる、實に千載の大愉快である。西洋の醫學は内を略して外に詳かである。支那の醫學は昔の五運亡氣五臟六腑など云ふことを云ひ始めたのでついこれに誤られて實測に暇がなかつた。西洋人は意を實測に用ひた。故に人の臟腑筋骨の如きも實際に解剖してその精詳を盡してゐる。蓋し天地には條理があり未だ條理を得なければ、實測が有つてもこれを彷彿に得るが、その眞には遠い。故に天地の造化についても漢に木火土金水の說がある、印度には地水火風といふ說がある、西洋には火水土氣と云つて、これに似たりよつたりの說である。木綿は桓武天皇の頃、崑崙國の人が持來りたが、殖えなかつた。文祿年中から廣まつて民生活に益あることは五穀につぎ桑麻の上に出てゐる。鐵砲は後奈良帝天文癸卯八月薩州種子島の主時堯がこれを蠻人ムラシユクシヤ竝にキリンタダマウカと云ふ二人から傳へて泉州堺の橘屋又三郎と云ふ者に鍛錬の法を皆傳して今に絶えない。豐後にはこれより先二年辛丑に當つてフランスクスサベイと云ふ者が來た。これは西洋ポルトガルと云ふ國の者で、後印度で死んだ。支那の本には彼のことをフランスクスといつてゐる。石火矢もこれが豐後に傳はつた。始めて打つた時、衆人は皆膽を潰し心を冷やした。其處で國崩しと名づけた。フランスクも、ムラシユクシヤも同一人でフランスクスの轉音であるとは白石先生の說で據るに足ると思ふ。人はこれを大友亡國の兆だと云つた。昔から銀漢などは水精などと云つて唯氣のやうに思つてゐたが近頃望遠鏡が、渡つてきてこれ等が皆星なることを知つた。地球も圓形であつて海水がこれに湛へてゐるのである。その内、大陸が二つあ

者又來り金銀など授てすすめける故次第に其道廣まれり此方にては佛來釋古者豐後にて其道をすすめしより起りて其流を汲む如漏法師、因果居士、無遍など云者專此道を以て大友義鎭を誘かず大友深く之を信じて筑紫の神祠、佛院この時多く毀廢に及ぶ此事大樹光源院義輝に聞え如漏法師を召し織田信長をして其法義を糺さしむ信長淀の屋鋪に於て庶の口にて其狀を聞き直に樫の棒にてこれを擊殺し其首を梟せらる義鎭大に怖れ大德寺より眞齊和尙を招き祝髮して休菴宗鱗と號したりされども其流波たへず秀吉其民を惑はすを忿り文祿の頃伴天連六人伴類二十餘人を召捕り肥州長崎に於てこれを磔にす因て海外の市舶を停めんとありけれども長崎の民歎き請に因て其事やみにきされど其道を誘ふ者たへず寬永十四年凶徒肥前島原に聚りて官命を拒む翌十五年春凶徒誅に服しぬ其後天教を奉ずる諸國の市舶通ずる事を許さず禁を冒して戮に陷る者前後に通じて二十八萬人其法終に絕たり黴瘡相思同じく西洋より入て今にたえずカルタなども其國の物なり蓋煙草の其始は

る。一つは北に在つて東西に長い、一つは中程にあつて南北に長い。北にある陸地を三大洲といふ、西を歐邏巴、日本ではえろつぱとも云ふ、卽ち西洋である。ヲランダなどもその中である。東に於ける亞細亞、支那、日本、印度などはその內である。東西の中間のものを支那人はリビアといつてゐる、西洋人はアフリカと呼んでゐる、中に在る陸地を二大洲とする、南を南アメリカと云ひ北を北アメリカとする又南大海の中メカラニカといふ地がある。昔西洋人が發見してこれを加へて六大洲と云つたが追々探險してみるに小島から成つてゐた。依つて大洲は五つとなる。アメリカの地が大體その國の下に當る。北アメリカの中ヲハイスハニアと云ふ國がある。これは西洋のイスパニアの名をとつたものである、慶長十五年の秋、ヲハイスハニアの商船が風にふかれて我國に漂著した。官からその船を修理し資糧を積んで放し還したが、同十七年の夏、その國から使船を派遣して恩を謝してきた。その時の禮物として自鳴鐘を獻じたのが自鳴鐘の始りである。これ等の品物は重寶として傳へられてゐるところだ。天主教を西洋人はキリステアンと云ひ、日本人は切支丹と云つてゐる。支那には明の隆慶萬曆の頃、泰西の利瑪竇といふ者が明に渡り、浙江府の內で荒地を發見し其處を開拓しながら、會堂を建て讀書、著述しつゝ傳道した。追々龐迪我など

南亞墨利加の內亞勒利西那と云地あり其海中に十八の島あり總じてこれをマリカランダと云其內の一島セントヘンセントと云この島より創めて作り出せる草也我國には天正の初の頃とも又慶長の十年に渡りしとも云りうえ始めたる事は肥の長崎櫻馬場に作りそめしより廣まる由西川子はいへり酒色の二つは古人の訓戒そなはれば今更改め云に及ばず煙草は酒などの樣に人の心を蕩かす者には非らざれども其味辛く其氣臭くこれを服する者は口氣甚惡し一能を見ず男女婬奔の媒をなし動もすれば火を失して大なる者は數千家に至る然して今の失火半は烟火に屬す土地を費し糞壤を食み金帛技巧費用甚廣し國家其失を監み給ひ慶長十三年令を下して禁じ給ひしかどもやまず元和二年には烟草畠につくることを許さず禁を犯す者は牢舍其處の代官過料五貫文其村中の百姓一人につき過料百文宛と命ぜられしかどもやまず終には高貴の玩となりぬ黴瘡烟草誠に天主の遺毒最にくむべき者也茶は烟草に比すれば雅物なり害も亦淺きに似たり茶は嵯峨の天皇弘仁六年畿內及丹波播

いふものも來て人民に金銀など與へて歸依を勸めたので次第にその道が廣まつた。我國ではフランスクスなる者等が豐後でその道をすゝめこれを信じた如漏法師因果居士、無遍など專らこの道を大友義鎭に勸めた。大友氏は深くこれを信じたので筑紫の神祠佛院はこの時多く毀廢した。このことを大樹光源院義輝が聞き如漏法師を召し織田信長をしてその法義を糺問させた。信長は直ぐに樫の棒で法師を擊殺し、その首を梟した。大友義鎭はこれを聞いて大いに怖れ、大德寺から眞齊和尙を招き、剃髮して休庵宗鱗と號した。然しその流れは根絕しなかつた。秀吉は天主教が民心を惑はすのを怒り、文祿の頃、伴天連六人とその同類二十餘人を召捕つて肥前長崎で磔にした。依つて海外商船の市舶をも停めやうともしたが、長崎の民は歎き請ふたのでそれは沙汰止みとなつた。然しその道を傳へるものが絕えない。寬永十四年、凶徒は肥前島原に聚つて官命を拒んだ。翌十五年春凶徒を誅服し、又その後天主教を奉ずる諸國の商船の通商をも許さなかつた。禁を冒して死刑に處せられた者前後を通じて二十八萬人でその法もにはかに絕えた。

黴瘡相思（クヤマ）は同じく西洋から入つたのであるが今に絕えない、かるたなどもその國のものである。煙草の初は南アメリカの內アルカリカナと云ふ地がある、そ

磨等に頒ち植しめ給ひし由なれども僧の榮西歸朝の節種子を携えて栂尾の明慧上人に贈られしより幽人清賞の具となりぬ足利の公方慈照院義政は天下の政治に倦み職を其子義尚に讓り東山東求堂に閑居し銀閣を作りて鹿苑公の金閣に比し猿樂を修し茶禮を玩ばれしより其道次第に世に廣まり其道の名人輩出せり中に太閤秀吉の比堺千利休其譽れあり古器の價など定めしに後には私慾出來りて己と親疏好惡により新しきをも舊しとし贋をも眞となし心のままにふるまひしかば太閤怒らせ給ひからめてこれを誅せられぬ其道にとりては奇代の人と稱すれども名敎中よりこれを觀れば大に間然すべき人なり此時二條院の御陵洛北舟岡山にありけり然るを利休その御塔石をとりよせて茶亭のかざりとし餘れる石を以て手水鉢などに用ひしが如何思ひしにや蹈石にまではせざりし由なり昔周室衰えたりし時楚子鼎の輕重を問しだに清議これを許さずいかに朝家の權武家に歸したりとて天つ日嗣は未地に墜ず宗易が茶天下の覩を極むとも伯夷は酌じと覺え侍る文王は土中の枯骨を得給ひても深くこれを埋め給ひき王者の政は孟春の月には掩骼埋胔事、恩枯骨に及ぶ也加藤淸正は身武人たりと云へるも南面して孤と稱す人の仰ぎ瞻て法をとる所也然るに山科元慶、寺に有し僧正遍照の塔を本國寺勸持院に引て燈籠となし喫茶の興を助すけしとぞ悖逆を論ずれば利休の下につくといへども其任を論ずれば其身君師の責あり國祚の長からざるも故あることにやと思はる茶義政に成りて利休に至る其人を見て其道を思ふべし高貴茶を賞してより終に天下日用の具となる精麁品を同じふせずといへども終に一日もすつべからざる者となる近來髮に膏を用ると神祠に燈籠を點ずると同じく廢しがたきの品となる猿樂は昔は唯怪しくをかしきことなりし出し能と云者になりぬ武家古樂を廢せしかば今は武家の樂となりぬ然れば當時小笠原の禮と聊禮樂に備ふべしさて三絃は本の小山の詞に三絃玉指雙鈎手、小字題贈玉娥兒、とあれば元の頃よりあるよし貝原いへりされどわが豐中に傳る所は永祿六年大友氏より石松檢校を朝鮮に使の海中に十八の島がある。總じてこれをマリカランターと云ふ、その內の一島をセントヘレセントとも云ふ、この島から始めて作り出た草である。我國には天正の初めの頃とも、又慶長の十年に渡つたとも云はれてゐる。植ゑ始めたのは肥前の長崎櫻馬場に作り出したものが廣がつたといふことを西川子は云つてゐる。酒色の二つは古人の訓戒がそなはつてゐるから、今さら更めて云ふに及ばぬ。烟草は酒などのやうに人の心を蕩かすものではないが、その味は辛く、その氣は臭い。これを服するものは口氣が甚だ惡い。一つも功能がない。男女淫奔の媒介をなし動もすると火を失して大は數千家を燒失するに至る。今の失火の原因は半ば烟草に屬してゐる。土地を費し糞壤を食み金帛技巧の費用もこれが爲めに大きい。國家はその失費を憂へて、慶長十三年令を下して禁じた、けれどもやまない。元和二年には烟草を畑につくることを許さないで禁を犯す者は入牢させ、そのところの代官に過料五貫文、その村中の百姓一人につき過料百文と令したけれどもやまなかつた。終には高貴の玩びともなるに至つた。黴瘡、烟草は誠に天主敎の遺毒で最も惡むべきものだ。茶は烟草に比べると雅物である。害もまた淺いやうだ。茶は嵯峨天皇弘仁六年、畿內及び丹波播磨等に頒ち植ゑられたけれど、僧榮西が歸朝の際、種子を携へて栂尾の明慧上人に贈つてから幽人淸賞の具となつた。足利將軍、慈照院義政は天下の政治に倦み職をその子義尚に讓つて東山東求堂に閑居したとき、銀閣を作つて鹿苑公(義滿)の金閣に比したが、當時猿樂を修め、茶道に親んだので、次第にそれが世に弘まつた。同時に名人も續々出た。中にも太閤秀吉の頃、堺の千利休に茶道の譽れがあつて古器の價などを鑑定させた。後には私欲ができて己との親疎好惡により、新しいものを舊いとしたり贋をも眞としたりして心の儘に振舞つたから、秀吉は怒つてからめ捕りこれを誅した。その道にとつては稀代の人と稱されてゐるが名敎中よりこれをみれば大いに慊らぬ人物だ。この時二條院の御陵が洛北舟岡山にあつた。それを利休がその塔石を取寄せて茶亭のかざりとした。そして餘つた石を手水鉢などに用ひたが、どう思つたか踏石にまではしなかつたといふことだ。昔周の王室が衰へた時、楚子が鼎の輕重を問ふたことすら淸議はこれを許さなかつた。いかに朝家の權が武家に歸したにしても、天つ日嗣の威光は未だ地に墜ちない。宗易が天下茶の覩を極めたにしても支那の伯夷の志に至つては知るまい。文王は土中の枯骨を得られて深くこれを埋めたといふことだ。王者の政は正月には骼(ほね)を掩ひ、胔を埋め、その恩枯骨に及ぶものだ。加藤淸正は身は武人であつたが朝廷に向つては南面して孤(侯伯謙稱)と云つた。人の

せしに洋中風にあひ漂流して琉球に至れり其俗蛇を避るとて常に鼓弓を人ごとに彈ず石松これをならひ豐後にかへり此器を制し組など云手をつけて玩びけるに廣まれりともいへり淨瑠璃は小野の於通太閤より昔紫式部清少納言各文を著せり

是に習ひ一書を奉るべきよし承り退ひて自思ふには何れ古人の筆には儔ふべからずと義經東下り矢矯が宿の淨瑠璃御前と云女に懸想して通ひけることを面白ふ作りなして秀吉に奉りしかば御感に入り殊に時の人ももてはやしけるより後には節などつけ色色に昔のことを作り出し西の宮傀儡師と一つになり操と云者になり又俳優これと並び起りて偶をなせり俳優ここに歌舞妓と云妓は女の稱にして今の歌舞妓は男子也慶長以前人僧衣を著て鉦をたたき佛號を唱へて念佛躍と云者ありしに同十九年の頃名古屋山三郎と云者出雲の巫女國と云者に密通して國に刀をささせ頭をつゝんで早歌を教えて舞せけるに倣ひて終に男子女の裝をなし且舞且婬を賣ることになりぬ寛永の頃遊妓の禁有しより殊に盛にして往々女子に

仰いで手本とすべきところだ。然るに山科元慶は寺にあつた僧正遍照の塔を、本國寺勸持院に引てきて燈籠として喫茶の興を助けたとのことだ。悖道を論ずれば利休の下につくとは云へその任を論ずる時はその身は君師の責がある。その國祚の長く續かなかつたのは理の當然だ。茶は義政に成つて利休に至つた、その人を見てその道を思はなければならぬ。高貴の人が茶を賞用されてから終に天下日用の具となり遂に一日もすてることの出來ぬものとなつた。近來髮に膏を用ひること、神祠に燈籠を點ずることは同じく廢し難いものとなつた。猿樂は昔は只あやしくをかしいことであつたのを義政が修正して觀世觀阿彌などが輩出し能といふものになつた。武家が古樂を廢したので今は武家の樂となつた。それで當今小笠原派の禮といふものが聊か禮樂に備はるであらう。さて三絃は元の小山の詞に「三絃玉指雙鉤手、小字題して玉娥兒に贈る」とあるから元の頃からあると貝原氏はいつてゐる。然しわが豐中に傳はるところは永祿六年大友氏から石松撿挍を朝鮮に使させたのに海洋で風にあひ漂流して琉球に至つた、其處の風俗として蛇を避けるため常に鼓弓を人毎に彈じてゐた。石松はこれを習つて豐後に歸り、この器械を製作し、組など云ふ手をつけて玩んだので廣まつたとも云はれてゐる。淨瑠璃は小野のお通が太閤から、「昔紫式部清少納言は

混じて事を過つよつて官頂髮をさらしむ因て紫華巾を製して首飾とす亦宛然として婦人也今復稍く髮を長して昔に復しぬ躍歌舞妓名は猶音にして物は昔にあらずかふやうの物は其大なる物にして其小なる物は擧て數ふべきにあらずさりとて人情の赴く所やむべきにはあらざれども人は上一人より下億兆に至るまで天を敬し天に事ゆることを忘るべからず上の施す所の者は廣ふして下の施す所の者は狹し廣狹施し異なりといへども分に從つて天に事るに於ては異るなし天地之大德を生といへば生に悖るを不德とす故に天地に生生する物を戕賊する事最天に畏れざるべけんや書に無益をなして有益を害することなかれと聖人も警め給へり今の人の弄び半は無益にして有益を害す天地生生の德に悖る事也

最國初に比すれば田野闢けたるも多かるべけれどもそれは又人も增したり今の世に居て古を思へば今節儉を盡すとも猶古の侈れるに齊しかるべし然るをまして遊惰にして奢侈なるをや畏れても猶畏るべきことなり然れば今日庶人の厚生を謀らんとならば唯儉勤廉耻の風

各々文書を著してゐる、お前もこれに習つて一書を奉れ」と云はれたので、退いて思ふに何れ古人の筆には較べられるわけでない。其處で義經東に下つて矢矧が宿の淨瑠璃御前といふ女に懸想して通ふことを面白く作成して秀吉に奉つた。するとその御感に入り、殊に時の人々がもてはやしたので、後には節などをつけて色々に昔のことを作り出し、西の宮傀儡師の一つとなつたり操（あやつり）と云ふものになつたりした。又俳優がこれと竝起つて一緒になつた。俳優を玆に歌舞妓と云ふに至つたのである。妓と云ふのは女の稱であつて今の歌舞妓は男子である。慶長以前人が僧衣を著て鉦をたゝき佛號を唱へる念佛踊といふものがあつたのに同十九年の頃名古屋山三郎といふ者が出雲の巫女國といふ者と結婚して國に刀をさゝせ、頭をつゝんで早歌を教へて舞はしたのに倣つて遂に男子が女の裝をなし、且舞ひ且淫を賣ることになつた。寛永の頃、遊妓の禁があつてから殊に盛んであつて往々女子に混じてことを過つたので官では頂髮を去らしめた。其處で紫華巾を作つて首飾とし、その姿は宛然女であつた。今復漸く頂髮を長くして昔に復した。踊歌舞妓の名は昔であつても物は昔でない。以上は私の目についた大なるものでその小なるものは數へ擧げられぬ。さりといつて人情の赴くところがやむべきではないから上御一人より下億兆に至るまで天を敬

なるべし儉勤廉恥の風興らざるは制度の立ざるよりなり制度は則禮樂の制度なり制度立ざれば禮樂も施す所なし後世の風俗に染み唯利のみこれに慣ひたる人は禮樂の道を說けば迂濶也とて笑ふなりされども國家長久永世平安の道禮樂制度に非れば立こと能はずされば漢の高祖身四夫より興り秦を亡し楚を斃し一時の豪傑を役使すると嬰兒を掌上に弄するが如くなりしかども禮制立ざりしかば宴を賜ふ折節などは群臣功を爭ひ劍を拔き柱を擊ち狼藉如何ともすべからず叔孫通これが爲に弟子と禮を肆はし終に朝議を引しかば一朝肅然として震恐し大に敬ひ謹しめり高祖大に說んで吾迺今日皇帝の貴とするをしるとありしなり高祖は昔の高祖也秦楚を挫きし勢にも及ばぬ所を治るは斯文の德也禮敎は人を未然に治る者にして政刑は罪を已然に戒むる者也已に然るを戒むれば民免かれて恥ることなし未然を治れば恥有て且格し廉恥禮讓の風興らざればいかでか利用厚生の道行れん噫孔子の聖を以てだに行れざりしことなればとかく人の請合ぬも尤也周公は禮樂を制作して周家八百年の基業を開き王莽は禮樂を制作して其身をだに保たざり

し天に事へることを忘れてはならぬ。上の施すところは弘くして下の施すところのものは狹い。廣狹施すところに相異があるとは云へ、分に從つて天に事へるに於ては異るところがない。天地の大德を生といへば生に悖るのは不德だ。故に天地に生々する物を傷ひ盜むものは大いに畏れなければならない。「書物は無益をなして有益を害することがあつてはならぬ」と聖人が警めてをられる。今の人の玩ぶものの半ば無益で有益を害するものであるから、天地生々の德に悖るわけだ。

最も國初に比すると、田野の闢けたのも多からうし、人口も亦增したであらうが今の世に居て古へを思ふと、今日節儉を盡しても猶古への侈れるものと齊からうと考へる。まして遊惰にして奢侈を爲すに於てをやである。畏れても猶畏るべきことだ。今日庶人の厚生を謀らうとするのならば、唯儉勤廉恥の風を守るべきのみだ。儉勤廉恥の風が興らないのは制度が立たないからだ。制度は卽ち禮樂の制度である。制度が立たなかつたならば、禮樂も施すところがない。後世の風俗に染み込んで、只利のみに慣れ切つた人々は、禮樂の道を說くと、迂濶といつて笑ふ。けれども國家長久、永世平安の道は禮樂制度でなかつたならば立たない。だから漢の高祖は身を匹夫から興して秦を亡し、楚を倒して當時の豪傑を使役する

けり禮は其人を待て行はるる者にして其人に非らざれば事を擾るも知るべからずたとひ事を擾るとも擾るは其人の罪にして禮敎の罪にあらず詩にも飲之食之敎之誨之と云論語にも旣に富むこれを敎えんと云孟子にも有恒產者心有恒心、無恒產者必無恒心、ともいへり誠に兒は饑たるに啼き妻は凍えたるに號ばば人夷齊に非ざるよりは孰か廉恥の操を保たん晉嘗て正しく聞き去ぬる荒年小民飢ゆる者ども多かりし中に某の所の一民飢の忍び難くてや有けん人の圃なる蕪拔けるを其主見咎めければ最恥かしく思ひ衣打かづきて臥ぬるが終に食を絕て死しけるとぞ若ばかり狷介の人にても饑寒には操をあやまつなり此處をよくよく考れば罪は人人己が造る樣なれども民に上たる人の德より起ることなり然れば人主を始としてこれに羽翼たる輩自身を責ざることを得んや此故に政は生を厚ふするに在り生を厚ふするが爲に用を利す生薄ければ貪らざることを得ず生厚ければ貪る心うすぐたとへば溺を救ふが如し自水に溺るる時は子溺るるといへども顧ず自舟中に安んずれば猫犬の溺るるも見て打過る人はなし唯勢の足ると足らざ

こと嬰兒を掌上に弄するが如くであつたが、惜しいことに禮制が立たなかつたので、宴を賜ふ折節などには群臣が功を爭つて劍を拔き柱を擊ち狼藉して如何ともすることも出來なかつた。叔孫通はこれが爲めに弟子と共に禮を修め終に朝儀を制定したので一朝は肅然として震恐し大いに敬ひ謹んだ。高祖はひどく悅んで、「今日始めて皇帝の貴きを知つた」と云つた。高祖は昔の高祖である。秦楚を挫いた勢ひにも及ばぬところを治め得るのは斯文の德である。禮敎は人を未然に治むるものであつて、政刑は罪を已然に戒むるものである。已に然るのを戒めれば民は免れて恥ることがある。未然に治めれば恥あつて且つ旨意が行き渡る。廉恥禮讓の風が興らないならば、どうして利用厚生の道が行れようぞ。噫孔子の聖を以てしてすら道が容易に行はれなかつたのであるから、とかくの人の請合はぬのも尤もである。周公は禮樂を制作して周家八百年の基楚を開き、王莽は禮樂を制修してその身すら保ち得なかつた。禮はその人を待つて行はるゝもので、その人を得ざれば、事を亂すかも知れぬ、たとひ事を擾亂しても、亂すのは、その人の罪であつて、禮敎の罪ではない。詩にも「之を飲み、之を敎へ、之を誨ふ」と云ひ、論語にも「旣に富む、これに敎へん」と云つてゐる、孟子には「恆產ある者、必ず恆心あり、恆產なき者、必ず恆心なし」とも云つてゐる。誠に兒は饑ゑて泣き、

るとのあいだなり故に民生厚ふして然して後禮讓廉耻の風唱ふべし民生厚しといへども禮讓廉耻の風興らざれば華奢放恣に赴く華奢放恣なれば用足らざれば又貪る故に賄賂爭奪興るなり夫君は臣の表也臣は君の影也表正しければ影直し表傾けば影斜也君にして身正しからざれば令すといへども行はれずさる程に國家に長として社稷を守るの人は國家は祖宗の國家にして社稷は民生の社稷其一身を奉ずるが爲に非ざるを知べし天地の大德を生と云生の德を害する者乃天地に悖るものなり此故に漢書に背本而趨末、食者甚衆、是天下之大殘也、淫侈之俗、日日以長、是天下之大賤也、とあり人貴賤の隔あれども齊しく天地の子なれば大人も小人も天に敬しみ事るには隔なし天地の大德を害するは最恐るべき事なり然れば各其分に應じ殘をふせぎ賊をいましむべきことなり其事乃經濟也、廼利用厚生正德なりされば利用厚生に何程よき道を得ても已德を正さざれば令する所好む所に反すれば民從はざる習にて禮讓廉耻の風をこらすいかなる良圖善謀ありてもこれを起すに從ひて下吏諸有司金設けの趣向となりこれを餌として惡徒財をつり人妻は凍えて叫ぶとき、人間は伯夷叔齊の如き聖人でない限り、どうしてか廉耻の操を保てやう。自分は嘗てこんな事を聞いた。去る荒年に民の飢ゆるものが多かつた中に某のところの或一人の民が饑を忍びかねたと見えて人の畝にある蕪を拔いたのをその主にみとがめられた。彼は恥かしく思つて衣で顏をかくし臥してゐたが遂に食を絕つて死んだといふことだ。かばかりの人であつても、饑寒には操を過つものである。此處をよく〳〵考へたならば、罪は人々自身が造るやうであるけれども、民に上となる人の不德から起る事である。さうであるから人主を初めとして、これが補佐たる輩を責めざるを得ない。生活が豐かであれば貪る心は薄らぐ、たとへば溺をすくふがやうなものである。自分が溺れた時は子供が溺れてても顧みない。自分が舟中に安んじてゐる場合は、犬猫の溺れるのを見ても打過ぎる人はない。只勢ひの足ると足らないの違ひである。故に民の生活が豐かでそして後、禮讓廉耻の風が興る。民の生活が豐かであつても、禮讓廉耻の風が興らなかつたならば、華奢放恣であつたらば用が足らぬ。用が足らなければ又貪る。故に賄賂爭奪が起るのである。君は臣の表である。臣は君の影である。表が正しければ影も眞だ。表が傾けば、影は斜めになる。君たる人が身正しくなかつたならば、令を出しても行はれるものでない。それから國家に長として

を虐たげ今まであらぬ害など引出し功ならざるのみか世の笑とはなり侍る此故三事利用を初とし厚生を本とし正德を主とす德正しき時は人感化す其指揮水の壑にをもむくが如し何れのことかならざらん君はすなはち陶冶也下は則土鐵也その器をなし用をなさんことは全く陶冶の手中にあり。

〔註〕十二乘　乘は丈、十二には意味がない。

六府　天地の藏の意である。

餓莩　莩とは乞食浮浪の徒。

乾金　鑄金のことなり。

楮鈔　紙幣である。

兌換券のこと、即ち今の

朝覲　德川幕府の採れる諸大名の勢を殺ぐ爲の制度で參覲交替の事なり。

公事屬役　右に同じく諸大名をして幕府の用即ち土木の工事等に當らしめたことを云ふ。

潦水　雨により忽ちたまれる水

社稷　社は土の神、稷は百穀の神、古へ諸侯は封を受くる時必ず社稷を立て祭り、國家と存亡を共にした。因て社稷を以て國家の義とした。

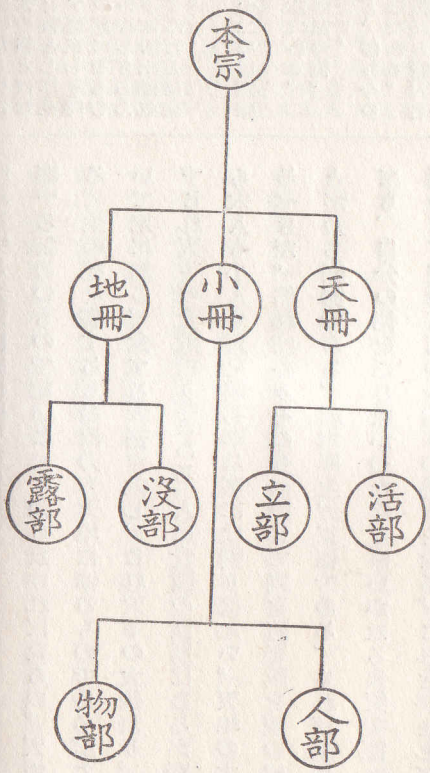
壑　低地である。

社稷を守る人は國家は祖宗の國家であり、社稷は民生の社稷であつて、その一身を奉ずる爲めのものでないことを知らなければならぬ。天地の大德を生といつてゐる。生の德を害するものは乃ち天地に悖るものである。この故に漢書に「本に背いて末に趨る、食する者甚だ衆し、これ天下の大殘なり。淫侈の俗日々に以て長ずこれ天下の大賊なり」とある。人に貴賤の區別はあるが齊しく天地の子であるから大人も小人も天を敬し奉る事には變りはない。天地の大德を害するのは最も恐るべきだ。然れば各々その分に應じて殘を防ぎ賊を戒むべきことである。そのことが乃ち經濟である。利用厚生、正德である。されば利用厚生が何程よき道を得ても、自分の德を正さなかつたならばいかなる良策善謀があつてもこれを起すに從つて下吏諸有司の金儲けの趣向となる。これを餌として惡徒は財を作り人をしひたげ、今までにない害などを引出すことがあるのみか、世の物笑ひとなり、終るのだ。この故に三事（正德、利用、厚生）の利用を初めとし、厚生を本として正德を主とすべきである。德が正しい時は人を感化する。その指揮は水の低きに赴くが如くに行はれる。かくして何のことかならぬものがあらう。君は即ち陶冶である。下は則ち土鐵である。その器をなし用をなすなさんは、全く陶冶の手中にあることだ。

玄語（抄）

本宗

陰陽
天地



物有性、性具物、性與物混成、而無罅縫、故其一也全、物偶體、性偶氣、物與性槃立、而有條理、故其二也偏、性性乎物、物物乎性、故一卽一、一一則一、氣成天、物成地、性具一、體闕一、具一闕二、剖而爲經、一氣一物、對而爲緯、分則二槃立、合則一混成、一徒一則不分合、二徒二則不剖對、一二不徒。立則各焉、成則全矣、是以以剖分一、以對合二、剖則經焉、對則緯焉、經之緯之。條理自分。以錦言之。爲物經緯朱綠、成物鸞鳳華卉、其神則巧婦

本宗

陰陽

一切の物質は自然の性質を有し、一切の性質は物質と結びついてゐる。性と物とは混じ合つて少しの隙もない。故にそれは一であると同時に全である。そして物は體を備へ性は氣を帶びてゐる。物と性とは判然と鮮かに相立つて條理があるから二であり偏である。ところが性は必ず物に著き、物には必ず性質があるからこの二つは飽く迄一に結成される。氣は上つて天となり、物は下つて地となる。性は唯一氣であるが體には限りがあるから一ではない。一である性と一でない體とが分れて經（たていと）を造り、一である氣と一である物とが緯（よこいと）を造る。

性と物とは若し分れゝば二に區別が出來、合すれば一となつて混成される。一が徒らに一であれば、分つたり合はさつたりはしない。二が徒らに二であれば、剖れたり集まつたりはしない。一や二は徒らに存在するのではない。立てば各個に分れ、成れば全一となる。故に分れた一を合し、混成された二を分ける。剖ければ經となり對すれば緯となる。これ等を處理する方法は、自から定

之意匠也。是以錦必一經一緯。神用物成。於是無一緯之不與經分、無一經之不與緯合、合則龍起鸞舞。雖龍起鸞舞。而分則經自與經比、緯自與緯比、是以一匹之錦。性具表裏之二體。巧婦連神。蠶絲立物。人巧不知。至天造之蘊。蓋大物之爲氣物。經緯以通塞、精麁以沒露、經通爲時、而神用事於此、緯塞成處、而物體物於此、是以一匹之錦。經緯物焉、紡織事焉、使龍起於斯。鸞舞於斯、弄表之燦爛、而窺裏之隱幽、經緯相反。類類相比。以察對待之道焉。全錦一匹。表裏兩面。以察剖析之所矣。是以錦則本一、故全、表裏則二、故偏、全則表裏混成、沒罅縫、偏則表裏粲立、見條理、於是一匹之錦。條理整然。鸞羽龍鱗。巧婦不苟也。爰繹龍起鸞舞於經緯。則起龍舞鸞於髣髴。

二之於一。亦一之於一也。是邪非邪元氣之玄開明閉幽。

混則一而粲則二邪。對粲則混亦與粲並立、雖並立、而混則沒粲中、能全一、混有則粲亦爲混成、雖混成、而粲則露混中能偏二、故全亦對偏、而二能合一、於是二之於一。亦一之於一也。故一而伍於二。勢成一一。著痕則見隻也。故性雖具一。與體之闕一並立。立立則著痕。與一自有間。雖有間。性能具一、故其才能融能通、體能闕一、故其用能分能隔、性已性乎物、何亦有體、具闕而後

まつてゐる。織物の例で説明すれば、織れるものは朱や綠の經緯であり、出來上つたものは鸞鳳、華卉のやうに美しい存在で、織るのは織物に巧みな婦人の考へである。この故に織物は一本の經、一本の緯の度毎に、織る人の注意が必要となる。故に一本の緯も經と分れたないものはなく、一本の經も緯と合はされないものはない。經が合すれば龍起、鸞舞と云つた美しい織物となるが、これ等も、若し分れゝば一緯と一經とになる。右の理由から一匹の織物でも、その性質の中に表裏の二體を備へ、織物に巧みな婦人が意匠を凝し、蠶絲がそれを成立たしたのであつて、人巧が自から天地の巧に到達したわけだ。蓋し一切のものが大氣中に在る時には經緯の爲めに通塞し、精粗の爲めに見えたり隱れたりする。經が通ずれば時となつて精神作用を生じ、緯が塞げば場所となつて物體が生じる。故に一匹の織物も經緯が原因となり、紡織の作用を經て恰も龍が起り、鸞が舞ふやうな美を呈する。徒らに表の美のみを見ないで裏面に沒してゐる部分を窺へば、經緯が反對となり、色彩、模樣も同樣となる。これからして一匹の織物にも表裏の兩面があり、剖れたり聚つたりする所以を察しられる。織物は一であるから從つて全、表裏は二であるから從つて偏と云ふ關係を生じる。全であるから表裏が混成して隙間なく、偏であるから表裏がよく解かり、その構成を現はす。この點から一匹の織物ですらも條理は整然として、鸞の羽の一本も龍の鱗の一片も、織物に巧みな婦人は苟もしないのである。經緯の中に龍起り、鸞舞ふのを發見しようとすれば、自からそれ等はその樣子を見せてくれるであらう。

以上、二が一に於ける關係は、一が一に於けるのと等しい。この宇宙一元氣の意味深い趣は玄の玄なるもので明を開き幽を閉ぢると云つた工合だ。

混はつて合成すれば一となり剖れて對立すると二となる。明かに剖れゝば混成したものもその中に揃つて對立するが、竝立つても混成したものは區別中に沒し去つて能く全一となる。混があれば區別も混成の中に交り存するが、しかも區別は混の中から露はれて二に偏する。故に全と偏とは對立し二者が合して更に一となる。故に自分は二が一に於ける關係も、一が一に於けるそれも等しいと云つたのである。前述したやうに一が二に混れば一となり、性は一を帶びても一を闕く體と竝立てば痕を殘し、一とは自から區別される。區別はされるが別物ではない。故にその才態はよく融通する。體は一を闕くからその用途に制限がある。

性は已に物に著いてゐるから、體がある筈がない。具るか闕けるかに依つて種

剖析弗盡、物已物乎性、何亦有氣、亦有氣、精麁而後、對待盡變、配則觀性體並氣物、合則觀性體入氣物、於是二闢反、合一具、分合共一。而一則易焉、一則陰焉、一一之得各名也。闢能體物、而立其二、具能性物、而活其一、剖而散焉、對而合焉、於是具性走陰陽、闢體立天地、陰陽絪縕、神活其天、天地沒露、物立其地、立者活神之鬱浡、活者立物之混淪、故混成其一、而統散全偏、用一二之經、桀立其二、剖對反比、體一一之緯、故溯之、則從條理、而偏偏歸全、望之則反對待而偶偶皆合、以一同居、以二異道、以分均氣以合反物、

本一。而一氣一物相分、一性一

種に變化する。物は已に性に著いてゐるから氣がある筈がない。精であるか粗であるかに從つて變化する。區別すれば性及び體が氣、及び物に竝んで存してゐることがわかり、合すれば性、體が氣及び物のうちに沒入してゐるのを見る。故に二は一となり、分れても合しても共に一となる。そしてその一は陽となり一は陰となつて各々の特稱が附せられる。闢と云ふものは必ず物體についてゐるから二となり、具と云ふものは物の性であるから一となる。剖れては無數になり對しては全部が合致される。茲に至つて具性は陰陽となり、闢體は天地を立てる。陰陽兩氣が盛んに活躍して天を造り（神）地を造り（物）その他のものをも造る。神氣が盛んに起つて萬物を生じ、宇宙を造り上げる。物質は精神により、精神は物質により彼是混成して一を爲し全偏を統散する。かくて一であると共に二である經を使用して二を剖け、一である緯に配する。故にこれを溯れば條理に從つて一々の偏が全に歸し、これを望めば相對せるものが偶々皆合して一となり同じ場所にある。それが分れると二となるから道を異にする。茲に差別があるから平等であり、平等であるから差別がある具合を示し、分（差別）を以て氣を均しくし、合（平等）を以て物の表裏を相反するといふ趣を現はす。

蓋し宇宙の根本は一である。しかもそれが一氣、一物に分れ、一性、一體に相

體相合、試援筆下一畫。縱露一點、則上下既立。上露則下成。表成裏從。表裏居上下之中。上下居表裏之中。上下表裏混成。而一畫立其中。是所以居同道異。氣均物反也。以物反、而露沒自異、以氣均、而對無軒輊、且以小言之。人立兩崖各相望。其爲近遠隱見、則各相同焉、其所近遠隱見、則互相異矣。是以物之沒露、氣之隱見、雖異其道、而同其居、故物之所沒、乃氣之所見、氣之所隱、乃物之所露、陰陽非物。而能體物。故物沒露、則氣隱見焉、二之態也。故氣物爲物則沒露、陰陽爲物則隱見、氣精而沒、物麁而露、麁則氣亦見、精則物亦沒、故麁則見性體爲華液、精則沒天地爲天神、氣得物而陰陽桀立、物以氣而天地混成、以天地混成、而具于陽者、必具于陽、以陰陽桀立、而具于陰、者必反于陽、以陰陽同具、不能異其居、以陰陽反具、不能同其道、桀立則一

合する。今筆を執つて字を書く場合によつて說明すると、縱に點を一つ書いただけでもう自から上下の區別が立ち、上がわかれば下もわかり、表面が區別出來れば裏面も亦これに從ふ。表裏は上下の中に在り、上下は表裏の中に存する。上下と表裏とが混成して一つの線がその中に劃されるのである。これが所謂場所を同じくし、而も道を異にする所以で、氣を均くし乍ら、しかも物が反する道理もこれに外ならない。物が反するから自から見えたり沒れたりし、氣が等しいからその間に優劣はない。更にこの原理を卑近な例で說明しよう。二人の人間が各々相對した崖の上から四方を眺めるのに、二人共遠近の景色が見える點では少しも相違はない。だが見られる景色は各人の地位によつて異るのである。物の沒露、氣の隱見は道を異にし居を同じくすると云ふのはかうした理由からである。故に物の沒するところは氣の現はれるところであり、氣の隱れる點は物が現はれる點だ。陰陽は元來物ではなく、物に必ず附隨してゐる氣である。故に物が沒露すればそれに從つて氣も隱見する。氣には隱と見との二態がある。故に氣と物との關係は沒と露とに等しく、陰と陽とは隱と見とに等しい。氣の精なる部分が沒すると物の粗なる部分が露はれる。物が粗であれば氣も亦現はれ、氣が精であれば物も亦沒する。故に粗であれば性體を現はして液體と

平分混成則一一相融、平分則彼此之發不同、相融則彼此之有不異、是以雖地成于結、天成于散、而地專于結則長而盡天、天專于散、則散消而盡地、散結苟徒。則上無繼散者、下無置結地、移之桔槔。止則持而直、無意以具動之用、動則轉而圓自竢靜之復、移之於確。抑前則後昂、天昂從人之抑、揚前則後、低人揚期天之低、故貪進則忽退、欲退則冥進、長此則彼消、傾東則西欹、

なり、精であれば天地を沒して天神となる。氣が物に附隨すれば陰陽が區別され、物が氣の力を得て天地が構成される。天地の混成した場合に陽を具へるものは必ず陽に與みし、陰陽が區別される際に陰を具へるものは陽に反對する。が、元來陰陽はその具を同じくするからその場所を異にすることが出來ない。が、唯陰陽は具に於て相反するからその道を同じうするわけにゆかない。

陰陽が區別され竝立つてゐれば、一と一とになり、混成すればその一と一とが融合する。分れゝば陰陽は別物となり、融合すれば、その間に差別がなくなる。故に地は物體として結成し天は氣體として散ずるのである。しかも地が永久に物體として結んでばかり居るなら、天をも結ぶであらうし、天が氣體として散じてばかり居るなら地をも散らして跡形なくしてしまふ。徒らに天地が各各或は散じ或は結ぶ作用ばかり續けてゐれば、天は天として、地は地としての存在がなくなるであらう。桔槔の原理がこれで、一時運動が止まる場合には次の運動を豫定してゐるので、運動が開始されゝば次の靜止を豫定する。前を抑へれば後が昂り、前昂れば後は下る。だから進むことばかりを考へてゐると忽ち退き、退かうとすれば、自分の知らないうちに進んでゐる。一方に長ずれば他方に闕け、あくまで東に行けばいつの間にか西へ出てしまふ。

混成則無非一之有、桀立則無非二之開、一有二隱、二開一移、剖也分之二、對也合歸一、對則陰陽以絪縕剖則天地以給資、非絪縕、則不能爲陰陽、非給資、則不能爲天地、於是立者露氣物、活者痕本神、氣者天也、活之者神氣也、物者地也、立之者本氣也、性體和氣物、本根精英以成一、本根精英既立、神爲用於保營運爲、性體隱氣物、本神天神以成二、本神天神既活、天用成於造化天命、於是一散一一。而萬有沒露、萬機動止、萬機異態、唯鬱浡乎、萬有變體、唯混淪焉立混淪者、廼本氣、本根精英、身於神焉、活鬱浡、者廼神氣、保營運爲、神於物焉、爲之者神、是成者天、故性體氣物、爲具也、陰陽天地、成具也、剖析不盡、成者亦爲、對待相合、爲者亦成、蓋一之所立、幹立其物、活運其神、廼本與神也、二之

混成すれば一でないものはなく、分裂して竝立てば二でないものはない。一となれば二が隱れ、二となれば一が隱れる。竝べれば陰陽が盛んに起り、剖れれば天は與へ、地は受ける作用をする。萬物生成の元氣が聚らなければ、陰陽は構成されず、與へるものと受けるものとが無ければ天地は成立しない。これによつて立ては氣物を露はし、本神がこれを活かす。氣は天である。それを動かすものは神氣である。物は地である。そしてそれを成立させるものは本氣である。性及び體は氣及び物に和し、本、根、精、英が一に結成される。本、根、精、英が成れば神はこれ等を保、營、運、爲に配する。即ち根本的なエネルギーとそれに據つて起る行動だ。性及び體が、氣及び物を隱せば本神、天神が二をなし、本神、天神が二をなせば天は萬物を創造し、茲によつて一は一つ一つ個々のものとなり、萬物は見えたり隱れたり動いたり止まつたりする。種々の場合に樣々の變化をするの樣が鬱勃として生氣を帶びてゐる。萬有は體を變化するが唯混沌としてゐる。混沌を立てるものは本氣であり、本、根、精、英であり神に屬して靈動する。鬱勃として宇宙に息を吹き込むものは神氣であり、保營運爲であり物に屬して行動する。造るものは神で造られるものは天である。故に性、體、氣、物は爲す具であり、陰、陽、天、地は成る具である。それを

所活、一以爲之、一以成焉、乃天與神也、一有二居一活一立、性體貫氣物、氣物割性體、不有胡居、不活孰立、以有二、而一移居二、以一之移、而二各全一、於是陰猶如陽、小猶加大、猶如遞反。其變無窮。

氣爲本。物爲根。體爲精。性爲英。若非氣物體性之爲本根精英。則豈相依而成一哉。人者龐物。通于龐而泥于精焉。故但見植有本根精英。而不見動亦具本根精英。但見動植有本根精英。不識資諸大物。無不以氣物性體成者。則無往不具本根精英者。至大弗遺小、至精弗外龐、一之德也。人以渺龐小之智。欲探精沒者。難矣。雖然精龐混一。沒露同居。何外于天地。故合而一成。

分解して行けば限りがなく成るものも爲し、雙對が合してゆくと爲すものも成る。卽ち一の立つところは根幹がその物を立て、活力がその神を運らす。二が支配するところでは、その中の一が造り一が仕上げる。これは天と神との意である。一は二を有し、その中の一を活かしその一を立つ。性體は氣物を貫いて存在し、氣物は性體を横に割つて個々對立する。二を有するから一は移つて二に赴き、一が各々に動くから二は全一となる場合もある。この道理から陰は陽となり、小は大と少しも異らなく無限に變化する。

氣は本であり物は根、體は精、性は英である。若し氣物體性が本根精英でないならば如何にして相互が相依つて一となり得ようか。人は粗物であり、粗を通して僅かに精を見るだけであるから、本根精英があるのを知つてゐるばかりで、それ等の作用を十分は知らない。但し動植は本根精英があるのを知つてその作用を知らないから、氣物性體を具へるものだけが本根精英の作用を知るのである。極大中にも極少を含み、至精も粗を外にしては成立しない。これが一の德である。人間の粗末な小智を以て宇宙の隱見出沒するのを探らうとするのは非常に困難である。然し精と粗とは混一し、沒と露とは同居する。何れも天地の中にあつて合して一をなしてゐるのである。男女が相互に感じ合つてその

所以男女感而子成其中也。條理立於男女。罅縫沒於所生。分而各立。所以衆兄弟之分體一父母也。衆兄弟而散、一父母而統、是故物立神活者、所成此天地也、性體合、氣物分者、爲此天地者也、雖成則成於爲、爲則爲於成、而爲成自別也。而非爲先乎成成後乎爲。故欲有觀乎天地者須繹條理。以居混成也。

沿流而下、下一陽二陰、隔岸而望、則一陽一陰、故剖則分分分分、至零至碎、末猶本焉、對則合合合合、歸二歸一、本猶末焉、反而執隻、從所往而反反對立、比而伴偶、從所往而類類相並、以性之且、氣能有之、以才之能、物能行之、以觀德之有焉。有則靡物弗宅、往則靡事弗路、行則靡微弗爲、有則靡一弗成、是以鬱浡能活、混淪能立、性剖體偶、氣有物開、而一含萬有。動植物其中、本神氣其中、植以

なかに子を含む理由も同じことだ。條理が男女の中に立ち隙間がなくなる。又各々が分れて竝立つ場合もある。兄弟が一父母から體を分けるのはこの理由である。兄弟の立場から見れば散立し、父母の立場から見れば統一してゐる。この故に物が立ち神が息を吹き込んでこの天地がなつた。性體が合し、氣物が分れて天地が出來た。成立つたのは爲すよりも早く、爲すのは成立つよりも早い關係が生ずる。故に天地を觀察するものはこの理由を十分に知つてゐなければならぬ。

川の流に沿うて下るのに下は一陽、二陰となり、岸を隔てて望めばそれが一陽一陰となる。故に剖ければ永久に細かく剖けられ、零と殆んど等しくなりながら未だ本質を失はない。對すれば永久に合致し、遂に二となり一となつてしまふ。卽ち本は猶ほ末の如くだが、一つの形を執つてゆく先には反反相對立する。比にして偶を伴ふにつれて類と類が相竝ぶ。性の援けをかりて氣は物を有し、才の援けをかりて物は氣を行ふ。玆に我々は萬物成立の德があるのを見る。この宇宙、天地を見ると、有すれば物としてその位置を占めない物はなく、往けば一時と雖も路を共にしないのはない。行けば微しも出來ないことはなく、有すれば一として成立しないものはない。故に盛んに氣が起り立つて能く働き、混沌として能く

資物、而能厚于本、動以資神、而能厚于神、雖分爲隻、亦能合成一、〔則資物者亦有其神、資神者亦有其本、故雖成則各有執。而眇忽亦能與大物張勢。張勢則與天地分立、給資則與天地混一、才活而性見陰陽、體立而物露天地、絪縕者神之運、沒露者物之立、本根精英之物、保營運爲之活、活成物成、乃二、成活成物、非二、故有有無無、是以沒露皆有、隻隻相闕、是以反合成全、

不有而無、不具而闕、闕者不具其具而闕、具者亦具其闕而具、無者不有其有而無、有者以無無而有、闕者唯沒也、無則直無也、以有而一其德、以具而二其道、

成立つ。性は剖れ、體は偶し、氣は有し、物は開いて、而も一の中に萬物を含み、動植物をその中に生かし、本神もその中にゐる。植物は物の原料となるものであるから能く本を厚くし、動物は神を資けるから能く神に厚くする。かく動植二つに分れてゐるが時に應じて合一すれば物に資す物もその神を有し、神に資すものもその本を有する。故に體が成れば各々性によつてその執るところがあるが眇忽として小さく瞬間的なものでも亦能く大物となつて勢ひを張ることがある。勢ひを張れば天地が分れて立ち、給資すれば天地は混一になる。才が性に息を吹き込めば陰陽を現はし、體が立つと物は天地に露はれる。萬物生成の元氣が盛んに聚つて神の意志によつて作られ、見えたり沒したりするのは物の性質である。物の本質は本根精英で、それを活躍させる力が保營運爲である。生氣が活動して物が成れば二であつて二ではなくなる。故に存するものは在り、無いものはない。この故に沒露は皆あり、雙々は相闕ける。反合が全を成す所以だといふ理窟になる。

有しなければ無く、備はらなければ闕ける。闕けてゐるのは當然有すべきものを有しないで闕けたので、備はるものは闕けた部分があるから具してゐるのだと言へる。無いものは有を有しないから無いのであり、有るものは無の部分がないからあるのである。闕けるものは有る部分が見えないから闕けてゐるの

是以其所無則無、其所闕則闕、是以有中無無、具中具闕、有者、有於有中、有無則非有中、具者、具于闕中、闕闕則非其具、故無非有。有而闕則在其中。故闕闕相得則全、以闕在有中也、有不以無並立、有能有有也、益氣有精沒龕露之態。露而有有、沒而有無、無者、無而後無也、如無而有、則有之沒也、同聲而異主。謂之闕可也。故雖混成相食。謂之相。則已吐。故沒者不遂露。無者不遂有。

條理見則一之分、罅縫沒則二之合、以反而彼此沒露、以比而彼此偕有、故龕中相吐、則天虛而氣、地實而物、相食、則虛體物實、實體氣

だし、無いものは無いから無いのである。有すればその德を一にし、現はれゝばその道を二にする。故に無いところは無く闕けるところは闕けてある。又有中には無がなく具中に闕を有することも理解出來る。有は有中に有るので、若し無があつたならば有中ではない。具とは闕があれば始めて成立し、若し闕に缺ければ具とは言はれない。故に無は有ではない。有なれば闕はその中になくてはならない。故に闕と闕とが補足し合へば全となる。闕がその有の中に在るからである。無はいくら集つても有にはならない。有の中には常に何等かの形で有が存在してゐるから、益氣は精沒粗露の態がある。露といふ狀態は有を有し、沒といふ狀態は無を具す。無はあくまで無で決して有にはならない。無のやうに見える有は、有が沒して一時的に見えないのである。同じ聲であり乍ら異主ならばこの狀態を闕と言つても宜しい。故に混成相殺し合ふが、これを一つの相と云へば既に現はれたものだ。從つて沒するものは到頭露れず、無の中に有はない。

條理が現れゝば一が分れ、隙間がなくなれば二は合する。相反する性質から、彼と此とが沒露し、誘引する性質から兩者は共に有る。故に龕中に相吐けば天は虛となり、氣が充滿し、地は實となり物が充滿するが、相食めば虛體に物が滿ち、

虛、唯其沒爲物之天、其露爲氣之地、沒罅縫、見條理剖析、沿之則散、溯之則統、對待、分之則反、合之則一、剖析生親疏、對待成反比、親疏同祖、資之者一、兒孫愈衆、則給之者滋、親親相偶、則其反者合、疏疏相向、則其比者依、大之小則小資大、故大之所具、小亦具之、類類比、則彼此依、故此之所乏、有仰于彼、夫氣物元有性體、性體終與氣物剖、四而二。二而一。是以一元之氣。活鬱浡之神、立混倫之物、混倫全處、本神成一、鬱浡分時、天神成二、氣能用神、而宇宙能容、轉持能動、神能體物、而天地能立、水火能著、物能活神、而本神能活、造化能通、天能成物、而本神能一、事物能雜、神以本神而神、物以天地而體、而體隔而物、神神交而事、物立於條理整齊之中、事行於變化錯雜之間、卑通宇塞、轉動持止、天散地結、華火液水、物以成焉、神活本立、神爲天成、物定事變、造來化往、神以爲焉、事物之間、鬼神感應、造化之中、天命當遇、活中、神變不測、觀其妙焉、立中、天常不拾、觀其誠焉、於是物居性中、性遊物中、

〔註〕
桑立　區別。
剖析　分解する。
鬱鳳　美しい織物の意に使用されて居る。
華卉　同右、
通塞　通じたり塞ったりすること。
精麁　精巧と粗末。

實體に氣が滿ちる。物に天の氣が加はれば沒し、氣に地の物が加はれば露はれて、隙間を沒し條理を現はす。分解すれば散じ、總合すれば統一される。分れては反し合すれば一となる。分裂すれば親疏を生じ、對侍するが、親疏も祖が同じであれば資するものは一と言へる。子孫が多ければ多い程、物資を支給する者も澤山となる。親しいものと親しいものとが共になると反する者も自然と合し、疏いものと疏いものとが相對すると、その類ひが相依る。大が小に之けば小は大に資し、大の具するものは小も具してゐる理窟となる。類と類とが相依れば彼此が行動を共にするので、一方の乏しい點は他方が補ふ、元來氣物と性體とは一致してゐたのが性體が遂に氣物と剖れ四から二、二から一となつた。故に一元の氣が鬱勃とした神を活し、宇宙が混沌としてゐる間に物を造化した。混沌の中に自から落付く場合を得て本神は一を成した。同時に鬱勃の中から時間が生じ、天神の二を成したのである。氣は神を利用して宇宙は成生し、一瞬も止ることなく動き、神は能く物を創造して天地が成立つた。同時に水火も現はれたのである。物は能く神を活し本神は十分に働き造化は彼是相依り相通じ、天は物を育成し本神は一に歸し、事物互に能く雜る。神は本神を以て神に物は天地を以て體となる。そして體は物を隔てて立ち神神は相交りて玆に天地、宇宙が成る、かくて物は條理整然とした中に立ち、事は限りない變化の中に行はれる。天は通じて動き地は塞つて靜まり、火水その他の諸物はその間に生じる。神の作用に依つて本が立ち、事物はその中に在つて無限の變化を示し、鬼神も造化の間に感應される。かうした神妙な事實は人間の力では正確には知り難い。我々は單に物が性の中に居て、性も亦物の中に遊ぶことを知るだけなのである。

（譯者註）梅園の三語中この「玄語」は特に難解で、その中でも本全集に載錄する「陰陽」は梅園哲學の本旨を構成し、現代譯は至難であるばかりでなく、何等豫備知識を用意しない者には、現代譯に妨げられて却つてこの哲學を誤解しないとも限らない。天地は一氣物から構成され、陰陽二元も結局この一氣に包含されてゐるといふのが玄語の主眼點だ。

沒露　見えたり隱れたり。
細蘊　萬物生成の元氣、又その元氣のあつまるさま。
鬱勃　盛んにおこるさま。
混淪　混沌、世界が未だ成り立たないで天地の別がない時のこと。
軒輊　優劣。
氣　五體に觸れるがしかも形のないもの。自然界のに現象。
桔槔　はねつるべ、又はそれと同じ作用を爲すもの。
給資　天が與へ、地が受け取る意味。

敢語

君臣第一

禮者、所以序物也、義者、所以制宜也、分、由序而定、變、由宜而處、昔者、堯措其子而讓舜、舜亦措其子而讓禹、夏桀至暴、國人皆怨、曰、時日害喪、予及女偕亡、而紂之惡勝之、於是、天下願弛肩於湯武、故桀紂之徒、思除湯武以自安、湯武之臣、思伐桀紂以安君、勢之所至、難兩立也、方武王伐紂、伯夷叔齊、叩馬而諫、武王克殷、伯夷叔齊羞之、隱于首陽山、臨死作歌　其辭曰、登彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣、神農虞夏忽焉沒兮、我安適歸矣、于嗟徂兮、命之衰矣、蓋夷齊之意謂、殷紂則以君暴其下、武王則以臣虐其君、是以暴易暴、而不知其非者也、思往古揖讓之日、而弗可及、將死而休、重嘆大命之歸犯上之人、以明采薇於首陽之意焉、非怨、蓋後人意堯舜爲天下、探人材於民間、非也、夫堯舜禹者、共自黃帝出、雖各異姓、而其實則後世之族也、故其曰祁、曰姚、曰姒、殆若魯曰臧、曰孟、曰季、自夏而前、以德讓親、受土、則有姓氏、易世、則易制度禮樂、自夏而後、子孫相承、承者、守祖之姓氏、制度禮樂循襲、按所傳見、黃帝之子、二十五人、其得姓者、十四人、而玄囂蒼林、同姬、青陽夷鼓、同己、於是、姬酉祁己滕蔵任荀僖姞嬛依之十二姓也、晉司空季子、以同姓、爲同德、以異姓、爲異德、德之異同、未免鑿空、亦季子有爲之言也、蓋兄弟各別姓、由各賜土也、其同姓、或繼嗣相及也、無姓者、蓋無封者也、而其帝位相易、以世爲代、制度禮樂、有損益改革、由是觀之、金天、高陽、高辛、唐虞之異代猶後世、漢昭崩、而昌邑立、昌邑廢、而宣帝立也、故祭法曰、有虞氏、禘黃帝而郊嚳、祖顓頊而宗堯、夏后氏、禘黃帝而郊鯀、祖顓頊而宗禹、殷人禘嚳而郊冥、祖契而宗湯、周人、禘

禮とは物の順序正しき意味であり、義とは萬物の宜しきに協ふことである。分はその萬物の順序に從つて定まり、變は宜しきに從つて處置される。昔支那に於て堯はその子を措いて舜に天下を讓り、舜も同樣にして禹に位を讓つた。夏の桀王は暴虐の君であつたから國人は悉くこの君を怨んで「あの日(桀王)はいつ亡びるであらう。早く亡びてくれるとよい。若し亡びるなら自分も一所に亡びてもよい」と言ひ合つた。人々の噂さを裏切つて紂の惡が益々盛んになるに從ひ、人民は湯の武王の肩を持つやうになつて來たので、桀紂に心を寄せる者は武王を危險視してこれを除かうと計るし、一方武王の味方は紂王を討つて君の御心を安めようと考へ、何時か二箇の力は衝突しなければ止まない形勢となつた。その結果、武王は遂に決心して紂王征討の兵を發することになつたが、この時、伯夷、叔齊といふ兩人が君の馬前に立ちふさがり大いに諫めたが納れられず、武王は易々と殷

を亡して天下を掌握した。君を諫めたこの兩人は、この君の下に仕へるのを恥ぢて首陽山に隱れ、湯の米を食はず、遂に餓死しようとした時、次の歌を作つた。

彼の西山に登て其の薇を采る。
暴を以て暴に易へ其の非を知らず。
神農虞夏忽焉として沒しぬ。我安んぞ適歸せん。
あゝ、徂なん。命の衰へたるかな。

この歌の意味を想像するのに、殷の桀王は一天の君でありながら人民を苦しめ、武王は臣下の身分をも顧みずに君を弑した。これは暴を以て暴を制する手段を採つたので、しかも武王自身も天下の人々も、この手段が非理想的であるのを知らない。昔は禮儀正しく讓る者も受ける者も平和の間に處理したもので、今更それを憧憬したとて何の役にも立たない。自分等は、かうした世の中に生きてゐるのが苦痛になつたから、自分で我が命を短めるのであるといふので、重ねて君を虐げた者に天下の大權が歸したのを嘆き、不德の君臣、人民と談笑するのを避けて首陽山で薇を采りながら、命の終るのを靜かに待つたので、その君武王だけの非を怨んだのではないと思ふ。一體後世の人々は、堯や舜が天下一般の幸福を目的として廣く人材を民間に求め、その最も有德人に天下を讓り利己心が少しも

嚳而郊稷、祖文王而宗武王、由夏殷周皆以開國之主爲宗、觀之、舜之於堯、猶啓之於禹、成之於武、使之如秦漢異代他族、虞焉得以堯爲宗、已以堯爲宗、陶唐有虞之異號、猶後世之一代、周家自制謚、而不斥其先王而稱帝、自嚴姓、而分出其後者而爲族、於是、帝爲天稱、姓非同出之名、古之人、何知周家之制、故若舜禹者、正宜爲君者、而舉朝素屬望之人也、由書曰側陋、曰在下、又世有讓許之說、後世不察也、蓋博采才於下、任之於事者、將相以下之事也、以姓爲胡越、非古也、湯武亦同所出於陶唐、則殆如後世宗室、人心由茲、有所許邪、抑勢邪、噫東征西夷怨、南征北狄怨者、仲虺贊湯之辭也、不然、則湯之有衆、何曰、我后不恤我衆、舍我穡事、而割正夏、商罪貫盈、天命誅之者、武王歸罪紂之辭也、不然、何自言、太王基王迹、王季勤王家、文王成其勳、予小子承其志、如此、則南巢以叛書、牧野以殺書之議、不在蘇軾之言之失、縱令人心有所許、夏殷之士之寥寥大義、則不可拚焉、唯無かつたと說くのは誤りである。堯、舜、禹と全部が黃帝の子孫であり、姓は異るが、後世の親族關係に他ならなかつた。故に祁、姚、姒といふ名稱は、同じ魯の中に臧、孟、季といふ姓があつたのと同樣に考へるのが正しい。夏の時代以前は德望ある親族に天下を讓るのが常例であり、受けた者はその度ごとに姓を易へ一代を經るごとに諸般の規定を改めたものだが、夏以後に至ると子孫相受け繼ぐ例が多くなり、祖先の姓をも襲ぎ、一般の諸制度も變化しないやうになつた。現在の文書などから觀察すると、黃帝の子は二十五人あり、その中の十四人には各々特定な姓があつたが、玄囂と蒼林とは姬を同じくし、靑陽と夷鼓とは雙生兒であつたので、結局姬、酉、祁、己、滕、蔵、任、荀、僖、姞、嬛、依の十二姓あつた譯となる。晉の司空職（土地及び民事を掌る役）に在つた季子は同姓は德が同じだと考へ、異姓は德の程度が異つてゐたのだと考へたが、これは單に空論であるばかりでなく、不合理でもあつて何か爲めにするところある言であらう。兄弟でありながらも姓を異にする原因は各人の受けた封土が異つた爲めにより、同姓のものはそれを繼いだ結果であり、姓の無いものは封土が無かつたからであらう。そして帝位は一世を一代と計算し、繼ぐ度に幾分か諸制度の變更があつた。かうした點から觀察すれば金天、高陽、高辛、唐虞（以上五帝といふ）と代々姓を異

堯齊、決然不爲勢移、高踏遠舉、正君臣之分於千載、噫微期人、吾其獸焉、孟子曰、堯崩、三年之喪畢、舜避堯之子、於南河之南、天下之朝覲訟獄謳歌者、皆不之堯之子、而之舜、然後之中國、踐天子位焉、禹之於舜之子亦然、以晉觀之、殆不然、夫堯舜者、聖人也、意餘澤之在下、必深焉、舜之讓之是、則滿朝詎無一人之思君之子、滿朝終無一人之思君之子、豈謂之餘澤深及人心哉、若滿朝歸舜者、是邪、南河之避、不當之舉也、蓋五帝之繼承、雖不分曉、粗可言焉、黃帝崩、少昊立、少昊崩、黃帝之子昌意、而其子顓頊立、顓頊崩、黃帝之子玄囂、其子嬀極、而其子帝嚳立、是其子孫之相與讓德也、歷歷可觀矣、帝嚳之子、有稷契及堯摯、摯立而崩、而堯之德、踰稷契、蓋是以統歸堯也、然而舜禹、顓頊之裔、則堯措子讓德、有所由來、謹考、虞書、堯謂四岳、曰朕在位七十載、汝能庸命、巽朕位、岳曰、否德忝帝位、曰、明明、揚側陋、師錫帝曰、有鰥在下、曰虞舜、舜曰、格汝禹、朕宅帝位、主にしたのは、後世漢の昭帝が崩じた後に昌邑が立ち、昌邑の崩後に宣帝が立つたのと同じであると思はれる。故に祭法には「有虞氏は黃帝を禘にして嚳を郊にし、顓頊を祖として堯を宗とす。夏后氏は黃帝を禘にして鯀を郊にし、顓頊を祖にして禹を宗にす。殷人は嚳を禘にして冥を郊にし、契を祖にして湯を宗にす。周人は嚳を禘にして稷を郊にし、文王を祖にして武王を宗にす」とある。夏殷周が全部開國の主を宗としてゐる記事から考へれば、舜と堯との關係は、啓と禹との關係と等しく成と武も亦決して他の關係に在るのではない。若しこれ等を秦と漢のやうに全然他族と目したなら、どうして虞は堯を宗と爲したか不明となつてしまふ。堯を宗としてゐるから、陶唐とか有虞とかいふ異號は後世から見て一代限りに限定された名と見なくてはならないであらう。周が謚に關する制度を決定して以後は、先王に帝といふ曖昧な名稱を付せず、姓名を嚴重に規定して、子孫を一族として同姓の中に含ましめたので、帝は天の別稱となり、姓が異れば出所も異る結果となつてしまつた。古への人はかうした周の制度に變化があつて、それ以前と以後とに明白な差違のあることは少しも知らないから前述のやうに誤解を生じたのであつた。かく考へると舜、禹のやうな人は別段に天位を繼いでも不思議はないので、しかも彼等が撰ばれたのには、朝野の德望があつたとしなければならな

十有三載、耄期倦于勤、汝惟不怠、總朕師、禹曰、朕德罔克、民不依、皐陶邁種德、德乃降、黎民懷之、舜遂曰、汝惟不矜、天下莫與汝爭功、予懋乃德、嘉乃丕績、天之曆數、在汝躬、汝終陟元后、由是觀之、堯之所始讓者、四岳也、師不薦丹朱、而舉舜、舜之所讓者、禹也、禹不薦商鈞、而讓皐陶、按、四岳、目炎帝出、姜姓、於周爲齊許、而炎帝黃帝、共少典娶于有嬌氏所生、出國語、然則兄弟何以並稱帝、據賈誼新書、則言黃帝炎帝、各有天下之半、堯舜去黃帝未遠、則四岳亦堯之遠兄弟也、皐陶亦八愷之一、則高陽氏之裔也、故其所讓、皆兄弟、義當受之人也、書有舜讓于德弗嗣之文、無讓于丹朱避地之事、故於舜言、正月上日、受終于文祖、於禹、言正月朔旦、受命于神宗、舜不以生之日讓丹朱、禹不以生之日讓商均、俱待其斃、讓諸其子、不亦許乎、蓋此時之義、在撰親讓德、殷周、則取義於民心之奉棄、且夫舜禹、非居堯舜之宮、而責堯舜之子、受

い。これに關した文書に側陋（そくろう）とあつて、身分が賤しかつたかの如くに記し、又長い間この誤解を人々が怪しまなかつたから、世の中の者は眞實だと信じてしまつたのであらう。天位とは全然異つた將軍、宰相及びそれ以下の身分なら、廣く地位に關係なく天下から人材を求めて十分に腕を發揮させる例もあるが、一度天位に關したならば決してさうしたことは無い。姓が異るから全然他人だと爲すことは周の古代制度に見ぬところである。湯武も陶唐と出所が同じだから、兩者には後世の本家と親戚との關係がある。この理由で誰も異議を申立てなかつたものか、或は時勢が彼を天下の主にさせたのか。「東征すれば西夷怨み、南征すれば北狄怨む」とは湯王の臣、仲虺が武王に讃した言葉である。若し事實さうでなければ湯の民衆は「我が君は自國の我々を救濟せず、帝として當然爲すべき國務をも執られず、夏を征することのみ考へてゐる」と言ふであらう。「商の罪は莫大であるから自分は天に代つてそれを誅するのである。」とは、武王が罪を紂に歸せしめる必要から天下に宣言した言葉である。でなければ「「太王、王迹を基し、王季王家に勤め、文王其の勳を爲し、予小子其の一志を承く」とは云ふまい。その意は祖先以來の文勳を述べ、武王も亦その祖先の志を繼ぐことを云つたのだ、ところが、宋の文學者蘇軾（蘇東坡）は湯王が桀を南巢（江南廬州府巢縣の東北）に放逐した

讓定生前也、何以曰、受讓定生前、舜典曰、堯謂舜曰、汝陟帝位、而曰受終、禹謨曰、舜謂禹曰、汝終陟元后、而曰受命、夫孔子之雅言、不過詩書藝禮、何孟軻氏之惟取武成二三策、廢書之至此、故求之側陋者、非指庶姓言也、於是、師之所舉、舜也、禹也、大義之宜君者、而群臣之不宜負者也舜受堯之終、於堯不崩之前、禹受舜之命、於舜不崩之前、當是之時、堯舜頗類後世之太上皇、繼承豫定生前、身後無復議嗣之慮、聖謨善也、雖未正立其位、而既受其終、類湮巡狩、朝覲群后、非天子之事而何、漢季侯人、阿王莽、由周官禮緯、造九命之錫、威柄以遷人主、自是議九錫、爲篡國者之常典、舜若無受終之事、以爲此事、實過王莽遠矣、自禹而後、父沒子嗣雖儲嗣豫定、根本未固、兄弟叔季、婦寺姦賊、乘動搖、窺神器、三代之間、惟夏不降遜位於弟扃、抑且法堯舜乎、若夫孟子說、至堯舜崩、儲嗣未定也、百歲老天子、爰爲天下慮之綏也、舜避堯之子、天下之朝覲訟獄謳歌者、饑棄丹

こと及び周の武王が殷の紂王を牧野（河南淇縣）に亡したことを大義名分の上から難じ、前者は謀叛、後者は弑虐を以て諫せんとしたのは失當でない。たとひ人心に許すところがあらうとも、夏及び殷の士が大義に殉ずること少なきは蔽ひ難い事實だ。唯ひとり伯夷、叔齊の兩人だけがかゝる間にあつて斷然節を持して當時の大衆の意見に雷同せず、君臣の大義名分を天下千載に明かにしたのであつた。この人々が居なかつたならば、我々は人倫を知らない禽獸同樣の存在となつてゐたかも知れぬ。孟子は「堯崩ず。三年の喪畢る。舜、堯の子を河南の南に避く。天下の朝覲、訟獄、謳歌する者は皆堯の子に之かずして舜に之き、然して後中國に之き天子の位を踐む。禹の舜の子に於けるも亦然り」と言つた。自分に言はせればこの文には大いに疑問がある。一體堯や舜は聖人であるから、下々の者に至るまでその恩澤を受けてゐたに相違ない。舜が位を堯より讓り受けたのが正當であるとすれば、朝廷中の人々が堯の子を顧みないことがあらう筈がない。朝廷の人々が一人も堯の子を顧みない程なら、どうして堯を聖人などと稱し得られよう。若し滿朝の人々が舜を支持したとすれば、河南に避ける必要は毫もない。一體支那太古に於ける所謂五帝の王位繼承の樣子は明瞭ではないが大體は判明してゐる。黃帝が崩じて少昊が立ち、少昊が崩じて黃帝の子が後を繼ぎ、次にその子

朱、而何忘堯之遽、故撰賢才登庸者、將相以下之事也、非君之事也、夷齊之意不明、堯舜之讓不辨、可勝悲哉、天下有二尊、曰君、曰父、故臣於人者、不幸而遇變、則宜諫而死、可遯而隱、可忍而補、猶弗獲已、則可廢而易之、子於人者、不幸而遇變、則宜諫、宜誘、宜禦務於外、宜號泣而從、猶弗獲已、則、可以爭之、君父臣子、自有定分、其位不可顚倒、詩曰、投我以木瓜、報之以瓊琚、君父假土芥臣子、臣子豈可寇讎君父哉、堯舜之揖讓、猶弗易則、湯武之擧、豈可講哉、可臣以代君、嗚呼如禮何、卽曰可如禮何、則是非可易也、是非可易、奚不可爲之有、儒者是是非非言行爲法則者也、分別是非、猶眩人倫之大義、悲夫、莊子有言、曰、竊鉤者誅、竊國者、爲諸侯、諸侯之門、而仁義存焉、漆園之感深矣、能引古今、回護其說、條理豈可濫哉、

の顓頊が立ち、顓頊が崩じると黄帝の子の玄囂、その子の嬌極、更にその子の帝嚳といふ順で天位に卽いた。子々孫々に讓る法則通りに行はれてゐることがわかるではないか。帝嚳の子に稷契、堯摯といふ二人があつたが、多分堯摯の德が稷契以上であつたのだらう。先づ堯摯が立つて崩じたのだつた。舜禹は顓頊の流れである關係から、堯は自分の子を措いて德望ある舜に位を讓つたと解さなくてはならない。謹んでかうしたことを考へるのに、虞書には堯が四岳に謂つた言葉として「朕位に在ること七十載、汝能く命を庸ふ。朕の位を巽らんと。岳曰く、德にあらず帝位を忝めん。曰く明なるを明にし、側陋を揚げる。師帝に錫へて曰く、鰥有り下に在り、虞舜と謂ふ。」「舜曰く、格れ汝禹、朕、帝位に宅ること三十有三載、耄期勤に倦めり。汝惟だ忘らずして朕が師を總べよ。禹曰く、朕が德克くする罔く、民は依らず、皐陶邁めて德を種く。德乃ち降り黎民之に懷く。舜遂に曰く、汝惟れ矜らず天下汝と能を爭ふ莫し、汝惟れ伐らず天下汝と功を爭ふ莫し、予、乃の德を懋なりとす、乃の丕績を嘉す、天の曆數汝の躬に在り、汝終に元后に陟れ。」と記してある。これによつて考へれば堯は最初四岳に天下を讓らうとされた。ところが四岳は丹朱を推薦しないで舜を擧げた。舜は禹に讓つたが、禹は商均に讓らないで皐陶に讓つてしまつたのであつた。四岳は炎帝の子孫で姜を姓

とし周では齊許となつてゐた。そして國語に依れば、炎帝、黄帝は共に少典が有嬌氏と婚して生んだものであるから兄弟である。何故に兄弟が共に帝と稱したかといへば、「賈誼新書」には兩人が各天下の半分づつを所有してゐたとあるから、さうした理由でもあつたのであらう。堯舜は前述した如く黄帝から餘り遠くない子孫であり、四岳も結局堯の遠い兄弟に當ると言へる。皐陶も亦八愷（高陽氏が有した八人の才子）の一人であるから高陽氏の子孫に當る。この故に讓られた人人は全部兄弟關係となり、或觀方からすれば當然讓られてもいゝ身分の者であつたとも言へる。書に舜は德だけは讓つても生前に天下を讓ることが無かつたと書いてあるが、丹朱に讓つて自分は隱退したとは書いてない。故に舜は「正月上日に終を文祖に受く」と言ひ、禹は「正月朔旦に命を神宗に受く」と言ふが、舜は生前に丹朱に讓らず、禹は崩前に商均に讓ることなく、共に彼等が死ぬのを待つてその子に天下を讓つたのは眞實に違ふではないか。かうした場合の目的は血の續いてゐる者の中から德を讓るに足りる人物を選ぶのに在つた。殷周は大衆の望みに從つて後繼者を決定した。更に舜や禹は堯、舜の宮に在つてそれ等の子を責めたのではない。生前から受讓が決定してゐたのだから責める必要がなかつたのである。如何なる理由で自分は生前から受讓が決定してゐたのだと言ふかといへ

ば、舜典に「堯、舜に謂て曰く、汝帝位に陟れと、而して終を受くと曰ふ」とあり、禹謨に「舜、禹に謂て曰く、汝終に元后に陟れと、而して命を受くと曰ふ」と見えるからである。以上に關して孔子の雅言は詩書執禮に示されてあるにすぎず、また孟軻氏は唯「武戈」(『書經』中にある)の二三策を取つて他の書に在る言を信用しないのは一體如何な理由か自分にはわからない。故に「之を側陋に求む」と言ふのは何等類緣もない庶姓の人物を指すのではなからう。故に師の擧げたのは舜であり禹であつて、大義の上から君主たるに適し且つ、群臣を征禦する力を有した者であつた。舜は未だ堯が崩じない以前に、その後を繼ぐことが決定されたし、禹は舜の生前既に世繼となつたのだから、かうした間に於ける堯舜の地位は、後世の太上皇と頗る似てゐるのであつた。聖慮が正當に行はれたので、生前に皇繼が豫定され、その後繼問題は起らなかつた。未だ卽位は爲さないが、結果は豫定され公私一切の場合に諸侯に號令すれば、事實上の天子といふより他の言葉を知らない。漢末に佞臣が王莽の機嫌を取り、周官の規定に從つて九命の錫(大功あるものに賜はる九つの品)と稱するものを製し勝手に王を遷して以來、九命の錫を云々する者は叛逆者と相場が定つたやうになつてしまつたが、舜が王位を繼承する許しを得ない間に若し右のやうな行爲があつたとすれば、王莽以上

【註】
宜　宜と同じで、相當する、和順する意味。
時日害喪　時は是の意味、害はいつかと讀む。この文句孟子の梁惠王に在る。
薇　山間に生える草で食用となる。
袒　この場合死を意味する。
揖讓　手を胸に當てゝ挨拶しへり下ることで、禮儀の厚い態度。
司空　古代の官名で周代では土木工作を司る。漢代には三公の一である。
饗空　空論
諦　先祖を天神に拜して祭ること。天子の禮である。
郊　冬至の時には天子自ら南郊で天を拜し、夏至の時には北郊で地を拜する。これも天子の禮である。
側陋　身分が賤しいこと。
性を以て　胡越とす胡爲は北方の未開人、越は南方の國、姓が異なつてゐるから全然兩者に關係はないとする。本章で梅園はかうした論者こそ周の古代制度に無智であるとする。

の惡人と稱してもよいと思ふ。禹の御代以後は父が歿すれば子がその後を繼ぐ例となつた。然しこの規律は未だ絕對的のものではなかつたから、兄弟、伯父甥、閨門關係の諸人物、姦智に長けた家臣等が、時に應じて帝位を簒奪した例が多い。三代の御代で夏の不降一人がその弟の扃に讓位したのは、堯舜の模倣をした結果だらうか。孟子の說は前述したやうに、堯舜が崩じる際にも未だ世繼が決定してゐなかつたといふので、この說に從へば百歲にも達した老天子が餘りに樂觀し過ぎてゐたと評せざるを得ない。舜は堯の子を避けた。天下の朝參する者、許訟を起した者、堯の御代を謳歌した者等が、たとひ丹朱が後繼にならなかつたとしても、餘りに堯を忘れるのが早すぎる。故に自分はあくまで將軍、宰相以下の人物に就ては廣く人材を民間から求める場合があつても、帝王の世繼に關しては決してさうした例が無かつたと主張する。伯夷、叔齊の眞意をも知らず、堯舜が如何なる理由から位を讓つたかをも明瞭にしないで、徒らに從來の誤解に從つてゐるのは悲しいではないか。しかも現在ではさうした人々が世間の大部分を占めてゐるのである。天下には二個の最も尊い存在がある。それは君と父だ。故に人の家臣たる者は不幸にして變事に遇へば採るべき態度は次の數個しかない。あくまで諫爭して死を賭すか、その君からのがれ世を捨てて何處へか隱遯するか、一

拚　掩と同意で、一杯にふさがること。
朝覲　天下の諸侯が參廷して天子に拜謁すること、訟獄　訴訟を起すこと。
丕績　大功。
元后　帝王。
聖謨　天子の御聖慮。
木瓜　實は小瓜と似て酸性を帶びてゐるもの。
瓊琚　一種の美しい赤玉。
漆園　莊子の別稱。

時は忍んで次第に正義に向はせるか、そして最後にその君を廢して他に遷るかである。同樣に人の子たる者は不幸にして變事に遇へば採るべき態度が決定されてゐる。卽時に諫めるか氣長く誘ふか、父を捨てて他所に赴くか泣きつゝも從ふか、そして最後に已むを得なければ父と爭ふか。君と臣、父と子とは自然に定められた順があり、それを顚倒させてはならない。詩經には「我に投るに木瓜を以てす、之に報ゆるに瓊琚を以てす」といふ句がある。君や父がよしんば臣や子を非常に輕蔑したとしても、彼等はその故に君父を讎と視てはならない。堯舜の正しい禮儀に從つた行動を眞似られないといつて湯の武王の行動を是とすれば大變な間違ひとなる。臣の身分で君に代るのが常例となれば、一體世の中に存在する禮道はどうなるだらう。若しこれが禮道であつて、これ以外の禮道は存在してゐてもゐなくても同じだと言ふならば、その時には世の中の是非が顚倒したのであるから自分は言ふべき言葉がない。さうなれば何をしても正しいので、一切の道德に關する基準は消え去る。儒者は正を是とし、不正を非とし、その言行は自から是非の基準となるのである。是非が十分に理解出來てゐる筈の儒者自身が、上述したやうに人倫の大義となる標準を何處に置くかに就て曖昧なのである。自分はこれこそ悲しい事實だと思ふ。莊子は「鉤を竊む者は誅せられ、國を竊む者は諸侯となる。諸侯の門に仁義存す」と言つた。如何にも漆園の住人莊子らしい文句ではないか。古今の例を引用してこの說に抗辯しても、この眞理は決して亂されないのである。

明善第二

自分を生んだ父であるから尊くないことがあらうか。自分を養ふ君である以上尊ばないわけには行かないではないか。この故に天下中で最も尊い存在は父と君とである。子が父を奉じ、臣が君を奉ずることは天地が分劃されてゐると同樣で、決して變化があつてはならない。人間が君や父に對する場合には、平時には全力を盡して補佐し、萬一の事があつたら我が身を犧牲にする覺悟が必要である。然し國家や人民を維持する者は餘程沈著な態度がなければならない。晏子が死ななかつたのもその理由からである。大義には親を滅すといふ言葉がある。何故大義の爲めには親を顧みないのか。君があるからである。周公が兄を殺したのも石碏が子を殺したのも君の爲めに他ならない。一國であれば君、一家であれば親、これだけには無條件で我が身を犧牲にし、必要によつては人をも殺す覺悟が必要と

已生我、親豈得不尊哉、已有我、君豈得不尊哉、故天下之至尊、君與父也、故子之奉父、臣之奉君、天地之定分、而不可以易者也、人之於君父、安則竭力、危則致身、如此而已、雖然、有民人焉、有社稷焉、維持之者、不以規規爲節、晏子之所以不就死也、傳曰、大義滅親、何以大義滅親、有君也、周公之所以討兄也、石碏之所以殺子也、唯邦而君、家而親、身可死、人可殺、無滅之之道、石奢之所以自就戮也、夫人之於變、莫慘於君父之

難、處事、莫難於君父之難、伍員爲父覆楚、棄疾、爲君棄父、共愆義者也、親者、恃奉於子、君者、恃奉於衆、徐庶之所去蜀也、徐庶去蜀、不顯名於魏、其所賢邪、有民人焉、有社稷焉、不可以私恩辱國命、趙苞之所嘔血而死也、晉讀論語、至曰泰伯其可謂至德也已矣、三以天下讓、民無得而稱焉、末嘗不廢卷嗟歎也、夫數千載之久、無典籍之可稽、由孔子之言、考之事勢、則世傳可疑也、傳者曰、太王之子、太伯、仲雍、季歷、季歷生昌、昌有聖德、太王有讓昌之志、太伯仲雍、覺而之吳、斷髮文身而不還、夫爲人之親之情、雖有所偏愛于子、而豈有爲愛季、而絕信於伯仲、藐焉弗省、陶然而慊者哉、爲人之子之情、豈有廢棄晨昏之奉於絕域、藐焉弗省、陶然而慊者哉、爲人之弟之情、豈有坐視伯仲之遯避、安居大位、藐焉弗省、陶然而慊者哉、夫世家之位、自非至不肖、則適庶不可濫焉、太伯不賢、而不可爲太王之嗣邪、孔子何以稱之爲至德、其德也至、雖文王莫尙焉、仲雍雖降、身中淸、廢中權、太王賢邪、何廢二賢、季歷賢邪、何不得爲叔齊、由是觀之、太伯豈得非無申生之難哉、書曰、太王肇基王迹、王季勤王家、詩稱、太王始剪商、太伯豈得非無伯夷之介哉、夫子嘗稱閔子、曰、人不間於其父母昆弟之言、太伯蒸蒸于艱難、竟採藥於東吳、申生者、狷者也、以無違、使父陷不慈、以曾子耘瓜之事觀之、不可揜也、申生之行愈恭、而獻公之惡益顯、太伯鴻飛冥冥、人不間於其父母兄弟之言、商勢已傾、太王剪商、太伯不以自潔、固以天下遜、愉婉泯跡、民之不得而稱也、或曰、否、皇矣詩曰、帝作邦作對、自太伯王季、維此王季、因心則友、則友其兄、則

なる。この大義だけは何物によつても滅されない。これ石奢が自殺した所以である。人間には種々の災難があるが、君父が異狀に陷つた時程慘酷なことはない。一生涯の中には種々の難儀に遇つてどうしてよいかわからなくなる場合も多いが君父が異狀に陷つた時程難儀なことはないものである。伍員は父の爲めに楚を亡し、棄疾が君の爲めに父を棄てたのは共に義を誤解した例である。親は子を賴りにし、君は臣を賴りにする。徐庶が中々蜀を去らなかつたのもこの意味からで、一度蜀を去つても魏に仕へなかつたのは賢人の證據であらう。國家あり人民もあるのに、而も私恩の爲めにこの大道を辱しめるやうなことがあつてはならない。趙苞が血を嘔いて死んだのはこの爲めである。自分は度々「論語」を讀むが、常にその中の「泰伯は其れ至德と謂ふ可き也。三たび天下を以て讓る、民得て稱するなし」といふ場所に至ると書籍を閉ぢて深く歎息をしなかつた例がない。幾千年も昔のことであるから十分に信賴する文獻はないが、孔子のこの言葉だけから考へると、どうも疑問の點が少なくない。この物語りは傳說として次の如く言はれてゐる。太王の子には太伯、仲雍、季歷といふ三人があつた。その中の季歷は最も賢いと云はれ、且つその子昌も亦、才德のあることで知られたので、太王は昌に天下を讓る意志があつた。かうした太王の心中を知つた兄の二人は「兄弟の中

誰が立つても差支へない事だ」と思ひ、吳に赴いて髮を斷ち身體に文身をして一生故國には還らない決心を示したのである。人の親としての情は如何に末子を愛しても、その爲めに仲雍、太伯といふ上の二人と絕緣してどう氣に止めないでゐられるだらうか。又一方人の子たるものは如何に父が自分等の弟を愛したからといつて、その爲めに異國に脫出して朝夕の孝養を怠り、どう氣に止めないでゐられるだらうか。更に人の弟の情として二人の兄が國外に出て永久に還らない決心をしてゐるのに、自分だけ晏如として天位に卽き、何等氣に止めないでゐられるだらうか。一般に世繼に關する法則として、特に父の名を恥しめるやうな愚鈍な者でない限りは長男から順次に、正妻から順次に繼ぐのが當然となつてゐる。太伯は愚鈍であつて、後繼者になり得なかつたのか。孔子は何故に彼を至德と賞讚したのか。その德の至れるはたとひ文王であつても及ぶことはない。それから脫出した仲雍は身が潔白でそれを廢するのは正當でない。太王は賢明なのであつたらうか。若し言葉通り賢明だつたら何故二人の兄を廢したか。又、季歷は賢明だつたらうか。若し文字通り賢明だとしたら何故叔齊たることが出來なかつたのか。かうした點を考へれば太伯に申生（晉の太子、獻公の子）に對すると同じ困難があつたのは當然だと言へる。孝心深き申生は父獻公の寵姬（驪姬）がその子奚齊を

篤其慶、何子之言之戾、曰、偸、千載事逝、實今不可繹、雖然、由孔子之言、考諸事勢、則不能無說于詩、蓋自太伯王季者、自太伯遜、王季嗣也、王季之友于兄、言因心、則不得言身也、詩人誦其祖先之美、固宜然也、故受祿無喪、奄有四方者、太王王季之志、而太伯之遜在此、不然則何由言以天下讓、晉按、太王剪商者、詩之言也、太伯不從、是以不嗣者、宮之奇之言也、意太伯之在家、以所不自潔、不能從之、于意、于言、必深遜于王季、遜猶難處、以遂葬荆蠻、事出不得已矣、三讓、朱子以爲固遜、當矣、夫嫡長代父、事之常也、故不幸方廢立之變、直臣執常、事君者之道也、雖然、爲子之道、宜唯命之聽、弗可引涎其位、夫人之親愛、莫過父子、雖然、衆口鑠金、積毀銷骨、衽席之言、其甘如蔗、市虎衣蜂、曾母猶投杼、爲

太子としようとした爲め父に逆らうまいとして苦しんだ。「書經」には「太王肇めて王迹を基し、王季、王家に勤む」とあり、詩經には「太王始めて商を剪る」と記されてゐる。太伯は或は伯夷の如く節操が堅かつたのかも知れない。孔子は嘗て閔子を稱して「人、其の父母昆弟の言を間せず」と言つた。閔子の孝行に劣らぬ太伯は父(太王)の病氣に效があるといふので艱難を氣に止めないで東吳で藥草を採つた。申生は狹量だが律儀者である。彼は父の行動が正しくないに關はらず、少しも逆らはなかつた爲めに父をして不慈の人たらしめた。曾子、耘瓜の事を以て觀ればそのことがわかる。申生の行動は益々正しいにつれて、父獻公の惡事は時を經るに從つて一層目立つて來た。ところが太伯は世外に超然として身を隱したので、その父母兄弟も世上から非難されず、商の勢ひが傾いて太王がこれを亡すと太伯はそれを潔しとしないで天下を辭し、婉曲に跡を隱して了つたのである。天下の人々はこの理由を知らないから、別段に彼を譖稱しなかつたまでのことであらう。或人はこれに對して「否、左樣でなく、泰伯の事によつて、兄は弟の光を現はし、弟は兄の光を現はした所に偉大さがある。」といふ。「詩經」に「帝、邦を作し對を作すこと、太伯王季よりす。維れ此の王季心に因りて則ち友なり。則ち其の兄に友なり、則ち其の慶を篤うす」とあるのがそれだ。これによると、孔子の

子於人者之情、莫痛於陷父乎不慈、浸潤膚受、機一轉、事弗可測矣、苟貧其位、則勢身不死則不已、故兄弟之難、莫難於廢立、易曰、君子見機而作、太伯其庶幾乎、身死猶可忍、豈忍陷父乎不慈哉、故戰戰兢兢、當恐身之難保、何遑其佗、況父有嗣子、其子何慮、噫身爲嫡長、其危如此、弟庶誤獲父寵、臨廢立之機、不幸莫大焉、事成則悖人也、不成則其煮豆、史佚有言、曰、德莫若讓、讓則不爭、奪則犯矣、子路之言不讓、夫子猶哂爲國不以禮、言之不讓、猶哂於孔子、我知彼伐而代者、不許於孔子、往昔

三讓(泰伯が三たび季歷に位を讓つた行爲)說は「詩經」の意味と異なつてゐる。かう主張するものがあるが、幾千年もの過去の古い事情は現在から明かにするを得ないが、孔子の言によつてこれを事情の上から考へれば、「詩經」に於て彼等の心事に觸れないわけにゆかぬ。一體「太伯、王季よりす」といふのは、太伯が遁逃したから王季が繼いだといふ意味である。正季は兄に對して決して不遜な志は持つてゐなかつた。太王、王季共に太伯に讓る志があつたが、而も太伯は遁逃したから止むを得ず、王季が繼いだので、若しさうでなければ、孔子が何の爲めに「天下を以て讓る」と言つたのか不明になるではないかと云ふものがある。自分は更にこの點を考へるのに、詩には「太王、商を剪る」と在る。宮之奇は「太伯はこの時に父に從はなかつたから後繼者となり得なかつた」と言つてゐる。自分は太伯が家に留つてゐるのは自ら潔しとしないところであるから、種々の手段で王季に讓らうとしたが、父が許さないので遂に他國に逃げて野蠻な風習を身に致したのではないかと考へる。故にかうした行動はあくまで王位を辭するに就て止むを得なかつたと言はなければならない。「論語」に「三讓」に在るのを朱子は、「固く辭退する」と註したが、これは當を得てゐると思ふ。長男として認められた者が父に代つて天下を治めるのは常規である。故に不幸にして君を廢立する場

合があれば、家臣はこの常規を楯に採るべきである。然し一方、子としての道は絶對に親の命に從ふのが孝であるから徒らにその位を惜しんではならない。人と人との交渉は父子の間程親愛なものはない。然し數多くの人々の讒言は金をも骨をもとかし、閨門中の甘い囁きには如何なる意志强い人間の志をも變へる不思議の力を持つてゐるので、我が子曾參を信じ切つてゐたその母が彼の殺人の噂さを遂に信じて機から立上つたやうに、評判の惡い父を持つた時程、人の子にとつて心を痛ましめるものはない。水が浸み込むやうに、身體に垢がたまるやうに、次第にその評判が大になつて行けば、如何なる結果となるか測り知れなくなる。天下の位を貪つたならば、自分が死んだ後に始めて解決するやうな事件が起るのに相違ない。故に兄弟間の危機は廢立の時が最も大となる。易書には「君子機を見て作る」と書いてある。太伯の行動はこの見地から觀れば、君子に近いと言へるのかも知れない。一身は犧牲になるのも忍べるが、父の評判の惡いのはどうしても忍び得ない太伯だつた。故に少しの間も油斷せず、身に來る災難を避けなければならなかつたので、安堵して平穩に暮すどころではなかつた。既に父の意志として後繼者が定まつてゐたのである以上、子の身分として異議を申立てる筋はなかつた。噫、正妻出の長男であつてもこのやうに安心は出來なかつたのである。弟

大鷦鷯尊、與菟道稚郎子、讓帝位者三年、太弟薨、而後踐祚、可謂千古龜鑑矣、惜哉稚郎子、不避而就死、似俠、抑勢有不得不然者邪、燕噲、以祖宗之社稷、與之於子之、猶偸官物私臣妾、蒼梧嬈、娶妻而美、讓與其兄、志則出愛、事則亂倫、動弗求義、戾道則一也、

〔註〕社稷　國家。
規々　驚きあきれて、氣拔けした形容。
愆　誤まる。

が誤つて父の寵を受けたとの理由で、兄の廢立を望むのは、これ以上の不孝はないので、成功しても道理に背いた者として非難せられ、若し失敗すれば、全然自己の地位を失はなければならなくなる。史佚の言に「德は讓るに若くは莫し」とある。讓れば爭ひは起らず、奪へば罪を犯した行爲となる。孔子の門下子路が勇氣を恃んであくまで讓らないのを見て孔子は國を治めるのに禮道を基礎としないのを哂つた。讓らない子路さへ孔子に哂はれるのだから、まして暴力を以て長兄に取つて代つた者を孔子は許すであらうか。許すまい。

我が國に於ては應神天皇の御子の大鷦鷯（おほさゝぎ）の尊と、菟道稚郎子（うぢのわかいらつこ）とが三年間も相互に天位を讓り合つて、遂に御弟の稚郎子が薨じられた後に大鷦鷯の尊は天位に登られ、仁德天皇となられたことがある。これは所謂千年後までをも照す龜鑑と言ふべきであるが、稚郎子が太伯のやうに世を避けないで自殺されたのは返すがへすも殘念である。已むを得ないで自殺されたので、その裏面には我々の想像も及ばない複雜な關係があつたとしか思へない。燕王會は暗愚な爲めに先祖から傳はつてゐた國家をその宰相子之の巧辯に乘ぜられて與へてしまつた。が、この行爲は言はば官物を盜んで家臣や妻妾に與へたやうなもので公私の混合も甚しい。蒼梧の嬈は妻を娶つたが頗る美人であつたから、彼女を自分の兄弟に讓つてしまつた

伯夷之介　伯夷、叔齊のことは本文に詳しく出てゐる。介は節操の堅いこと。
昆弟　兄弟。
猾　短慮、志を曲げない者。
愉婉　愉は樂しむ、婉は露骨でない意で、婉曲なこと。
遜　讓るといふ意味と遁逃するといふ意味と兩方あり、共に使用されてゐるやうに思はれる。
象口は金を鑠かす　多數人の讒言は金石をもとかす力を有してゐる意。史記の張儀傳にある。
積毀は骨を銷かす　前條と同意。共に漢書の鄒陽傳上書に在る。
衽席の言、その甘きこと蔗の如し　衽席はこの場合閨門の意、蔗は甘蔗で砂糖の原料、所謂 Curtain Lecture で、閨門に於ける讒言は意外な勢力を持つ例言。
市虎　淮南子の「三人、市虎を成す」から出てゐるので、一人が市に虎があると言つても信じる者はゐないし、二人が言つても半信半疑であるが、三人が口を同じく言へば終に信じてしまふことで、讒言も一人や二人では信じなく、多數に依つて度々言はれゝば遂に信ずる譬。
衣蜂　同前の意である。
曾母猶ほ杼を投ず　史記の甘茂傳にあるので、曾母とは曾參の母のこと。曾參の母は非常に我が子を深く信じてゐたので、或者が曾參は人殺しを爲したと告げても相手にせず、驚きもしないで機を織つてゐた。だが次からも〳〵告げる者が三人に及んだので遂に立上つて樣子を見に行つたとの故事で、君王が多數の讒言に依つて始めてそれを信ずる譬に用ひられる。
浸潤　水が次第に浸み込むことであるが、この場合は「浸潤の譖」といふ成語の略と見られ、水のやうに音もなく、次々にと浸み入る讒言といふ意となる。
膚受「膚受の愬」の略と解すべきで、垢やだにが身體に知らず〳〵たまるやうに讒言が次第に多く聞えて來る例言。
佗　ゆつたりとした形容。
悖人　道理に悖る人。
萁にて豆を煮る　萁は豆を取つた殘り莖枝であるから、それをいくら煮ても再び豆は取れない無駄な意。

と傳へられてゐる。この志は兄弟愛から出たのであらうが、行動は人倫に外れてゐる。詳說を要しなくても、これだけで以上の二人の行爲が道理に一致しない點では同一だと言へるのである。

臣婦第三

臣者、專奉君者也、婦者、專奉夫者也、之死矢靡佗者也、此故、事君、則闕奉於定省、以獻其身、奉夫、則殺服於父母、以加身姑、然風習、臣道以寬、婦道以嚴、蓋嚴于別姓、寬于娶女者、周公之制也、嚴于婦道、寬于臣道者、非古之制也、故司徒、敎官也、周公猶置媒氏、司男女、無夫家者而會之、故管仲合獨之法、周公之遺制也、非所謂霸術也、以是非律之、豈無欿然哉、保人情之道、不如此則弗通、夫婦人、一與人齊、終身不改、禮之節也、稱無夫家、稱獨、則可否有時之宜而存、蓋淫與亂者、禮法之所屏、不爾而啓行去就、配偶可成、苟峻其義、以待人、則其說愈美、而愈將多怨讟焉、或曰、世難于其人者風化之衰也、使天下嗜義理、如芻豢、則使夫人咏關雎、賦行露、此說非也、德其孰盛於堯舜

臣とは專心になつて君に仕へる者を稱し、婦とは夫以外に心を散らさない者を稱する。生前は常に心を緊張させてゐて、死に至つて始めて安堵するのが理想的な臣婦の道である。故に臣が君に仕へてゐる間は朝夕の孝養を闕いて迄も一心になるのが宜しく、婦が夫に仕へては實父母の衣服を薄くしても婚家の父母に不足をさせてはならない。然し現在の世俗は臣道には比較的寬であり、婦道には嚴である。といふのは嚴格に姓を分つからであらう。嫁を娶るのに寬大なのは周の制度であつて、婦道に嚴、臣道に寬なのは古制ではない。故に周時に民事を司つた司徒の外に媒氏といふ官が置かれて男女婚姻のことを司つた。管仲の合獨（配偶及び獨身）の法は周の制度を模倣したのである。餘り條理正しくばかりして融通をきかせなければ、天下中に不滿足に思ふ者が充滿する。人情を保つ方法としては媒氏のやうな官を置くのがよいので、夫婦共に一度配偶者を得れば終身變らないのが禮道の本義である。嫁ぐ家が無いと言ひ、獨身と稱する如きは程度があるので、それを口實として淫亂になれば禮法は破壞される。故に出來るだけ適當な相手を得るのが宜しいので、徒らに條件を大きくして相手を待つてゐたのでは、論は正しいが國中に配偶者を得られない者の悲しい聲が滿ち充ちるであらう。或人は「男女が互に氣に入る配偶を得られないのは、敎化の衰へた證據である。天下が

周孔、而堯之朝、而有共工驩兜鯀三苗、舜之家、而有頑父嚚母傲弟、周公之討管蔡、不化于周公之德也、孔子之出妻、不率孔氏之敎也、國遠於家、豈得曰家人不化、而國人可化哉、然則彼或說、峻其義、以强情也、蓋周季、義變爲俠、田光死、侯嬴剄、男子之俠也、宋共姬焚、秋胡婦溺、女子之俠也、夫君者、臣之所天、夫者、婦之所天、然則臣婦之於君夫、其道一也、臣之去就在義、則婦之去就、亦宜在義、義弗可虧、則逼之以衆、劫之以兵、見死不更其守、燕人伐齊、刼王燭燭曰、忠臣不事二君烈女不更二夫、是燭之言、義不受辱也、夫君臣夫妻、禮以合、義以離、離而有合、何戾王燭之義、故晏平仲曰、一心可以事百君、二心不可以事一人、是之義也、故再仕之臣、可以死于君、再醮之婦、可以死于夫、敎之所廣也、昏姻之

非常に義理を解するやうになれば、人々は禮儀正しい『詩經』にある『關雎』とか『行露』とかの詩を唱ひ、それに書いてあるやうな、申分のない生活を暮せるやうになるであらう」と言ふが、それは大いなる誤りである。堯舜周孔の時代よりも德の盛んな時があつたらうか。しかも堯の世に共工、驩兜、鯀の三種族があり、舜の家に頑父、嚚母、傲弟があつた。周公が管蔡を討つたのは、その德に從はなかつたからであり、孔子が妻を出したのは彼女を敎化するのが不可能だと知つたからである。國と家とは全然關係が異なつてゐるので、家人を治められないで一國を治め得るかと非難するのは當らない。若しさうとすれば前述の說は餘りに理想的に過ぎて現實には適せない。周の末世には義が俠と變化して來た。田光が死に、侯嬴が自殺したのは男子に於ける俠の例であり、宋の共姬が焚かれ、秋胡の婦が水死したのは女子の例である。君の幸福は臣たる者の第一に願ふ點で、夫の幸福に依つて婦は生き甲斐を感ずるのであるから、臣が君に、婦が夫に對する道は同一である。臣の行動一切が義に支配されるとすれば、婦も亦義の命ずる通りの行爲を採らなければならない。義に虧けない場合は如何に大衆から暴力で迫られ、兵で攻められたとしても、死を堵して君夫を守る覺悟が必要である。嘗て燕の人々が齊を討つてその王燭を捕虜とした時、王燭は「忠臣は二君に仕へない。

義、周之道、則繫之以姓而弗別、綴之以食而弗殊、故雖百世、昏姻不通、殷之道、則以爲四世而緦、服之窮也、五世而祖免、殺同姓也、六世親屬竭矣、其庶姓別於上、而戚單於下、故昏姻可通、謹按、古者、姓氏同賜、周語曰、帝嘉禹德、賜姓曰姒、氏曰有夏、胙四岳國、賜姓曰姜、氏曰有呂、衆仲對魯隱公、曰、天子建德、因生以賜姓、胙之土、而命之氏、諸侯以宇、爲謚、因以爲族、官有世功、則有官族、邑亦如之、杜云、建有德、以爲諸侯、由其所由生、以賜姓、謂若舜由嬀汭、故陳爲嬀姓、諸侯位卑、不得賜姓、故其臣因氏其王父宇、或爲謚、因以爲族、難然、周之建國、唯賜胡公滿姓嬀之外、晉鄭魯衞、皆繫而弗別、則分姓匪周焉、故古之姓者、以生、氏者、爲有國土也、故軒轅氏、陶唐氏、有虞氏、有夏氏、皆有國之號也、猶

烈女は二夫に見えない」と斷乎として言ひ放つたのは有名な話であるが、これは生命を犧牲にしても義を守つた良い例である。一體君臣や夫婦は禮の爲めに合し義の爲めに離れるので、君や夫が不義の行爲があれば離れてもよく、而も一度離れた者が再び義の合つた者と結合するのは、少しも前の王燭の言葉と矛盾してはゐない。晏平仲が「堅い節操を持つてゐたならば、百人の君に仕へても少しも恥ではなく、その反對に無節操であるなら、一君だけに生涯仕へても恥ぢなければならない」と言つたのはこの意味である。故に再び仕へた臣はその二度目の君の爲めに生命を犧牲にすべきであり、再婚した婦は、義の爲め必要だとあれば今度の夫の爲めに死ねば宜しいので、かう解してこそあの言葉はより廣い正しい意味となる。婚姻の制度として、周は永久に姓を繫げてゐるので百世の後も再び同族中で婚姻關係は結べない。殷は四世の間だけ同服を著し、五世となると祖先を分け、六世に至れば親戚關係がなくなる。故に再び以前同族であつた者との婚姻を結ぶことを妨げない。篤と考へて見るのに古へは姓と氏と同時に賜はつたやうだ。その證據として自分は次に周語から少し引用したい周語にはかう書いてある。「帝、禹の德を嘉して姓を賜ひ姒と曰ひ氏を有夏といふ。四岳に國を胙し、姓を賜ひて姜と曰ひ氏を有呂といふ。衆仲、魯の隱公に對へて曰く、天子德を建て生に因て以

後世之曰周、曰漢、如胡公滿賜姓媯、命氏陳、亦一徵也、古者、黃帝姓姬、而其子或同姓、或異姓、或無姓、而姓由所出而賜、氏由胙土而賜、則姓氏同有之、而賜之則有、不賜則無、如爵位然、後世以之爲世繫、於是、以自其所出傳者爲姓、故人之於姓、猶木之於幹、以所別其後者、爲氏、故人之於氏、猶木之於枝、轉環觀之、本亦元所別、而別亦所爲本、姓亦猶氏、氏亦猶姓、於是、致姓氏相通焉、於是姓氏之設、古今名同、而事異也、故以世繫言之、堯之祁、舜之姚、夏之姒、殷周之子姬、是時猶無後世氏族之氏、皆骨肉之遠兄弟、與魯之曰臧曰孟曰季似矣、故堯舜之日之氏者、猶後世之國號、堯舜之日之姓者、殆類周之氏族、然則周公之立制、周已前別者、爲姓、以通昏姻、周已後別者、爲族、不以通昏、虞夏同禘黃帝、殷周同禘帝

て姓を賜ふ。之に土を胙して之に氏を命ず。諸侯は字を以て、謚を爲し、因て以て族と爲す。官、世功あれば則ち官族あり、邑も亦之の如し。杜云ふ、有德を建てて以て諸侯と爲す。其の由て生まるゝ所に由て、以て姓を賜ふ。舜。媯汭（直隸・省懷來縣）に由る、故に陳を媯姓とするが如きを謂ふ。諸侯の位卑し、姓を賜ふことを得ず。故に其の臣因て其の王、父の字を氏とす。或は謚を爲し、因て以て族と爲す」と。然し周の建國の時には、胡公滿一人に姓を賜うて、他の晉、鄭、魯、衞などは全部以前と同姓であつたから、姓を分つ制度は、周に於てあつたのではないと思ふ。故に古の姓は自己の出生關係であり、氏は所有地との關係から得たのだから、軒轅氏、陶唐氏、有虞氏、有夏氏の名は全部國號を付けたのであつた。後世の周といひ、漢といふのも同一で、胡公滿に姓名を給ひ、氏を陳と稱させたのからも之を證される。太古に黃帝は姓を姬といつたが、その子は或は同姓であり、又は異性である。或者は全然姓が無い。そして姓は出生關係から、氏は封土關係から賜はるので、姓氏は多く同時に一人が有し、爵位のやうに賜はる者と賜はらない者とがあつた。後世に至ると自然と世襲になつたので、出生關係と封土關係とが判明せず、氏もその儘姓となつた場合が多い。人間とその姓とは木と幹との交渉があり、先づ姓があつて後に氏が決定され、人間と氏との交渉は木

蘖、百世不通者、終古之通義乎、子姬不可以通昏矣、世遠則可以許乎、殷制豈可謂之不異於禽獸哉、夫人、服盡則親盡、親盡則情不逮、情不逮、則喜不慶、憂不弔、慶弔不接、親猶佗矣、同繫祖於黃帝、子姬可通、則百世不昏者、周道然也、蓋古人、損益於禮、雖條理一定、而習俗事勢、弗能無沿革也、後世取法於周、以爲極天無易、果然乎、舜天地之一罪人爾、吾聞舜之娶婦、不合周公之制、未知舜之獲罪於天地、舜不獲罪於天地、則親絕之後、昏可通矣、噫昏雖百世不通同姓、之正而嚴也、於娶女、則以姪娣從、不亦嚴于同姓、而疏于異姓乎、丈夫不宜娶鹿、則女子亦不宜娶牡、姊妹可娶夫乎、兄弟宜娶婦、娣猶同行也、姪者、子之行也、豈得正於條理哉、意周之開國、以故習尙難除、而存之、待後之埀益者乎、善讀周禮者、而後知

と枝とに依つて、若し空から觀れば本が枝と見え、本來の枝が本と見えるやうに、見方に依つて姓も氏のやうに氏も姓のやうに見える。かうした經過があつて姓と氏とは殆んど同一と考へられてゐるものの、詳しく言へばあくまで別物だと考へなければならない。堯の祁といへるを始め、舜の姚、夏の姒、殷周の子姬など、未だ當時には後世の所謂氏族の氏は存在してゐず、これ等は悉く遠い兄弟關係に相當した。同じ魯の中で臧、孟、季と分れてゐるのと丁度等しい關係にある。故に堯舜の日の氏は後世の國號に類し、堯舜の日の姓は周の氏族と一致してゐる。若しさう解しても大差がなければ、周の制度は周以前に分れた者を姓として婚姻を許し、以後に分れた者を族として許さない。虞夏は共に黃帝を祖先として祭り、しかも各々兩者は永久に通婚が許されなかつた。子姬も大分遠い子孫にならなければ許されない理窟となる。殷の制度に就て「禽獸と少しも異らない」などといふのは飛んでもない誤解である。人間は親類の服を著ける範圍を越えれば親しみが盡き、親しみが盡きれば情が通はず、情が通はなければ一方に祝ひごとがあつても不幸があつても平氣で、さうなれば他人と同じくなるのは當然である。同じく黃帝を先祖に戴く以上、百世を經ても婚姻關係を結ばないのが周の制度であるし、これは理論から言つて一應尤もに聞えるが、而も世の中の風俗習慣は時に應

之焉、唯不知禮有損益、同之于非聖人之言、故今曰親絶通昏、亦宜也、將以周公責我、曰姪娣相從、非宜也將曰、禮者、自聖人出、聖人之制禮、洞視古今、制之中、一嚴一寛弛張有所宜欲自勝上之、非聖佛經、若使之可議、孔子議之、豈竢女哉、孔子、周人也、豈議周禮哉、孔子未得志乎制作、則夏時殷輅、周冕韶舞之外、盡循守周禮、與否、晋則未能知之也、質之於條理、措之於人情、而未得之、宜陳力贊天地之化育、宜陳蒭蕘之邇言、竢後世之作者、不宜有隱、不宜以所不信、曲從獻諛詩曰、善戲謔兮、不爲虐兮、記曰、張而不弛、文武弗能也、弛而不張、文武弗爲也、是一寛一嚴、弛張有宜也、豈在嫁娶百世不通、姪娣從之哉、故婦無子去、周之禮也、非今之所宜、夫臣之於君、婦之於夫、以身奉之、則臨變守節、其定分也、由

じて或程度の變化はまぬがれない。後世に於て、周の制度を理想的とする者は、果してこれが永久に天と共に不變と信じたのであらうか。聖人といはれた舜も或意味からすれば立派な罪人である。自分が聞くところに依れば舜は周公の制度に從はないで妻を娶つた。然しそれに依つて舜が天地に罪を得たとは未だ聞かないのである。舜がこの行爲あつてしかも罪を得ないとすれば、親しみの絶えた後はその人々と結婚しても決して誰でも罪を得ることはない。噫、百世を經ても同姓とは婚姻關係が結べないといふのは非常に道理に適してゐて理想的であるかのやうに思はれるが、一人の女を娶る場合にその姪や妹までも從へて行くのは如何なる理由があるのだらうか。男性だけがこの規定を守るので、女性はどうでもよいのであらうか。男性の多妻を咎めないのなら、女性も多くの夫を持つても差支へないではないか。若し姉妹が一人の夫を共有したとすれば、かの女等の立場からすれば一體周制は如何に適用されるのか、理窟から言つて男性だけに禁じられ、女性に許されてゐるのは如何。自分が考へるのに周が制度を設定しようとした時には未だ昔の風俗が殘つてゐてそれを一度には改めにくいから幾分か殘存させてその結果の損益を見たのではあるまいか。十分に周の禮を理解した者には自分の言が了解出來るであらう。禮に損益あることを知らない者だけが自分の言を聖人

義去就、時之宜也、故霜肅露和、天地有時、觀元明之治、從夫死者、旌表門閭、故其跡比比相接、蓋婦于人之道、貞順可以事夫、不幸失偶　須盡力事舅姑、宜使舅姑意、婦在子猶生、宜使舅姑不爲鰥寡、宜使撫育子女、承祭祀、不宜使父母重憂慮、作無益、害有益、德之賊也、不幸上無舅姑父母、下無子女乎、宜灑掃墳墓、奉祭祀、死而後已、之謂能事地下之人、婦之事夫、吾聞以貞順、未聞以殉矣、子曰、過猶　及、匹夫稱之、猶可恨之、況治天下者、而旌表之、殺人之道也、孟子曰、可以死、可以無死、死傷勇也、故臣婦之殺身、以凶暴不能守身也、古人有言、死或重於太山、或輕於鴻毛、重之與輕、唯義之從、殺人殺身、共非美事、非美事、故事由于不得已、得已而不已、不得已而已、失義則同、赴死如歸、護生全身、從義則一

を侮辱したといつて怒るのである。故に今「親戚としての交際が絶えた後には婚姻を通じても差支へはない」と言へば、「それは周公の制に背くから不可である」と言ひ、「姪や妹まで共に一人の男性に娶られるのは宜しくない」と言へば「一體禮の制度は聖人が決定したのであり、聖人が古今を洞察して最も適當なものを選んだのだから、徒らにそれに異議を申立て聖人を侮り經典の可否を議するのは穩かでない。若しその制度に異議を入れる餘地がある程不完全だつたならば、汝を待つまでもなく、大聖人の孔子が昔に氣がついてゐた筈である。孔子ですら何も言はなかつたものに、汝等が云々する資格があるか」と抗辯する。然し元來孔子は周の者であるので、自國の禮道を上下して云々しよう筈がない。孔子は禮を制する上でまだ志を伸べなかつたから、夏時代の曆、殷時代の輅（車）周の冕、舜が制定した韶の舞（『論語』所載）の外は全部周禮に從つたところが晉はまだこれを知らなかつた。禮の制定について條理正しく、人情を斟酌して尙ほ十分と思はれないなら、宜しく皆が協力して天地自然の原理に從ひ、或場合には賤しむ人物の進言をも考慮して、より正しい道に進むのが正當であらう。相互に隱し合つてはならない。又信念なしに曲從して諛びるやうなことがあつてはならない。詩に善く戲謔すれども虐をなさず」といふ一節があり、記には「張つて弛めざれば文

也、臣婦于人者、勿失身於俠、勿存生於苟免、故殷受之亡、倒戈以北者、雖由受之暴虐、武之恩惠、實殷臣之恥也、唯無義以處宜、何用義爲、爲義至俠、道之賊也、

〔註〕

定省　昏定晨省の略で、子たる者が父に對して晩にはその寢具を定め、朝にはその安否を顧みること。

司徒　支那古代の官名の一、周では民事、教育を司り、漢では三公の一となる。

覇術　武道を以て天下を治める方法。

欲然　不滿の狀。

怨曠　怨女曠夫の略で、共に配偶者がなくて恨むこと。

葛藟　家畜。

關雎　詩經中に在る詩の名。

緦　麻絲で目を荒く織つた衣服、喪中三ケ月間使用するもの。

姪娣　娣は兄の妻が弟の妻に對していふ言葉。

武も能くするなし、弛めて張らざれば文武は爲らず」とある。これは或場合には嚴格に、適當に應じて寛大にするのが理想的であるのを暗示してゐる。百世も通婚を許さず、しかも姪や妹を連れて婚するのが理窟に合つてゐるだらうか。故に「子なき婦は去る」といふのは周の禮で、現在の道德ではない。臣が君に對するのも、婦が夫に對するのも同じで、一命を犧牲にする覺悟が欲しく、如何なる場合に臨んでも節を曲げないのが道である。義に依つて去就するのは或場合には許せるが一般的ではない。故に天地が成立して以來、天下が非常に能く治つた時には、必ず夫に從つて死した者の姓名を村の入口に掛けて一般に公表する例になつてゐたから、續々としてこの擧に及ぶ者が出たのであつた。一體、婦女の道としては唯々貞順に夫に事へるのが宜しく、若し不幸にして夫を失つた時には舅や姑の爲めに全力を盡して孝養しなければならない。舅や姑に眞の娘であるかのやうに思はせ、寂しい思ひをさせず、子女を養育して夫の菩提を葬ふのが婦道であり、父母に二重の悲しみを掛け、無益のことに有益の身を亡ぼすのは道の賊と言つてもよい。更に若し運が惡く後に仕へる舅姑、父母もなく、養育する子女が存在しない時には、その家代々の墳墓を掃除し、死に至るまでそれ等の靈を慰めるのこそ地下の人に事ふる道だと言へる。婦が夫に對して貞順にせよとは常に聽く言葉

蒭蕘　蒭蕘のこと。草刈りと木樵り、賤しい者。

旌表　人の善行を公表して衆人に知らせること。

であるが、殉死せよとは聞いたことがない。孔子は「過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し」といはれた。地位も身分もない匹夫が殉死を讃するのも聞き苦しいのに、天下を治める者までが、かうした殉死者の姓名を公表するのは、人を殺す道を奬勵してゐるとしか思はれない。孟子は「以て死す可く、以て死することなかる可し。死すれば勇を傷る」と言つた。故に婦女、家臣が夫や君主の後を追つて死ぬるのは、身の内に感情だけが湧き立つて、よく身を靜める理性を失つたからである。又古人の言として「死或は太（泰山）より重し、或は鴻毛より輕し」といふのが傳はつてゐるが重いのも輕いのも唯義に從つたか否によつて決定するので、絶對的なものではない。人を殺したり我が身を損したりするのは共に美事とは言へない。美事でないから、已むを得ない場合の外は自ら進んで爲すべきではない。他に方法があらうとなからうと、義を失した行爲は共に不可だ。又、義に從ひさへすれば死なうが生きやうがその行動は同一に評價される。臣であり婦である者は輕擧してはならないと同時に徒らに生をむさぼつてもならない。故に殷の王が亡びた時に武器を取りまとめて敗走した者は、如何に彼が暴君であつたとしても、又武王が君子であつたとしても、實に殷の臣たる者としてこの上もない恥でなければならなかつた。いざといふ場合に義に從つた行動が出來ないならば、

平生から義を口にしないか、平和のうちに主のもとを去ればよいのだ。義を小さく見て俠と解するのは道の賊である。

孔子第四

或日孔子は朝早く起き、片手を後にまはし、片手で杖を曳きながら門前を散歩してゐたが、何と思つたかやがて大聲でこんな文句を節つけて言つた。

「泰山それ頽れん
梁木それ壞れん
哲人それ萎れん」

やがて悲しさうに言ひ終ると、孔子は靜かに門内に入り戸の傍に坐して何か深く考へて動かなかつた。門弟の子貢が遠くからこの韻律を注意して聞き非常に驚き「師は今日に限つてあんな不思議なことを言はれた。泰山が頽れるのを自分達はどうして抑へられやう。家を支へてゐる梁木が壞れたり、道德の基準となつてゐる哲人が萎れたりすれば、自分等はぢつとしてはゐられない。師は自分の死を豫言されたのではあるまいか」と云ひながら急いで家の中へ這入つて行つた。

孔子蚤作、負手曳杖、消搖於門、歌曰、泰山其頽乎、梁木其壞乎、哲人其萎乎、旣歌而入、當戸而坐子貢聞之、曰、泰山其頽、則吾將安抑、梁木其壞、哲人其萎、則吾將安放、夫子殆將病也、遂趨而入、夫子曰、賜爾來何遲也、夏后氏、殯於東階之上、則猶在阼也、殷人、殯於兩階之間、則與賓主夾之也、周人、殯於西階之上、則猶賓之也、而丘也、殷人也、予疇昔之夜、夢坐奠於兩楹之間、夫明王不興、而天下其孰能宗予、予殆將死也、蓋寢疾七日而沒、晉讀檀弓、每嘆後儒之不分曉此章、蓋孔子嘗言、危邦不入、亂邦不居天下有道則見、無道則隱、又嘗言、親於其身、爲不善者、君子不入也、又言、用之則行、舍之則藏、昔者、太公釣渭上、老遇文王、舍也、藏于釣魚、用也、行于鷹揚、與孔子之所言符矣、而孔子則不然、當時諸侯之國、何邦不危、何邦不亂、何國用之、何國有道、然猶周流不已、曰、苟有用我者、朞月而已、可也、三年有成、望于世如此、其栖栖爲佞者乎、爲人見疑、楚狂接輿、歌而過孔子、曰、鳳兮、鳳兮、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追、已而已而、今之從政者殆而、接輿其知孔子者與、愛而危之、望卷而懷之、孔子又曰、賢者辟世、當危亂、諷辟世、非桀溺之意全非也、是以孔子憮然曰、鳥獸不可與同群、辨非辟人之士也、吾非斯人之徒與、又辨不辟人也、而誰與、汝

孔子はそれを見て云ふのに「どうしてこのやうに遲かつたのだ。夏后氏を君が常に坐る東に向いた階の上に假葬したのは、まだ生きてゐると同樣に取扱つたからである。殷の人々が兩階の間に君を假葬したのは、主客が差挾む爲めである。周の人々が西階の上にしたのは客のやうに取扱つたからである。そして自分は殷の生れである。昨夜自分は兩楹の間に葬られた夢を見た。世の中に賢明な君主が少しも出ず、自分の言を容れる者はゐなくなつたから、自分はもう死んでもよい時である。」かう云つて遂に七日後に死んでしまつた。自分は檀弓篇を讀む毎に後世の儒者がこの章を眞に理解してゐないのを悲しく思ふ。孔子は曾て「危邦には入らず、亂邦には居らず。道あれば則見はれ、道なければ則隱る」と云つたし「親しくその身に不善を爲すものには君子入らざる也」「之を用ふれば則行き、之を舍れば則藏す」とも云つた。昔太公望は渭水の邊で毎日釣をしてゐたが、年老いてから文王に遇つた。これが所謂舍てるのである。又釣つた魚を藏した。これが所謂用ふるのである。その恬淡さは孔子の云ふところと符合する。然し孔子は太公望と同じ行爲を採らなかつた。當時の諸國で、危くない國はなく、亂れない國はなく、賢者の不必要な國はなく、道が十分に行はれてゐる國もなかつた。然し孔子は「苟も我を用ふる者有らば、朞月にて已むとも可なり。三年ならば成す有

之辟世、無與之者、則斯辟人之在汝也、天下有道、丘不與易者、孔子志在救時也、荷蓧丈人、意許行之徒、而果隱者也、非其四體不勤、五穀不分、及止子路宿、出其二子見之、及至而不遇、子路曰、不仕無義、長幼之節、不可廢也、君臣之義、如之何其廢之、欲潔其身、而亂大倫、君子之仕也、行其義也、道之不行、已知之矣、意是夜丈人諷孔子之求仕也、故曰、必於不仕者、無義也、猶孟子無父無君之無也、彼二子長幼之節、不可廢也、則此君臣出處之義、如之何其廢之、爲欲潔身、廢仕之道、棄義亂大倫也、故曰、君子之仕也、行其義也、然而觀接輿荷蕢沮溺、及此丈人之徒、雖操守不同、而皆一時之英、皆遠危亂、憂君子之不遠引高舉、歎曰、道之不行、已知之矣、後人以名信之不考其言行、隨章生義、不問彼此矛盾、見議聖人者、一例非之、非翅不識議夫子者、終不識夫子也、佛肸以中牟畔、召、子欲往、子路以夫子之所言、怪之、夫子無明辨、但言磨涅不磷緇、不磷緇、豈在義之可否哉、當是之時、孔子有所困而感乎、遂言、吾豈匏瓜哉、焉能繫而不食、何言之窮、豈待善價之謂哉、子之欲往、蓋乘桴浮海之意、激而戲也、非其志矣、故其終不往、以觀本志、子路之言、是也、公山弗擾、以費畔、召、子欲往、子略不悅、子曰、夫召我者、而豈徒哉、如有用我者、吾其爲東周乎、二子同畔、夫子同欲往、子路同不欲、而答不同者、聘意不同也、蓋弗擾之聘、以周室爲辭、於是孔子感于諸侯之無志周室、亦乘桴浮海之意、非必之之言、故欲往者、望爲東周、其不往者、意同子路、陽貨欲見孔子、孔子且不見、季孫受女樂、孔子且去魯、孔子何獨眷眷夫二子、靦然以穀乎無道、夫子

らんとす」と云つた。世の中にこのやうに希望を持つてゐたのである。然しかうした希望に急な狀態は、或場合には人から疑はれる種を蒔かないとも限らない。故に身を隱して無道の世を避けた楚の狂接輿は、孔子が楚の昭王に聘せられて同國へ行かうとした時、その傍を過ぎて、

「鳳や、鳳や、
何ぞ德の衰へたる。
往く者は諫むべからず、
來る者は猶追ふべし。
已みなん、已みなん、
今の政に從ふ者の殆いかな。」

と歌つた。彼は孔子を知るものと云へる。彼は孔子を敬愛してその一身を危うせんことを心配してから歌つたのだ。孔子は更に「賢者は世を辟く」と云つて、かうした戰國の世に當り、身を全うせん爲め、世を避ける者と諷じた。この意味は有名な隱者桀溺の意を全く非としたのではない。故に桀溺に對して憮然として「鳥獸は與に群を同うすべからず」と云つた。それは人を辟くるの隱道者流でないことを辨じたので、自分は斯の徒でないと云つたのも、又人を辟けざるを辨じたのである。「而誰と與にする」と云つたのは、桀溺等が世を辟けたのはこれと與にする者が無いからでそれは人を辟けたのは彼等で世人でない。「天下道有らば丘與に易へざるなり。」と孔子は云つた。孔子の意は鳥獸と一緒になつてをるやうな逃避的なことを欲しないで人々と事を與にして當時の混亂を救ふといふことにあつたところが、農民の風をした丈人（隱者）と路傍で逢つたが、この隱者は許行（農業社會主義者）の徒輩で、而も世を辟けて隱れたのだが、平生、手足を動かさず五穀を作らないで寢て飲食する身ではなかつた、子路を止めて宿せしめて馳走してから、その二子をして子路に挨拶させたが、氣まづい結果に終つた。子路は「君に仕へなければ君臣の義がない。蓋し長幼の秩序も、廢してはならぬ位だから、殊に重い君臣の義は之をどうして廢することが出來ようぞ。ところが其身を潔くせんと欲して世を逃れ、君臣の大倫を亂るのは不心得だ。君子が出て世に仕ふるのは其義を行はんとするからだ。道の行はれざることは當今の如き亂世に於て必然だと云ふことはわかつてゐる」と云つた。思ふにこの夜丈人は孔子が仕官を求めるのを諷したのであらう。故に「必ず仕へまいとするものは義がないのだ」と云つたので、孟子が「父なく君なきは禽獸同樣だ」とするの意味と同じである。かの二子が長幼の秩序を廢することが出來なければ、この君臣の義はど

之志、可知矣、蓋夫子生于衰周、傷周道塗炭、王綱不振、禮樂日喪、僭僞年長、上下相賊、骨肉相鬩、故有夷狄之有君、不如諸夏之亡也、之歎、於是、深欲興周道於東周、然周公弗可得、東遷已來、唯管仲能相桓公、九合諸侯、不以兵車、使諸侯知貴周屛僭故曰、如其仁、如其仁、又曰、一匡天下、民到于今、受其賜、微管仲、吾其被髮左衽矣、管仲嘗與召忽同仕公子糾、欲立之、不成、及糾之殺、召忽死之、管仲不死、糾、兄也、小白、弟也、召忽之節、豈不愈管仲遠哉、是由賜之所疑也、而孔子曰、豈若匹夫匹婦之爲諒也、自經溝瀆、而莫之知也、召忽之死、當矣、甚哉、子之抑忽、當是之時、雖非無戎狄之難、而非有蒙古韃子之强、向微管仲、豈至被髮左衽哉、其抑忽也甚、揚管亦甚、抑揚如此、夫子之憤激、可知也、故孔

うなるか。どうして廢することが出來るものか。だから自分の身だけ潔白を保たうと思つて仕官の道を承知しなければ、つまり義を捨てて人間の道を亂す結果になる。故に「君子の仕ふるや其義を行はんとなり。」と云つたのである。接輿、荷蓧、長沮、桀溺及び丈人と云つた人々は操守の上では同一と云へないが、皆平凡人でないと云ふ點で同一である。これ等の人々が危險を避け、身の安泰を守り、君子が身を退けて超然高擧しないのを歎いたところから「道の行はれざる已に之を知る」と云つたのである。後人は徒らに表面だけを見て言行を考へず、一章々々を解釋するが全部の聯絡を取らず、矛盾をも問題にせず、聖人の言行に疑問を抱く者があれば理由無しに非難する。この態度は孔子について疑ひを抱いたものを知らないばかりでなく、恐らくは孔子自身をも知らないであらう。晉の趙氏に仕へて、中牟の宰となつた佛肸が叛を計つて孔子を呼ぶと孔子は直ぐに出かけてゆかうとした。折柄門弟の子路は孔子の言葉について不思議に思つた點があつたが孔子はそれに明辯しないで、たゞ「至つて固いものは磨けども、うすろがず至つて白いものは染むれども黑まぬ」と云つたのみであつた。蓋しそれは十分修養ああれば、濁亂の中に混じても大丈夫だと云つたのである。要するに義の可否よりも人物の根本が大切なのだ。孔子は當時苦難を經驗して感ずるところがあつたら

子周流四方、冀諸侯之一匡天下、興周道於東周、而君君臣臣、安老者、懷少者、辟土地、朝秦楚、莅中國、而撫四夷、則非孔子之所期也、何以其微之、蓋孔子至文王之德、曰三分天下、有其二、以服事殷、使孔子得志相諸侯、豈不期至德哉、轍環天下、身老于行、曰、道其不行矣夫、又曰、甚矣吾衰也、久矣、吾不復夢見周公、又曰、鳳鳥不至河不出圖、吾已矣夫、於是乎、欲浮海、欲居九夷、方孔子嘗使二三子各言其志、其所言、其政教禮樂之事、而孔子無所問然、晳獨無彼二三子或知我之意由時春氣和、春服亦成、思童冠相携、優游風咏乎林泉、蓋櫝玉價不至、忘沽沽之者、乃阿衡樂有莘、尙父安渭濱、之日之氣象也、雖爲東周乎之權、則似違、而無道則隱之常、則有符矣、蓋是孔子道不行之日、點有從容時行藏之言、焉得不發夫子

しく「我豈匏瓜ならんや。なんぞ能く繫りて食はれざらん」と云つた。蓋し孔子は匏瓜の如くぶらり、しやらりとして無爲に世を送る事を欲しないので、佛肸の召に應ぜんとしたのである。が、孔子の言は大いに窮してゐるところがある。それは大いに世に迎へられようとしたのだらうか。恐らく左樣でなく、孔子が佛肸の招きに應じようとしたのは、「道が行はれねば、桴に乘つて海上に出で僻遠の地で世を憂ふる心をゆるうしよう」との心で意激して戲れに右の如く云つたので、その本意でなく、だから佛肸のもとへ行かなかつた。玆に至ると子路の解釋は正しい。公山弗擾が高祿で孔子を召したとき、子は往かうとしたが、子路はこれを悅ばなかつた。其處で孔子が云ふのには「夫れ我を召すものは豈徒ならんや。我を用ひる者あらば、吾は其れ東周を爲さんか」と答へたのである。この時孔子は公山氏を助けて魯の公室の勢ひを盛り返へさうとしたのだ。佛肸、公山氏共、主人に叛き、孔子を招くと、孔子は共に往かうとしたが、子路は二度とも悅ばなかつた。而も孔子の答へが同一でないのは招かれた意味が異つてゐたからである。蓋し弗擾の聘は周室を辭としたので、孔子は諸侯が周室に志のないのを感じた。又桴に乘つて海に出ると言つたのは、何も必ずさうしようと思つたのでもない。だから往かうと欲したのは周の文王、武王の道を東方に興さうと望んだからで、往かなかつたの

喟然之嘆哉、夫魯者、周公之所邦周禮存魯、故曰、我觀周道、幽厲傷之、吾舍魯何適矣、後終修詩書禮樂、傳周公之典於後世、所以興點乎、夫神力耗衰將死、常人猶有覺之者、孔子已衰、蓋自覺將病、且有感于坐奠之夢、泰山梁木、嘆周魯之道、往頹壞矣、哲人之萎、嘆明王賢相、不復作矣、鳳鳥不至之意也、子貢聞以爲不祥、遂趨而入、夫夢者、妄也、孔子恃夢哉、蓋人情之感應、聖凡一也、夢之吉凶、豈無感于情耶、果無感于情乎、不夢見周公、亦何傷、因衰謝、而感於夢、人情之所同然也、夫學者、天子、曰辟雍、諸侯、曰泮宮、人君養老於此以乞言、禮也、雖天子、而祖而割牲、執醬而饋、執爵而酳、冕而摠于、王制曰、七十養於學、達於諸侯、學記曰、大學之禮、雖詔於天子、無北面、所以尊師也、故兩其占曰、明王不興、而天下孰

は子路と同じ考へを持つてゐたからである。魯の國政を專斷した陽貨は孔子に見えようとしたが孔子は逢はなかつた。季桓子が衞の國から女樂を受けてさへ孔子は決然魯を去つた位だ。さうした嚴正な孔子がどうして二子に戀々として無道に與みしようぞ、我々はかうした點からその本心が如何にあつたかを想像出來る。一體、孔子は周の末期に生れたので、常に周の道が振はず、王綱が張らず、禮樂の制度が日々に緩み、惡德のみ年々長じて、上下が互にいがみ合ひ、兄弟が互に喧嘩する時勢を悲しんでゐた。故に如何なる野蠻國でも賢明な君主が居たら、このやうな狀態よりかましであると考へないことはなかつた。かうして深く周の道を東方に起さうとしたが、周公に用ひられないで空しく東方を放浪したのである。ただ管仲が能く桓公を助け、諸侯を合し、兵を用ひないで諸侯に周の尊さを知らしめたので、「其れ仁に如かんや、其れ仁に如かんや。」「天下を一匡す、民今に至つて其の賜を受く。管仲微かりせば吾れ其れ髮を被り衽を左にせん」と稱讚した。管仲は嘗て召忽と共に公子糾に仕へ、糾を立てようとしたが失敗して糾は遂に殺されてしまつた。これを聞いた召忽は直ぐに殉死したが、管仲は死なかつた。糾は兄であり、小白は弟である。召忽の節は管仲よりも非常に大ではないか。かう子貢が疑うて問ふた。然るに孔子はこれに對して「豈匹夫匹婦の諒を爲すや。自

擧斯禮、章宗於我所學是非此兆、必死而殯於兩楹之間耳矣、鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫者、嘆身不見盛世矣夫也、明王不興、而天下其孰能宗予者、傷其所學不行也、夫人有遇、有不遇、有才、有不才、有時、有義、出處行藏、不必同轍而行、若直以不仕、爲無義、亂大倫、顏曾之謂何、使太公死不遇文王之前、則爲無義耶、將爲獨善耶、不通之論也、孔子蓋有求于興周道、是所偏然如喪家之狗也、非不思接輿之徒之憂憂、非不厭危亂之不可處、唯懇懇周道、不能果於已、斃而後休、嗚呼、雖終不得志於當時、後之述作者、皆取法於斯、則功不在周公之下。

〔註〕
梁木　屋の棟を支へる大きな横木。
疇昔　昨夜。
楹　大きい柱。

ら溝瀆に經れて之を知ることなきが如くならんや。」と云つて召忽の死をこれに相當する小節だとして非難した。この時に當つて西方、北方の未開人の難が全然無くなつたのではないが、蒙古諸族の侵入する恐れはないから、たとひ管仲が居なくともそれ等の人々に征服される心配はなかつたのだ。ところが孔子は一方でひどく召忽を非難し、同時にひどく管仲を稱讚した。かく抑揚が過度だつたのは小節を抑へて大節を揚げようとした眞意を見るべきである。故に孔子は四方に放浪して諸侯が一日も早く天下を平定し、周の道を東周に興し、君臣別あり、長幼序あらんことを冀ふたのである。廣大な土地を有し、秦、楚を征服し、中國を統一し、四方の未開人を征禦するやうなことは孔子の目的ではなかつた。それは何を證據にして主張するか。自分はその證を擧げよう。蓋し孔子は文王の德を最大なものとして「三分の天下、其二を有して以て殷に服事す」と云つた。若し孔子が十分に手腕を揮つて諸侯の信用を得たならば、恐らくは諸國は文王の治下と同じやうに治まつたであらう。然るに事實は孔子は年老いるまで志を得ないで諸國を漂浪し、遂に「道、其れ行はざらん」「甚しいかな吾が衰へたるや、久しきかな吾復た夢に周公を見ず」と云ひ、更に「鳳鳥至らず、河、圖を出さず、吾已みぬるかな」と云ふに至つて、海に浮び、遠く國境外の未開國へでも行からかと思はし

鷹揚　こせつかぬこと。恬淡なこと。
莽月　一ヶ月。
栖栖　急がしい樣。
匏　ひさご。ふくべ。
桴　筏。
靦然　面目あつて人を見るさま。
匡　正しなほす。
諒　まこと。朗かなこと。
溝瀆　溝。瀆は小溝のこと。
自經　縊死。
戎　西方の蠻人。
狄　北方の蠻人。
被髮左衽　冠をつけず髮をふり亂して著物を左前に著てゐること。夷狄の風俗。
河圖　河圖は伏羲氏の時に黃河から出た龍馬（犬が八尺の馬）の背に記してあつた一種の圖で、易の八卦の根本となつてゐるもの。
間然　間は隙間で、缺點を指して非難する樣を云ふ。
沽　おろそか。
行藏　行は世に進んで自分の技倆を實地に行ふことを意味し藏は世から隱れて才能を示さないことを意味する。
幽厲　周の幽王と厲王の意で亡國の君のこと。
坐奠の夢　死んだ夢。
醬　ひしほのことで麥、麴、豆、米などをねかして鹽を交ぜた食料で采肉を漬ける料とする。
饋　食物をあてがふ。
醮　酒で口を洗ぐ。
爵　盃の意。
偏然　不安な樣。
喪家之狗　不幸の有つた家の家人が悲しみの餘り犬に食を與へることを忘れるが故、犬は痩せ衰へると云ふ義から、人の痛くやつれて見る影もないのに譬へる。

めたのであつた。孔子は嘗て弟子の一三人に彼等の最も氣の附いた點を云はせると、彼等は共に一國の政治、道德問題を論じて、孔子が缺點を指摘するやうなところがなかつた。時に座にゐた曾晳はひとり、彼の一三子の如く求むるところがなかつた。唯春が來て氣候がよいとき新らしい春服を著け、青少年達と林泉の間で樂しく歌ひ遊ばんことを望んだのである。それは櫃にある玉價がまだ出ないでこれを沽るのを忘れるもので伊尹が有莘に樂しみ、太公望が渭水の邊で釣を垂れて安住してゐた氣象と同じである。これは孔子が東周を爲すと云つて東方に文武、周公の道を起さうとした言葉とは一致しないかも知れないが、道が無ければ隱れると云つた言と符合する。孔子の道が行はれない時に少しも慌てないで世の中から隱れようと云ふ曹晳の言が孔子に喟然たる嘆聲を發せしめないでをられなかつたらう。一體魯の國は嘗て周公の勢力が行き渡つてゐたので、周禮は魯に存在してゐる。故に「我周道を觀るに幽厲之を傷む。吾魯を舍てて何處にか適かん」と云ひ後に詩書、禮樂を校して周公の大典を後世に傳へたのである。精神力が耗衰して死期が近づくと、常人でも種々なことを感じる場合が多い。孔子は已に身心共に衰へ、死を自覺したので、今まで永久に不變であると思はれてゐた周や魯の道德が廢頽するであらうことを、第一に悲しんだのである。聖人の悲しむ

內容は賢主、宰相などと異つてはゐなかつた。これが本章の最初に述べた詩の本意である。子貢はこれを聞いて不吉だとして急いで家の中に駈け込んで行つたのであつた。夢は元來現實その儘の反映ではないから孔子は夢に絕對信賴を置くやうなことはない。然し人情としては聖人も凡人と同じなので、夢の吉凶には如何なる人間でも多少氣に懸からないものはない。若し少しも氣にしないならば周公を夢に見ても、心を痛ましめることがあるまい。常に氣を懸けてゐるから夢に見たので、この點では誰でも同じである。學者は天子に辟雍（天子の學宮）と曰ひ、諸侯に泮宮（諸侯の學校）と云ふ。仁君は老を玆に養つて禮を行ふ。天子であつても祖先の靈前には供物を上げ、醬を執つて奉り、酒で口を洗いで禮するのである。王制には「七十にして學に養し、諸侯に達す。」とあり、學記には「大學の禮は天子の詔と云へども北面するなし。」とある。これは師を尊んだ言葉で、孔子はこの兩者を合して「明王興らず、而して天下孰か斯の禮を擧げて我學ぶところを尊宗せん。是れ此兆に非ず、必ず死して兩楹の間に殯せられん。鳳鳥至らず、河、圖を出さず、吾已みぬるかな」と云つて、その身に盛世を見ないのを悲しんだのであつた。賢明な君主が出ないで、天下中に自分を模範とするものが無くなつたと云ふのは、學ぶところが行はれないのを悲しんだのである。人間には時に遇ふも

の、遇はないもの、才のあるもの、無いものがあつて、時に從ひ義に從ひ、世に進んで自分の技倆を實地に行ふか、世から逃れて才能を示さないかと云ふことは、一律には論じられない。簡單に君に仕へないからと云つてその人を義理知らずだの、人道を亂すものだのと非難するなら、顏回のやうな人間を何と云つたらよいのか。太公望が若し文王に遇はない以前に死んだとしたならば、果して彼に義があつたか無いか不明ではないか。自分が考へるのに孔子は周の道を興す心が深かつたからこそ不幸のあつた家に飼はれてゐる犬のやうに落付なく、諸國を放浪したので、接輿と云つた人々を氣にしないでも、戰國の世に一般道德が行はれてゐないのを悲しまないのではなかつたが、たゞ周の道の復興を主眼點として生命を賭し、斃れて後止む決心があつたのである。嗚呼、孔子は當時に於て志を得なかつたが、それが後世に及ぼした影響は非常に大きいので、その功績は決して孔子があれ程稱讚した周公以下ではない。

贅語卷三

便溺第七

○ 便溺の道

腸は便の室で、脬は尿の室である。脬の型は罈を倒にしたのに似てゐる。胃は上は咽喉を受け下は腸に至る。少し詳しく云へば清腸を經て、闌門、濁腸から肛門に達する。飲食物は咽喉を通り、胃に留まり、胃を下れば食物は便となり、飲料は尿となる。便と尿とが排出されるまでに至る經過は同一ではない。腸は云はば本家で、脬は云はば別家である。便は、質が氣を蒸し騰げて時々腸から排泄され、尿は、氣が質を濾過し一定の時間を置いて脬から排泄される。

腸者便室也、脬者溺室也、脬之狀。如倒瓶子然。胃者上受咽。下至腸。審之。則經清腸。過闌門。度濁腸。達肛門。水穀者入咽而留胃。下胃。則穀爲便、水爲溺、便與溺所下之狀不同焉。腸者通府也。脬者別府也。便者。質蒸騰其氣。卒事而自腸下。溺則氣絪縕其質。結物而自脬下

○ 便溺諸說

尿に關しては諸說が一致してゐない。素問には「飲、胃に入り、精氣を遊溢し、上つて脾に輸す。脾氣は精を散じて、上つて肺に歸り、精道を通調して、下、膀胱

蓋溺。諸說不同。素問云。飲于入胃。遊溢精氣上輸於脾。脾氣散精。上歸於肺。通調精道。下輸膀胱。

靈樞云。水穀者。常并居胃中。成糟粕。而俱下于大腸。而成下焦。滲而俱下。濟泌別汁。循下焦而滲入膀胱焉。王冰云。水液。自回腸泌別汁。滲入膀胱之中。胞氣化之。而爲溺以泄出也。楊介云。水穀。自小腸。盛受於闌門。以分別也。其水則滲灌入於膀胱上口。而爲溲便。王安道。以爲膀胱上有胞。胞則有上口。而無下口。胞下則膀胱。水受于胞。而滲膀胱。膀胱則有下口。而無上口。頃又聞一說曰滴器無上口。則下口不泄水。無下口。則口不受水。故膀胱必有兩口。靈樞。以爲水自下焦。滲膀胱。王冰以爲回腸別汁。滲膀胱。其謂胞者蓋膀胱焉。楊介以爲自闌門。滲膀胱。蓋其說位也曰大腸當臍而回。說經也。曰。臍上一寸便水分穴。西洋。則能解屍驗實。見膀胱粘清腸之下。其上有細系絡。謂水接此授此是非漢人之鑿空。雖然。大意皆以爲。飲水注入膀胱。說以爲如水覓瀉槽之狀。特素問爲飲入于胃。遊溢精氣上輸于脾。脾氣散精上歸於肺。通調水道下輸膀胱。比諸說則爲優。雖然亦五十步與百步

に輸す」とあり、靈樞には「水穀は常に并て胃中に居り、糟粕と成り、俱に大腸を下り、下焦と成り、滲して俱に下る、濟泌、汁を別ち、下焦に循ひ、膀胱に滲入す。」王冰は「水液、回腸より汁を泌別し、膀胱の中に滲入す。胞氣之を化し、而して溺を爲して以て泄出す。」楊介は「水穀は小腸より闌門に盛受し、以て分別す。其の水は卽ち滲灌して、膀胱の上口に入り、溲便を爲す。」と云つた。王安道の說に依れば「膀胱上に胞あり、胞は則ち上口ありて下口なし。胞下は卽ち膀胱なり、水、胞を受けて膀胱に滲す。膀胱は則ち下口ありて上口なし。」となる。自分は近頃又別に一說を聞いた。それに依れば「滴器に若し上口がなかつたならば下口から水を排しやうがない。下口がなかつたならば上口から、水を受けやうがない。膀胱もこれと同理で兩口が必ずあるに相違ない。」と云ふので、王冰の說は「回腸、汁を別し、膀胱に滲す、其の胞と謂ふものは蓋し膀胱ならんか。」楊介の說に依れば、「闌門より膀胱に滲す、」とある。そしてその地位に就ては「大腸、臍に當つて回る、」作用に就ては「臍上一寸、便水分の穴」となる。西洋人は常に屍を解剖して實驗した結果、膀胱が清腸の下に付き、その上に細絲絡があるのを見て、水がこの場所から膀胱に入るのだらうと考へた。これは支那人の空說と異つて確乎たる根據はある。然し漢人の說であつても、大體は飲料が膀胱に入つて

尿となることは寛を水が流れ、水槽に溜るやうな理窟だといふ事に一致してゐる。特に「素問」には「飲、胃に入り、精氣を遊溢し、上つて脾に輸し、脾氣は精を散じて上つて肺に歸す、水道を通調して、下つて膀胱に輸す。」と云ふ意味が書いてある。これを他の諸說と比べれば優つてゐるが、それとても五十步百步の間で大差はない。自分は次にこの理由を、自分の見地から問題にしよう。

○諸說の辨

人間の脾は型が馬の蹄に似てゐる。そしてその地位は胃の左後の下にある、五行から一切を說かうとする五家の說に依れば、萬事が順よく行けば成長し、逆になれば損なはれる。脾は土であり、肺は金であり、膀胱は水であるから、脾に歸し、肺に歸し、膀胱に歸するのは當然である。更にこの說は飲料の精氣だけを問題にして、食物の精氣を問題にしない缺點がある。人間は誰でも男女の交合から生れ、一度母親の胎內を出れば、一日も哺乳、飲食物の榮養が缺ければ生きてはゐられない。この事實から人間の體そのまゝでは生を保つには不足があるから、これを飲食物で補ひ、生を保つのは明かである。何故自身だけで生を保ち得ず、飲食物を攝取するかと云ふのに、天地間の一切のものは成長するのが原理で、成

之差耳矣。請嘗辨之。

夫人之脾者。狀如馬蹄。在胃之左之後之下。五家之說。以順則相生。以逆則相尅。脾爲土肺爲金。膀胱爲水。是以歸于脾。歸于肺。歸于膀胱耳矣。而謂飲之精氣。而不及食之精氣。亦闕。夫人生于男女之交感。而一旦出胎則乳哺水穀之養。不可一日闕。然則一身之天地。有所不足。而待水穀之用也明。一身之天地。何以有所不足。而待用於水穀。則天地之間。麟物弗生化。生化之爲一氣之通。通者彼此相資也。故雨資於雲。火資於薪。人亦資噓噏於天氣、資水穀於地膩、天氣從外來、橐籥于肺、橐籥之運、向內

噙其新、向外噓其故、地質從外來。輻輳于胃、輻輳之物、向下推其査、向上奉其精、氣滲漉而換其故、質噙取以去其窒、故胃化水穀。成一地滋。游溢胃表以能養。營氣資其給。以浡浡于一身。哺實有定體。故順送其質於下道。水質距氣未遠。故水穀之和氣。蒸蒸充身。天地之間。地有燥氣水質。質不能升。氣蒸則爲溼。溼爲雲霧。復雨下土。人亦一天地。造化相應。地之絪縕者、天之摩盪者、觀彼雲雨而知此雲雨。胃者人之地也。水穀此畜。爲雲雨之本。雲雨敷天地。而生生之用成。由是考之。則胃中之水穀。和于氣。而爲氣液。以爲一身之用。滿腔之血液膏膩。激而。爲汗。爲淚。爲涕。爲潼。爲精。皆人之液。而資本於水。非所飲之水。直爲諸液。經絪縕變化之爲也。雖經絪縕變化之爲。而資本於水則明也。故氣血者人之雲雨也。雲雨滋養一身之杳穢。收之於膀胱。此故溺者水也。膀胱者。收流於蒸騰水土之雲霧。結雨而歸地之溝澮也。輸送之路。精能設閘而啓閉以節其行止。而造化運轉。雲行雨施。蓋皮表者。天之分。滋液至此則澄。澄者卒其功。終赴大壑古人之論溺唯觀其質。而不見其化。故有上之諸說。是坐爲水直以其質灌膀胱。故不能不說受灌之地。以生曲說。晉數剝獸腹見之。不見上口與王子所謂胞者。噫若使膀胱有受口。腸中亦當有瀉口。飲若可直至膀胱。則不可無受授之兩口。水者氣類也。故脬腸之偶于下猶咽喉之偶于上知絪縕摩盪之相依。雲結爲雨天間將結雨地水潤。蒸騰融散者。爲雲爲霧。終結其質。以歸地。然則不可謂不資之於地水。雖然天雨非川澤之水。以煩造化之絪縕。以是推之。我天地雖小。奚異於是。請復言以悉其蘊。蓋息食入鼻口。而鼻息徹衞護、則其故氣換新、而去者之化焉、口哺徹營養、則其化滓待新、而辭者去我焉、於是營衞共迎其新、送其故、唯飲食之滋。經絪縕摩盪。分別結溺者。游溢之氣。氣又之質。於是下有溺口。以比上有氣管。故王安道者。不知而言者也。楊介營親觀眞形。奚以致此鹵莽。或有疑取脬吹之氣不泄。溺龜質而卻滲之者。予曉之曰、須

長する爲めには彼我補ひ合なければならないからである。故に雨は雲の爲めに持運ばれ、火は薪の中に生じ、人間も天のお蔭で呼吸が出來、地のお蔭で飲食物が攝られる。空氣は外部から人間の肺中に入り、循環の理に依つて內部に向つて新鮮な空氣を入れ、外部に向つて故いのを出す。地から取れた物質は外部から體內に入り、胃中に集り、それ等が下方に向つて糟を推し、上に向つて精を上す。氣は呼吸に依つて新故を換へ、質は排泄に依つて精粗を分つ。故に胃は咽喉を通つた飲食物を滋養物と化し、胃以外の部分に送られて一身を養ふ。實を哺うには一定の體がある。故にその質を順次下部へ送るのだ。水質は氣と本質に於ては餘り遠くない。故に飲食物の和氣が身體に滿ち渡るのである。天地の間には、地に燥氣、水質がある。質は登ることは出來ない。氣は空に登つて濕となり、雲霧を構成し、雨になつて再び土に降る。人間も亦一小天地であるから、同現象が起る。天地兩氣が擦れ合つて雲雨を起すやうに、こゝでも同現象が見られるのである。人間の地は胃である。飲食物は、此處にまつて雲雨の原因となる。雲雨が天地間の如何なる場所にも降り、その爲めに生物が成長するやうに、胃中にある飲食物は氣と和し、氣液となり、體の成長の要素となるのである。一切の血液、脂肪、汗、涙、涕、漳、精などは皆人間の體中にある液で、水を原因とするが、それは決して飲れたまゝの水ではない。水が體中に入つて種々の變化を經て、かうした諸液となつたのは明かで、種々の變化は經るが、飲れた水が原因となつてゐることも亦明かである。故に氣血は人の雲風である。この雲風は身體に榮養を與へるが、糟の部分を膀胱に收める。故に尿は水である。膀胱は水が蒸發する作用を早めるので、云はば雨を結んで地に歸る溝とも云へる。尿となる道には閘辨があつて開閉し調節する。その後造化の運轉に從つて雲となり雨となる用意を早める。身體全體を回り、養分を吸收されゝば液は澄み、澄めば、その功が率へたから排出されるのだ。古人が尿を論ずるのを見ると、たゞその質を觀るばかりで、轉化する實狀を考へない。故に前述した諸說を生じたので、水がその本質のまゝで膀胱に注ぐとした點に缺點があり、曲說を生じたのである。自分は數度獸類を解剖して觀察するのに、膀胱の上口王冰の主張する胞を見なかつた。若し膀胱に受口があるとすれば、腸中にも瀉口がある筈で、飲料が直に膀胱に達する爲めには授受の兩口がなくてはならない。水は氣の類であるから脬腸が下にあるのは咽喉が上にあるのと同樣である。種々の變化を經て雲が雨となり、天から雨が降らうとして地下水は涸れ、蒸發して雲霧となつて地上に歸る。故に雨、雲、霧も地下水の援助を借りなければ成立しない。然し雨は、地上にある河水などと全然同一ではな

先辨死活之分。馬之勞也。其汗淋漓。而其革不泄水。且水穀之於咽胃。便溺之於腸脬。子之託身於子宮。皆置之於身之外也。故溺之滲入脬中。理一於汗之漉出皮外。醴臬之出。未見其孔。舌頭噏氣。死塞其路。若其以滴器論上下口。可謂不知譬矣。滴器之質。或陶或金。或木或竹。皆堅質也。故剛强不墊陷焉。是以水去則腹空也。空處不得氣則不立。故引氣於一孔。而塡無水處。水入則腹實。腹實則氣不居。故逐氣於一孔。招水於一孔。膀胱者革囊也。水去囊縮。水充囊脹。如弄布袋於水中已。噫令膀胱有上口何以盡綑縮變化之妙。

い。我々人間の小天地の中にも、これと同現象が見られる。自分は更に再説しよう。蓋し鼻、口から入つた息は當然の役割を終へれば、新しいものと入換りになつて體外に去り、口から入つた食物も身體の營養の役を終へれば新來のものと交代して糟は排泄される。呼吸も食物も一定の役目を終へれば、新陳代謝するのである。飲食に依る滋養分は種々の作用を經て尿の要素を形成し、氣及び質に轉化し、上部に鼻口の機關があるやうに、下部にも溺口が存在する。故に王安道の言はかうした點に對する無智を示し、揚介も眞に解剖の結論としてならば、あんな粗末なことは言はなかつた筈である。或者は脬を手にして吹いてみても空氣が漏れないので、粗質の尿が滲み入る理由を疑つた。自分はその人に、先づ死活の分から說いたのであつた。馬が非常に勞役すれば大變に汗をかくが、皮から尿水を泄しはしない。且つ胃中に在る飲食物、腸や脬の中に在る大小便、子宮の中に在る胎兒、これ等は全部謂はば身の外に在ると言へる。故に尿が脬中に滲入する理窟は、汗が外皮上に漉出するのと同一である。美味な泉を見てもその源泉を知らない。呼吸の道が塞がれば人間は死ぬ、滴器に上下の口があるから膀胱にも無くてはならないと說くのは、明かに引用例が正しくないのである。滴器の質は陶器にせよ、金屬、木、竹類にせよ、皆堅質であり强剛であるから水分を滲み通すやうなことはない。水が出れば內部は空虛になる。空虛は空氣を補充しなければならないので、他の一孔から氣を入れ、水の無い場所を塞ぐのである。內部に水が入れば空氣は同居出來ない。この理由から一孔から空氣を出し、一孔から水を入れる。然るに膀胱は革囊である。水が去れば縮り、水が入れば張れる。布袋を水中で弄べばこの理由はよく判明する。膀胱に上口があると言つたのでは、身體內に在る變化奇妙の作用は何の價値もなくなるではないか。

或曰。水穀之出入。同其量乎。曰。造化之道。不可如此算。有者不減。水焉得乾。觀乾而後知有者之可減。溼者水之微。無之漸生也。天之方雨。雖雲霧蒸騰。資始於水溼。其滂湃者化天間者也。故原泉袞袞不能使海盈。蜂蠆螫人。須臾腫起。散則已矣。不散則膿生。是腫。非血非水。毒結而化也。人物死而有間。亦能腫脹。是亦非血非水。病大湯而少溺。謂之爲消湯。如穀亦然。嘗記我鄰鄉。有一少女便閉百日。飲食起居自若。腹亦輭

○散結

或人は「飲食物を攝取した分量と、排泄した量とは相等しいであらうか」と質問する。自分はそれに答へて次のやうに言つた。元來造化の不思議さは數量として正確に算し得るものでない。有るものが減じなければ、水が乾く理由はない。水の乾いたのを觀た後に、始めて減じたことを知るのである。濕は水の特徵である。雲や霧は地上から水蒸氣が發することに依つて雨となるが、勢ひのよい雨に化するのは天空に於てである。故に如何に降つても海が滿ちることはない。蜂や蠍が人を螫せば忽ち腫上り、散れば止み、散らなければ膿が生じる。この腫は血でもなく、水でもなく、毒が化したものである。人が死んで暫くすると身體が腫脹

也。衆技不效。就晉而謀。曰予無技。豈能治之哉。無已。則有所試。是蓋以胃間結氣。既消其穀。又消其藥。此氣解而散則已。因折桂柯。和酒糟作湯。使之浴此。注則出。醒則浴。於是便乃通。五日復常。由是觀之。造化之態、髣髴可獲也。

外臓耳目鼻舌。以交佗之聲色臭味而運。而已收之。而已素有聲色臭味。已之聲臭。用之於發。而不用之於收。

するが、これも血でも水でもない。非常に咽喉が渇いて尿が少しも出ない病を消渇と云ふ。嘗て自分の隣村に一人の少女があつたが、百日間も便通がなく、而も平常の動作及び飲食物は少しも變らず、腹も軟かであつた。大勢の人々が出來る限りの手段を盡して見たが效なく、遂に自分に相談したのであつた。自分はその時「自分には醫術の心得はないから、果してこれを根治させ得るか否かは斷言出來ない。もう他の人々の方法が盡きたと云ふならば一つ試して見よう。多分胃の間に氣を結んで食物を消化させず、藥も利かせないのであらうから、この氣さへ解き放せば恢復するに相違なからう。」かう云つて肉桂類を折つて酒糟に漬け、湯を沸かし、彼女を入浴せしめ、逆せれば出し、醒めれば入れるやうにさせた。すると次第に便が通ずるやうになり、五日の後には全快してしまつた。かうした點から考れば、小宇宙の人體に依つて大宇宙の姿を髣髴とすることが出來る。

○聲色臭味

耳、目、鼻、舌の作用は各聲、色、臭、味に對する。そしてこの聲、色、臭、味は全部自分の機關で感ずることが出來、更に自身の聲、色、臭、味を持つてゐる。自己の聲、臭はこれを發するに用ひて、收むるに用ひない。色、味それ自身

色味最無所用。聲臭則其自發者。可自聞焉。聲者上竅之聲音。下竅之臭風。喉間之噁噁。腹中之漉漉。其可以己之神交佗者。唯在言辭。是以言獨偶行。臭者。人之所內有。以脈外發。臭之發。腋臭口過。噯氣矢氣。便溺。是也。因思生之故。生本畜氣肉與外來之物。以爲摩盪絪縕。常取其新鮮。託舊來之退氣於陳謝之腹實。或鬱釀開出路於口腋。故便溺之氣。非饐非腐。以觀託退氣於陳謝。於味無所用于己。色爲臟赤腑白。唯毛髮。自黝然變黃白者。有同樹葉之感於秋氣歟。

〔註〕
濁腸　大腸。
清腸　小腸。
游溢　一杯になる。
五行　から萬物を說明する人々。
絪縕　萬物生成の元氣、又そのあつまる樣。
摩盪　すれ合ひ動く。

は人間自らの用ふるところでない。聲、臭は自から發し、自分で聞くことが出來る。聲の種類は口から出る音聲、尻から出る臭風、咽喉間のごろ〳〵聲、腹中のぐうぐう聲などの種類があり、臭は人が內に有し、外に出すのを嫌ふ。臭の種類には腋臭、口臭、吹呿（おくび）、瓦斯、大便、小便などがある。これに依つて生身の人間を考へるに、生きて行く爲めには外部から空氣と穀肉とを攝取し、種々の作用を經て常に新鮮を保ち、新陳代謝を爲す必要がある。或場合には唾液などにもなり、多くの糟粕は排泄される。故に便、尿は饐えたのでも、腐敗したのでもなく、新陳代謝の結果、不用になつたものに過ぎない。色は心臟は赤く、臟腑は白い。たゞ毛髮は黑色から黃白に變化してゆくのは、秋になると木の葉が紅葉するのと理は同じであらう。

潼　なみだ。
査穢　沈殿物。
滂湃　水勢の盛んな狀。
啓閉　開閉。
鹵莽　粗漏。
墊陷　水に溺れ苦しむ。
消渴（イ）咽喉が渴いて流動物を欲しがり、小便が通ぜぬ病（ロ）婦人の痲病の二意があるが、玆では前者である。
蜂蠆　蜂と蠍。
桂柯　肉桂類の一種。
上竅　上の穴—口。
噯氣　おくび。
矢氣　がすのこと。
腑　はらはた。

參考第八

○尋眞

自分の若い時はまだ人間の身體の內部がどうなつてゐるか、知る方法がなかつた。その時は、まだ解剖と云ふことが行はれてゐなかつた。西洋の書物も世に傳はつてゐなかつたので、自分はたゞ「素難」以下の書物に就て學ぶだけであつたが、學べば學ぶ程不可解な點が多くなつたのである。遂に鳥獸を解剖して研究し、少しは知識を得たが、實驗說を聞かないのが、たゞ〳〵殘念であつた。その後山脇東洋が始めて京都で人間を解剖してから以來、この擧が度々行はれて各々說明及び圖解が出版されたが、自分の想像するところに一致してゐた。西洋の解剖學に關した書物を翻譯して出版したものがあり、自分は貪つてそれを讀み、西洋人がこの學を始めてから大分長い年月を費し、幾人かの努力を經て、幾人かの老若男女の屍を解剖し、或は新鮮なのを腐敗させ、筋肉を脫し、骨を盡して研究したが尙ほ部分的に專攻するものが出て、十分に調査した結果が始めて圖書となつて表はれた。決して一朝一夕の業でその仕事が終へるものではないと覺つたのである。このやうな注意を重ねても、理論的に解剖したものに對しては少しも滿足せず、常に自分の學力の足りないのを歎いてゐる。故に自分は鳥獸に求めた結果とかうした苦心の下になつた典籍とからの結論を、次に記して後學の人々の參考に備へたい。

予少壯不知身生之所以然。是時世未有驗屍之擧。西洋之圖書。未傳世間獨就素難以下書求之。愈讀愈矇。竟求之鳥獸。若有小得者。惟恨不聞實詣之說。既而山東洋。始剝人於京師。爾來不絕。各有圖說。符予之所思。繼有翻西洋驗屍書上木者。讀之而後正識西人之於人身。嘗積若干星霜重若干人精神智力。驗若干男女老幼之屍。或糜爛其鮮屍。至肉爛筋露。筋盡骨露而已。然猶於部分有專攻之者。有所親試。而後其圖書始成。非一朝一夕。艸艸卒其業者焉。然無由條理剖析之者。則未免於襟懷憒憒。因求諸鳥獸。參諸典籍。以正於反比之間。又擧得於典籍者補不足。以埃佗日之備。

○察形體道

人間の體型を調べるには他のものと比較したり、反應作用を考へるのが必要である。故に天地の大から草木鳥獸の小に至るまで比較すれば、其處に一貫した原理がある。生物には植物と動物との區別がある。植物は體溫なく、意志がない。動物は體溫あり意志もある。動物は型が一定してゐるが植物は千差萬別である。故に植物の枝形は全部異つてゐるが、鳥獸の體型は大體に於て等しいと云へる。然し見方によつて相違も等しくなり、一定の中にも變化がある。故に草木は型が同じでないとは云へ、楊木は常に空に向き、柳は常に地に俯してゐる。人間は各各が同型を備へてゐるとは云ふが、虞舜のやうに瞳の重なつたもの、夏の禹のやうな跛、孔子のやうな扞頭卽ち凹んでひくい頭、晉文の駢脇卽ち一枚肋、その他四つ指、兎唇、中性、無性、双成などがあつて、一々詳細は盡せない程である。外夫察形體之道。剖之於一中、對之於二上。察反於所資、觀應於所給、故自天地至艸木鳥獸之微。相視融之。生類。分動與植。植則冷止無意、動則溫動有意、動則形理一定、植則形理萬變。是以艸木之枝桱、箇箇變理、鳥獸之支絡、類類同理、雖然。同異同室則其體一定者亦變、萬變者亦定、故艸木雖箇箇不同其形。楊則恒仰、柳則恒俯、人雖各各同其形。虞舜重瞳。夏禹跛腳。孔子圩頂。晉文駢脇。有駢拇者。有缺脣者。有不女。有不男。有兩廢者。有兩用者。其狀千萬而不盡也。外形已如是。內形豈特若印圖章相照哉。試照觀近來諸家剝體之書。山東洋之所剝。肺狀。右襞

二。左襞一。明和中。古河侯侍醫。河口子。所剝二屍。一屍同之。一屍左襞三。右襞二。又嘗得長門栗山獻臣者。明和中。與山東洋書讀之。所剝女子。右襞一而左襞二也。謂之男女之異然。同是男子亦不同其狀。又有魚際之脈道。卻出高骨之後者。醫人謂之反觀。我鄰村一男子。腕前腕後。絕無脈動。按喉傍跌上。則不異平人。由是觀之。同類亦有小異、異類亦有大同、若彼此竝觀。臍痕之有無。乳房之多寡。重髮垂尾。變倮被毛。內則獺肝多葉。鹿脾在胃上。鼠膽如豆。兎腸有岐之類。而獺肝逐月益。獼猴猴則無脾等之說。非經親試之言矣。然則艸木之寡文。鳥獸之異形。於知造化。則相得而通。故參考之道。廣矣。廣以歸之於已之所求。

形ですらこれ程の相違があるから、まして體內の諸部に至つては印を押すやうに一致してゐる筈がない。試みに近來諸家の著した解剖書を調べてみよう。山脇東洋の圖には肺が右に二襞左に一襞あり、明和年中に古河侯の侍醫河口氏の著した、二人の解剖圖の中で一人は上述と同じ、他の一人は左襞が三、右襞が二ある。又嘗て長門の栗山獻臣が明和中に山脇東洋から借りた本に依れば、解剖してある女子の右襞は一、左襞は二であつた。男女性が違ふからと云ふ人もあるが、同じ男子であつても一定してゐない。又魚際の脈道が却つて高骨の出た後にあるものがあり、醫者はこれを反觀と云つてゐる。自分の隣村の或ものは、腕には少しも脈搏がなく、咽喉を撫でれば普通人と變らなくなる。この點から見れば同類にも小異があり、異類にも大同のあることがわかる。今彼我を對照すれば臍の無いもの、乳房の多寡、髮の二重に生えてゐるもの、尾のあるもの、全身に毛の生えてゐるものなどがあり、內部には獺の肝臟は多いとか、鹿の脾は胃の上にあるとか、鼠の肝は豆のやうだとか、兎の腸は枝があるとか、獺の肝は每月大きくなつて行くとか、猿には脾がないとかの說は、實地に解剖して得た結果ではないことが明かである。故に草木からも鳥獸からも、造化の本質を知り得るから參考になる點が非常に多く、利益も亦少なくはない。

予所識。有善割鮮者。故嘗聞鮮陳之辨。其說曰。鮮之與陳。其狀弗同。諸生之鮮。血脈盈腸腑。經宿者。脈絡不易導。若重日。若無維脈者然。至鮮之體。膈膜中位太高。如覆盌。於是肝懸膈中。隱於鬲骫。剝腹只見腸胃與脾之一邊。死而少間。肝早已稍露。隨經時。垂稍長矣。經脈兩條。經難導於脈。其鮮。脈系紅紫。經系玲瓏。歷歷可愛。死未輸時者。其白系。就心頭斷之。容管吹之。小極之微動。猶隱然見之。肺隨噓噏膨脹。膨則心藏。脹則心見。心動甚雄壯。屈縮伸脹。似諸脈依此微動。肝能微動。膽則恬靜。白系出心之中心。脈系出心之邊際。其言可據。

○鮮陳

自分の友人によく人間が死んでから直ぐに解剖するものがある。自分は嘗て解剖の場合、屍の新舊に依つて、どんな差異があるかと疑つた。その結果、兩者には大分差異があり、新しい場合は血脈が腸に滿ち、時を經ると崩れ易く、日を重ねるとまるで無いやうになつてしまふ事を聞いた。最も新しい屍は橫膈膜の中程が高く盛上つて、盌を倒しまにしたやうで、肝が膈中に懸かり、骨に隱れ、腹を割つて見ると腸、胃、脾の一部分を見るだけである。死後少し時間を經ると肝が先づ現れ、次第に垂れ下つて稍々長くなる。まだ間のない時分には動脈は紅紫色、靜脈は玲瓏として非常に美しい。餘り時間を經ない時はその白絲を切り、管を入れて吹いてみると小枝が微動してゐるのがわかる。肺は呼吸に從つて膨脹し收縮する。膨脹すれば心臟が隱れ、收縮すれば心臟が現れる。鼓動は甚だ勇壯で、伸びたり縮んだりする。一切の血液が此處に集るからである。肝臟も微動する。膽は靜かで白絲を心臟の中心に出し、動脈を心臟から通じる。

○鼻竅

鼻竅之狀。行餘醫言曰。鼻之聞知香臭者。以有共竅也。是竅上通于腦。中通于心。故薰蕕觸鼻竅。靡不別審俗人謂入咽喉者。不知之誤也。若然。則假令以物塡塞鼻中。不通氣息。則口息雖始無所妨。而不聞香臭。此其竅之所以在鼻梁兩旁。而香臭非入咽喉也。

咽喉之狀。解屍編曰。胃管。上口較廣。其兩傍出於肺管之外。半抱肺管。故雖喉居前。喉居後。刺吭者。或有泄水飲。而不泄氣者。或有泄氣息。而不泄飲者。

懸壅之狀。行餘醫言。說結毒鼻音。曰。結毒鼻音者。毒瘡爛蝕懸壅之故也。蓋懸壅者。口鼻音聲之所分。故閉口則懸壅前移、喉息皆出于鼻、開口則懸壅後遮喉息悉出于口、此皆賴懸壅之爲屏障。而隔分口鼻兩路之限也。今也伏毒結于懸壅。懸壅糜爛。漸漸刓缺。短盡而止。故無口鼻兩路之隔。而喉息自溢出于鼻。所以成鼻音也。凡平人鼻聲者。多是天性懸壅短小故耳。乃知喉息分出于鼻也。是又因說病。而說懸壅之用自洞朗。

心之狀。解屍編曰。心懸肺間。斜倚膈膜上而左欹。白脂包之。兩耳如舌。挺出包外。鮮紫赤色。蹶蹶悸動。又聞之麻剛立。剛立聞之親剝屍者。此蹶蹶之動。雖死且經時猶且弗已云。

肋骨之狀。物理小識曰、肋骨二

○ 咽喉

咽喉の狀態に就ては「解屍編」に「胃管の上口は較廣し、其の兩傍は肺管の外に出で、半ば肺管を抱く。故に喉、前に居り、喉、後に居ると雖も、吭を刺すもの、或は水飲を泄して氣を排さゞるあり、或は氣息を泄して飲を泄せざるものあり」と書いてある。

○ 懸壅

懸壅の狀態に就て「行餘醫言」は結毒、鼻音を說いたと同じ場所で、次のやうに言つてゐる。「結毒鼻音は、毒瘡が懸壅を爛蝕する故也。蓋し懸壅とは、口鼻音聲の分るゝところ、故に口を閉ぢれば則ち懸壅前に移つて、喉息皆鼻より出づ。口を開けば則ち懸壅後を遮つて、喉息悉く口より出づ。これ皆懸壅の屏障を爲すに賴て、口鼻兩路の限りを隔分する也。今や伏毒、懸壅に結ぶ。懸壅糜爛して、漸漸刓缺し、短を盡して止む。故に口鼻兩路の隔りなくして、喉息自から鼻に溢出す。鼻音を成す所以也。凡そ平人鼻聲の者、多くはこれ天性に懸雍短小の故のみ。乃ち喉息の鼻に分出するを知る。」と。これは病氣を說きながら、懸雍の用を十分に說明してあるから、一讀すれば判然とするであらう。

○ 心

心臟の樣子に就ては、「解屍編」に次のやうに說明してある。「心は肺間に懸く。斜めに膈膜の上に倚つて白脂之を包む。兩耳舌の如く包外に挺出す。鮮紫赤色、蹶蹶として悸動す。又之を麻田剛立に聞くに、剛立之を親しく屍を剝する者に聞き、此の蹶蹶の動きは死して且つ時を經ると雖も、猶且已まず。」云々とある。

○ 肋

肋骨の狀懸に就て、「物理小識」に「肋骨は二十有四、脊上に起り十四環つ

十有四。肋骨二十有四。起于脊上。十四環至胸前。直接刀骨。以護心肺。下十較短。不合其前。寛脾胃之居。解屍編曰。左右各十二。上六肋。左右齊湊蔽骨。自第七肋以下。漸退肋著肋。如雁陳。鉤出於背面。十二肋。復湊著脊骨。其形如曲鉤。第一肋上。有威骨。即缺盆骨也。其端抵臑骨上。如乙字樣。蔽骨盡處。爲鳩尾其奚如會脈。藏志則曰九肋。以圖按之。蓋不數季之三肋。不至胸者已。

脊骨之狀云。骨節歴歴可數者一十九。其下一片版骨。即臚骨。而藏志則爲十七節。栗山子書則曰。女子脊骨。狀如尺八。上直下曲。所謂上次中下髎。各有節。合二十有一節也。男子則上髎以下至尾骨一枚板骨無節。是爲異耳矣。脊骨面有鰭如魚者。細視之。鰭之下面有三稜。口含肉。脊骨與鰭之間。有一條小骨。長與脊骨始終。其内竅空。脊骨如尺八者想以當姙娠保胎

て胸前に至り、直ちに刀骨に接し、以て心肺を護る。下の十は較短くしてその前を合せず、脾胃の居を寛かにす。」とあり。「解屍編」には「左右各々十二、上六肋、左右齊しく蔽骨に湊る。第七骨より以下、漸く退いて肋は肋に著く、雁陳の如く背面に鉤出す。十二肋、復た湊つて脊骨に著き、其の形曲鉤の如し。第一肋上に威骨有り、即ち缺盆骨なり。その端臑骨の上に抵り、乙字樣の如し。蔽骨盡くる處、鳩尾を爲す。其の奚、會脈の如し」とあり、「藏志」に九肋と記してあるが、結局三肋を數へなかつたことになる。

○脊骨

脊骨の狀態に就て、或書籍には「骨節歴歴として數ふべきは一十九にして、その下一片の版骨は即ち臚骨なり」とある。「藏志」には「十七節」とあり、栗山子の書には「女子の脊骨は、狀尺八の如し。上直にして下曲る。所謂上次中下曲、各々節有り、合して二十有一なり。男子は則ち上髎以下尾骨に至つて一枚の板骨節なし、これを異と爲すのみ。脊骨の面、鰭有つて魚の如きもの、細にしてこれを視れば、鰭の下面三稜を有す。口、肉を含む。脊骨と鰭との間に一條の小骨有り、長さ脊骨と始終す。その内竅空、脊骨尺八の如きものは、想うに姙娠保胎の時に當

之時。小腹不寛濶。則不能容也産論亦曰。婦人之腰形必拗曲。而其内宏。蓋是天設受胎之地。故與男子之腰形殆直。内無容受者不同。其鰭下三稜。口含肉者。今試諸獸。試諸鱗類。是一條之髓系。有畜以維養骨也。京師嘗有根來東叔者。享保壬子之歳。見烙刑之屍。筋肉既盡者。作連骨眞形圖。意是此間。眞驗之權與歟。說露背骨曰。古來無背骨之名。即背上督脈之露骨也。余名之曰露背骨。凡二十三。似魚背骨。隱蔽脊骨。根岐如琴雁。接脊骨及左右肋骨。其尖向後斜低。一掩二。二掩三。以次相重。自初椎。至二十三椎。積續於腰監骨。其岐間則如穴。上下相貫又通裏面節骨之節側。内含脂膏。是說其狀最明。其露背骨。我所謂跨脊骨也。脊骨自項骨。及腰骨。節節生枝。肋爲長條。他自矮短。又曰。肋骨二十三。左右共四十六。自脊骨之初椎。至二十三椎。附著於節間之兩側。而不接下椎。當節及下椎。有缺穴。腹背相貫。亦出脂膏。其脇肋十二稍長。曲後向前。至脇斜低。但項間五骨。短而微

り、小腹寛濶ならざれば則ち容るゝ能はざるを以てなり」とあり、「産論」にも「婦人の腰形は必ず拗曲にして其の内宏し」とある。自分が考へるのに、これは受胎の時の用意とも云へる。故に男子の腰骨が細長く小さいことに比すれば大分樣子が變つてゐる。鰭の下の三角形、口に肉を含んでゐると云ふものは諸獸、諸魚からある一條の髓系であり、骨を維持、養成するものである。京都には嘗て根來東叔と云ふ人があつて、享保十七年に火烙の刑に處せられた屍で、もう筋肉がすつかり落ちてしまつたものを見て、連骨眞形圖を作つて實驗の結果、正しい意見を發表した。その中で露脊骨に就てかう云つてゐる。古來脊骨の名無し、則ち背上督脈の露骨なり。余これを名付て露背骨と曰ふ。凡そ二十三、魚の背骨に似て、脊骨を隱蔽す。根岐琴雁の如し、脊骨及び左右の肋骨に接し、その尖後に向いて斜めに低る。一は二を掩ひ、二は三を掩ひ、次を以て相重なり、初椎より二十三椎に至つて腰監骨に於て積續す。その岐間は則ち穴の如し。上下相貫き、又裏面節骨の節側に通ず。内に脂膏を含む。」とあるが、この說は最も明瞭にその樣子を說いてゐる。露背骨は自分に云はせれば、跨脊骨である。脊骨は頂骨より腰骨に及ぶ。關節毎に枝を生じ、其處から肋骨が長く出てゐる。前者に於ては更に續けて「肋骨は二十三、左右共に四十六なり、脊骨の初椎より二十三椎に至り、節間の兩側

低。長肋下五骨。短而不曲。是亦稱肋骨者。宜謂脊枝骨。而肋骨專屬長枝骨。又考西洋圖。數節骨。不同其法。若杉田氏所譯解體約圖。以爲二十九節。曰項骨七。脊骨十二。腰骨五。髎骨一。骶骨四。蓋其分之者。脊骨十二。其含肋者也。以上七節。幹于頸而持顱者。以下五節。出板骨。而幹于腹者。板骨不可分。之爲一骨。將終板骨。爲小四節。於是大段上頭持顱。其次持脇。其次持腹其次持腰而終矣。然而肥木下氏。分合圖。多髎骨以下之一節。物理小識。以爲三十四。恐非矣。

に附著して而も下椎に接せず。當節及び下椎に缺穴有り。腹背相貫く。亦脂膏を出す。その脇肋十二にして稍々長し、後を曲つて前に向ひ、脇に至つて斜めに低し。但し頂間の五骨は短く而して微かに低し。長肋下の五骨は短にして曲らず、これ亦肋骨と稱す。宜しく脊枝骨と謂ふべし。而して肋骨は長枝骨に屬す。」次に西洋の書物から考へるのに節骨を數へる方法が一定してゐない。杉田氏の譯した「解體約圖」には二十九説として頂骨が七、脊骨が十二、腰骨が五、髎骨が一、骶骨が四、と數へてある。然しこの標準は脊骨が十二とあるのは、肋骨を含んでゐるので、その上の七節は頸の部分から頭部を支へ、その下の五節は板骨から出て腹部の中心と爲すもので、板骨は分つことが出來ないから一骨とみ、板骨を終へようとした部分に小さい四節がある。かうして上部は頭を保ち、次は脇を持し、次は腹を持し、次は腰を保つて終るのである。九州の木下氏の分合圖には髎骨以下に一節が多くなつてゐるし、「物理小識」には三十四とあるが、これは多分誤解であらう。

○ 膀胱

膀胱之狀。解屍編曰。有脂膜。附著大小腸分界之處。至外腎下廉。隱于横骨裏而不見。折骨始見。

膀胱の狀態に就て「解屍編」にかう書いてある。「脂膜有りて、大小腸分界の所に附著す。外腎の下廉に至り横骨裏に隱れて見えず、骨を折つて始めて見る。」

○ 臍

臍之狀曰。剜臍見之。底止脂膜間。而不達于內。容管吹之。肝臟起脹。探之有白膜。自肉中。聯於肝臟。又有通膜一條。兩岐下。通於兩髀。

臍の狀態に就ては「臍を剜りて之を見るに、脂膜間に底止して內に達せず、管を容れて之を吹くに、肝臟起脹す。之を探るに白膜あり、肉中より肝臟に聯す。又膜一條あり。兩岐して兩髀に通ず」とある。

○ 臍帶

同書荻子曰。曾見紅夷書。臍帶內聯圖。其所通之膜。與今所睹合。而別有通髀胃位膜。蓋應有此。今難窮也。

更に同書には「嘗て紅夷の書、臍帶內聯の圖を見るに、其の通ずるところの膜、今睹すところと合す。而して別に髀胃の位に通ずる膜あり、蓋し此處にあるならん、今窮め難し」とある。

○ 腹

又閱西圖。腹皮層層。其理横斜如織。而當中一路。直理自上徹下。古人所謂任脈者。世人以臍爲長物。雖然。絶後有生意者。灸此有回生

又西洋人の描いた圖に注意すると、腹皮は幾層もあつて、横斜に織つてあるやうで、上から下まで續いた古人の所謂任脈と云ふものがある。世間の人々は臍を無用の長物と見たがるが、息が絶えて間もない時に、此處に灸を据ゑれば再び生

者。是資于母。而保于我者。神闕之名。古人蓋有深意。

肝脾之狀。麻剛立曰。肝者、外面密而麁肉也、髀者、外面麁而密肉也、肝屬于本系、髀維于散絡、死而久者。散絡難見。若衄不維然。而腸胃間。所相連之膏膩。皆著脾。最爲雖離。如脾爲其本。可謂細心觀臟腑者也。由是觀之。肝脾之爲偶。可徵矣。夫膏膩者陽水、液于表、而津血者陰水、液于裏矣、背則骨之位、前則氣之位、骨親膏、氣親液、造化之用、於是成哉。

子宮之狀。栗山子曰。膀胱之後。有如蟆蝦伏者。長四寸餘。廣三寸許。黃赤花。有兩朶。左朶有三小亞右朶有二小椏。有二絡通兩腎。下口出陰戶。剖之裏面有火灼瘢痕者。有白膩出。

胎孕之狀。俗有左胎屬男。右胎屬女之說。按僧泊如谷響集曰、修道行地經。爲男在左脇。背外而面在內。女在右脇。背母而面向外。瑜伽論以爲女在左脇倚背向腹。男在右脇。倚腹向背兩說雖參差。俗說之所本歟。而胎正在臍下正中。任之爲姙不誣。張介賓類經不言左右。曰。女胎背母而懷。故母腹輭。男胎面母而懷。故母腹鞭。王宇泰準繩云。佛說胎相。見大集經。此雖似不預吾醫。而又不可不知。按大集經第二十五卷。虛空自分中聖目品曰。父母和合初。受意誠。歌羅羅時。其身猶如葶藶子許。是時未有出入氣息。亦不覺知苦之與樂。歌羅羅時。住六七日。轉名頞浮陀。是時形色猶如小棗。住七七日。轉名伽那。是時形色如胡桃鼎住八七日。轉名閉尸。形色猶如頓

○ 肝脾

この兩者に就て麻田剛立は、次のやうに云つてゐる。「肝は外面密にして麁肉なり。脾は外面麁にして密肉なり。肝は本系に屬し、脾は散絡に維す。死して久しきものは散絡見難し、衄維せざるが如し。而して腸胃間、相連なる所の膏膩、皆脾に著き、最も離し難しと爲す。脾、其の本たるが如し。」これは大分丁寧に臟腑を觀察したものと云へる。この點から見れば肝と脾が偶立してゐるも理由のないことではない。大體脂肪は陽水で、身體の表面に流れ、唾液その他は陰水で內面を潤ほす。背には骨があり、前には氣があり、骨は膏と親しみ、氣は液と親しむ。かうして造化の種々の作用が行はれる。

○ 子宮

子宮の特態に就て栗山子は「膀胱の後、蟆蝦伏するが如きもの有り、長さ四寸餘、廣さ三寸許、黃赤花、兩朶を有す。左朶には三小亞有り、右朶には二小椏を有す。二絡有りて兩腎に通じ、下口陰戶に出づ。之を剖けば裏面に火灼瘢痕なるもの有り、白膩あつて出づ。」と說明してゐる。

○ 胎孕

姙娠の狀態に就ては俗に左腹は男性、右腹は女性だと云ふ說がある。僧の泊如の「谷響集」には「修道行地經には男は左脇に在り、外を背にし、面は內に在り。女は右脇に在り、母を背にし面外に向うと爲す。瑜伽論は女は左脇に在り、背に倚つて腹に向ふ。男は右脇に在り、腹に倚つて背に向ふと爲す。兩說參差たりと雖ども、俗說の本づくところか、而して胎は正に臍下正中に在り。任の姙たるを誣ゐず」とあり、張介賓の「類經」には左右を云はないで「女胎は母を背にして懷く故に、母の腹輭、男胎は母に面して懷く故に母の腹鞭なり」と說明してある。又王宇泰の「準繩」には次のやうに、佛敎からの說明を根本として書いてある。

「佛說の胎相は大集經に見ゆ。これ吾が醫に預らざるに似たりと雖も而も亦知らざるべからず。按ずるに大集經第二十五卷、虛空自分中聖目品に曰く、父母和合の初め、意識を受け歌羅羅の時、其の身猶葶藶子ばかりの如し。この時未だ出入の氣息あらず、又苦と樂とを覺知せず。歌羅羅の時、住すること六七日にして轉じて

婆羅果。是時身邊。有五疱出。謂頭手脚。十三七日。始有腸相。二十七日。男女根別。二十一七日。始生骨節。乃至三十六七日中。其身具足內血毛根。三十八七日。具足身枝。四日四夜。住在腹中臭穢之處。此言初七至三十八七日之略也。未知五王經所說細密詳悉矣。此不復贅。當於梵藏中查之子玄子產論曰。古來論胎孕。皆以爲子頭向上。及將生。則轉身而下。又閱紅夷圖。一同其說。彌月之胎。其大幾何。子宮之中。其廣幾何。信使回轉理當破裂。今唯據實。如法按之。當自知彼非是。大抵五月之後。腹中胎大如瓜。必背面而倒首。其頂當橫骨上際。胞衣蓋胎之尻上。而當母鳩尾之下。解體新書曰。和蘭之書。所圖未分明。諸厄利亞國。產科書。其圖。從受胎至臨產。無不倒居者。其否者。則皆難產之狀也。晉無實見。剖鼠腹觀之。彼雖累累。如所云爾者。書以埃他日徵熟焉。

頰浮陀と名付く、この時形色猶小棗の如し。住すること七七日にして轉じて伽那と名付く、この時形色胡桃鬱の如し、住すること八七日にして閉戸と名付く。形色猶頗婆羅果の如し。この時身邊に五疱有つて出づ。頭、手、脚を謂ふ。十三七日、始めて腸の相有り、二十七日、男女の根別る、二十一七日、始めて骨を生じ、乃至三十六七日の內、其の身、內血、毛根を具足す、三十八七日、身枝を具足す、四日四夜、腹中臭穢の處に在り。これ初七より三十八七日に至るの略なり。」自分はまだ「五王經」に說いてあると云ふ、非常に詳しい說明を知らない。であるから茲に載せることは出來ない。「梵藏」を參考にして他日調査しようと思つてゐる。子玄子の「產論」には「古來胎衆を論ずる者以爲らく、子頭上に向ひ、生れんとするに及び則ち身を轉じて下る。」とあり。自分の知り得る限りでは西洋人の醫書にも同一のことが論じてある。「彌月の胎、其の大きさ幾何ぞ、子宮の中、其の廣さ幾何ぞ。信に回轉せしめば、理當に破裂すべし。今唯實に據つて法の如く之に接せば、當に自から彼、是に非ざるを得るべし。大抵五月の後、腹中胎の大きさ瓜の如し。必ず背面にして倒首す。其の頂は橫骨の上際に當る。胞衣は胎の尻上を蓋し、母の鳩首の下に當る。」と說明してあり、「解體新書」には「和蘭の書、圖する所未だ分明ならず。諸厄利亞(アラビヤ)國の產科書、其の圖は受胎より臨產に至つて倒居せざるもの無し。其の否らざる者は、則ち皆難產の狀なり」と古來からの說の不備を指摘してゐる。自分は別に人間の胎兒の樣子を實驗した經驗がないから確かなことは言へないが、鼠を解剖した結果、勿論數は多いが、倒居してゐるやうに思はれる。この點は更に他日研究する餘地が殘つてゐる。

經候。諸獸無之。或云。狙有月事。天仙子北山醫話云。諸獸之類。猿鹿之外。未聞有經行也。如鹿。未驗其有經水。但猿。余親就畜猿者問之。曰。牝猿數歲而方經來矣。猿鹿經行。見月令廣義。按本邦產狙不產猿。天仙子所說。以其同類經候亦同有之。混言之乎。抑參考有所不至邪。漫意婦人運營血於生生。逐月充胞中。充則一掃。理與溺同。子玄子曰。婦人受孕。輕畢後。十日之間。爲其候矣。由是思之。受孕非婦胎蓄血。包精於其中。唯其營氣爲血則經也。不爲血則爲胎。而後贏餘月積者。能養胎。若瘀而蓄。則妨礙胎。

○ 經候

月經は諸獸にはないといふのが定說であつたが、狙といはれる手長猿の一種には發見出來ると言ふ者も居る。これに關して天仙子の「北山醫話」には「諸獸の類、猿鹿の外は未だ經行有るを知らざるなり。未だ其の經水有るを驗せず。但し猿は、余、親しく猿を蓄へる者に之を問ふ。曰く。猿數歲にして方に經來る。猿鹿の經行は月令廣義に見ゆ」と說明してあるのだが、自分の考へに依れば我が國には狙は產するが猿は產しない。天仙子の說くところは、これ等を混合してゐるのではなからうか。これ等は未だ考慮の餘地を殘してゐる。別段根據はないが、自分が漫然と思ふのには、婦人が身體を養ふに必要な血液が一ケ月每に胞中に滿ち、十分となれば一掃する作用を月經と稱するのではなからうか。自分に依れば、その理窟は尿と同一なのである。子玄子は「婦人受孕して、輕畢つて後十日の間、

其の候を爲す」と言つてゐるが、自分の考へでは、婦人が受胎するのは、血が十分に在つてその中に男子から精を包むのではなく、身體を養ふ氣が血となつたのが月經で、血に化せないのは胎を持つた證據になる。而もそれが幾月も積ると、胎兒を養ふ材料になるのであらう。但し循環が不足で積血したのはこの限りではなく却つて身體に害を及ぼすのである。」

○ 攣生

複數の胎兒を娠んだ例は、周の時代に一人の母が四つ子を產んで、全部男子であつた記錄が古い。然しその他にも無いことはないので、「產論」中には「余、識る所の家、每歲朶んで而も攣生す。又必ず一男一女にして凡そ五產皆然り」といふ一節を見出し得るし、「明の天順の時、一產五男皆生育す」と「本綱」にあり、「魏書」には、「延興三年秋、秀容郡の婦人、一產四男、四產十六男」と不思議な記事もある。且つ懷姙の際に男女を決定するのは神力であつて、人間が議論すべき題目でないにも關はらず、勝手に曲說を立てて胎中の男女を云々するのを自分は採らない。

攣生。以周一母四乳。皆男子爲奇。然產論中有言。曰。余所識家。每歲孕而攣生。又必一男一女凡五產皆然。本綱擧。明天順時。一產五男。皆生育。魏書則曰。延興三年秋。秀容郡婦人。一產四男。四產十六男。復益怪矣。且人之託胎。爲男女。爲正皆天工神機。非人之所得而窺。而各自作曲說。以爭是非不足論矣。

○ 男女正傀

本草綱目にはこれに就て次のやうな記載がある。「齊の司徒、褚澄言ふ。血先づ至つて精を裹めば、則ち男を生じ、精先づ至つて血を裹めば則ち女を生ず。陰陽均しく至れば、非男非女の身、精血散分すれば、駢胎、品胎の兆なり。」「道藏經」には「月水止つて後、一三五日、男を成し、二四六日、女を成す。」東垣の李果は「血海始めて淨、一二日、男を成し、三四五日、女を成す。」聖濟經には「氣に因つて左動し、陽之を資くれば則ち男を成し、氣に因つて右動し、陰之を資くれば則ち女を成す。」かうした諸說があるが、丹溪の朱震亨は褚澄の說を採らず、東垣說に贊成して、子宮の左右の狀態から胎兒の性を決定しようとしてゐる。又、男性でありながら生殖器を缺いてゐる者、女性でありながら生殖器のないものの一對があるが、普通これ等を一括して人傀と呼んでゐる。種々の史書には頭部が一つで身體が二つに分れてゐるもの、或はその反對の畸形兒の出現を報じてゐるが、亂氣、駭氣などと書いてあるのは純正でないといふ程の意味であらう。然しかうした現象は單に人間だけに限られるのではない。鷄、鴨、豬、羊を始めとして、馬、牛、鳥、龜の類の一切の動植物にも所謂傀

本草綱目曰。齊司徒褚澄言。血先至裹精。則生男。精先至裹血。則生女。陰陽均至。非男非女之身。精血散分駢胎品胎之兆。道藏經言。月水止後。一三五日成男。二四六日成女。東垣李果言。血海始淨。一二日成男。三四五日成女。聖濟經言。因氣而左動。陽資之則成男。因氣而右動。陰資之則成女。丹溪朱震亨。乃非褚氏而是東垣。主聖濟左右之系。又有不男不女二形。總謂之人傀。史載。一頭二身。二首一身。種種變態。往往而有。或曰亂氣。或曰駭氣。亂駭以不純正而言也。然是非人獨然。雞鴨豬羊。馬牛鳥龜。萬之動植。皆見其傀。人之營作。有誤失。不類其物有矣。類佗物有矣。雖天造亦然。如二身一頭。二頭一身。雙生欲成。未全雙焉。單生欲成。有餘于單。如二形亦然。觀之柿茄。

花並蔕而逼發。其子或兩頭一蔕。或合頭分蔕。畢竟造物之差誤。老夫亦刻鵠類鶩。畫虎類狗。不以此供胡盧。說妖祥。說報應。皆以有意望天之失也。」

に相當する不思議な存在も在り得るのである。人間が何を造るのにも、一寸の手違ひから全然別な形が出來上るやうに、天造にもかうした場合が無いと誰が斷言出來よう。二身一頭、一身二頭などは雙生兒とならうとしてそれも不完全に終り、普通の一人だけを生まうとして餘りがあつた結果だと解せられ、その他の畸形者も同樣に考へられる。普通の柿茄は花と帶とが竝んで間なく出來てゐる。然しその種から生成したのに、或は帶の一個中に二花があるもの、一花に二蔕の附いてゐるものなどを發見されるのは、造化神の手違ひなので、如何に巧妙な彫刻師でも鵠を刻らうとして鶩のやうになり、狼を畫く意があつても結局犬としか見えない畫家があるのと同樣である。故に徒らに獨斷から種々の說を云々するのは、人間が宇宙間の一切に關して全部を知らうとするやうなもので、甚だしい輕率と言はなければならない。

世又有產異物之說。多是鑿井獲人之言。幻惑衆耳。終上詞人之筆。

○異產

世の中には、以上の他に、人間が人間以外の他物を產むといふ說を、主張する人々がある。然しこれは井戸を掘つてゐたら中から人が飛び出したといつた、根據のない空想に過ぎない。詩人ばかりに許される空想であらう。

又有男子產子之說。不知造物作後門歧胞之傀乎。造物雖巧。不能生無宮之子矣。

○男產

更に突飛になると、男子が子を產む說を主張する人々が居る。若しこの說が眞としても、男子は何處から子を產むのであらうか。子宮が無くて子が育つとでも思つてゐるのか。この人々は。

○初生

生れた瞬間及びその直後はどんな狀態であらうか。これに對して「產論」は次のやうに說いてゐる。「初生地に落つるや、其の肌極めて冷、其の色甚だ白し。之を撫するに水の如し。纔かに擧ぐれば一聲、則ち四體卽ち溫かにして肌色赤を成す。愈々冷るは愈々健るなり。若し未だ啼かざる時、其の肌旣に溫かなる者は、率ね三日を踰えずして死す。」一體、この說に從ふと兒の溫冷の標準が何處に在るか不明だし、第一、冷たい子があり得る筈はないではないか。「椿庵遺稿」には「命帶淸白なる者、其の兒强し。命帶灰白なる者、其の兒弱し。屢試みるに屢然り。」とある。

孫民の「痘疹心印」の中には、兒が生れると直ぐに口から穢血を出し、尻から

產論說初生之狀。曰。初生落地。其肌極冷。其色甚白。撫之如水。纔擧一聲。則四體卽溫。肌色成赤。愈冷愈健。若未啼時。其肌已溫者。率不踰三日而死。噫吾人好空推。百般思之空推豈知生子之冷哉。椿庵遺稿則曰。命帶淸白者。其兒强。命帶灰白者。其兒弱。屢試屢然孫民痘疹心印。論兒生口含穢血。後下黑糞。曰。兒之胞胎在腹。猶瓜菓。然瓜菓賴藤樹滋灌。汁從蔕入。日能肥大成熟。兒在胞胎。藉母之湮。從胞蔕而灌入臍中。十月充塞。胞分而出。口中之穢。間或有之。實分娩之時。胞中之餘穢惡露也。大

便黑糞。如瓜菓之汁水耳。出胎之後。陽昇者、啼聲上出也、陰降者、大便下行也、意心者供於有己、胃者供於假物、安矣其瀦自然之穢也。

赤水玄珠緒餘曰。胎在母腹中。被驚而死。其胎下繫紫黑色。血蔭軟弱。若生下腹外死者。其屍繫淡紅赤色。極易驗也。記其所出。曰洗寃錄。是亦折獄者時有照奸之用也。

癥之狀。栗山子曰。胃下腸外。有積塊。色黃赤。大如拳。粘著腸外。或曰。癥之頑凝。當荼毘。火不能融之者。折接骨木挿之化爲灰矣。

黑糞を下すものを論じて次のやうに言つてゐる。「兒の胞胎、腹に在るや猶瓜菓のごとし、然して瓜菓は藤樹の滋灌に賴る。汁は蔕より入り、日に能く肥大成熟す。兒、胞胎に在るや母の湮を藉り、胞蔕に從つて灌いで臍中に入る。十月にして充塞し、胞分して出づ。口中の穢、間々或は之有り。實に分娩の時、胞中の餘穢、惡露する也。大便黑糞は瓜菓の汁水の如きのみ。出胎の後、陽にして昇る者は啼聲上出する也。陰にして降る者は大便下行する也。意ふに心は己を有するに供し、胃は物を假りるに供す。宜べなるかな其の自然の穢を瀦するや。」と。

○ 驗胎

去水玄の「珠緒餘白」には「胎、母腹中に在りて驚きを被りて死すれば、其の胎下つて紫黑色に繫る。血蔭軟弱にして、若し生下して腹外に死する者は、其の屍、淡紅赤色に繫る。極めて驗し易し」とあるが、著書も斷つてゐるやうに、これは「洗寃錄」から出たので、裁判官は時にこの理から非常な參考を得る場合もある。

○ 癥

復血病に關して、栗山子は「胃下腸外、積塊有り。色は黃赤、大きさ拳の如し。腸外に粘著す」と言ひ、或人はこの頑凝したものは荼毘に際しても、その型を守つてゐるが、接骨木を折つて插せば直ぐに灰になると言つてゐる。

本綱云。男生而覆、女生而仰、弱水亦然。聞之於人。必然云焉。不識奚以男子其重在前。女子其重在後焉。褚氏遺書。分其重處曰。陽氣聚面。故男子面重。溺死者必伏。陰氣聚背。故女子背重。溺死者必仰。走獸溺死者俯仰皆然。以俯仰歸輕重。則其言可聞也。而男何以陽之所聚重。女何以陰之所聚重。我未解其謂也。以予之所意。異於是也。蓋動植雖本末異上下。各以其本爲重。而動本親天、植本親地、植者孤生、以花實自偶、動者偶生、以牝牡相偶、男者受天化、女者受地化、是以男自然有覆、女自然有仰、似天覆地載之道。不能不然焉。由是察男女之天稟。男剛、女順、男則鬚髮早殞、而髭鬚長矣、女則髭髯不長、而髮髮不脫、其形則可見。其故則不可

○ 男俯女仰

この點に關して「本綱」には「男、生れて覆り、女、生れて仰ぐ。水に溺るゝも亦然り」と記してあり、他の人々に聞いても多くそのやうに言ふが、何故に男子の重點が前に在り、女子が後にあるかを知らないのである。褚氏の遺書にはこの點に觸れて「男子は陽氣が前面に宿るから、一般に前面が重く、溺死する場合には伏すのであり、女子は陰氣が背面に宿るから、一般に背面が重く、溺死の時は仰ぐのである。獸類もこの理に變化はない」といふ意味を述べてゐる。これは陰陽の理から說明したので、一應は首肯かれるが、男では何故に陽氣の聚り宿るところが重くなるのか、女では何故に陰氣の聚り宿る點が重くなるのか、自分にはどうも不可解である。これに關する自分の意見は大分異るから次に記してみよう。

蓋し動植物は種々の點で大いに相違點があるが、その本氣の宿る場所が重いといふ一點は全然等しい。そして動物の本氣は天に親しみ、植物の本氣は地に親しむのが原則である。植物は動物のやうに雌雄の交感に依つて子孫を殘すのではなく

知也。男則有餘于陰形、女則有餘于乳形、男之授也、目開手足指伸、女之受也、目閉手足指縮、鳥之羽毛、則多美于雄、人之容華、則勝于嶋、以上聞之於人者。參以管見。若謂之道聽塗說。亦聽於其人之所想。

自己だけで花粉や實を通じて繁殖するものである。男は天の感化から成り、女は地の感化を重にする。故に男は自然と覆り、女は仰ぐのである。天は物を覆ひ地は物を戴く根本原理に、この場合でも例外ではないのだ。以上から男女の特徴を考へるのに、男は剛、女は順、男は頭部の毛髪が早くから落ちて口及び顎の部分に長く殘るし、女はさうしたものは殘らないが、頭部は常に美しい長髪を有してゐる。何故かうなるのかは誰にもわからない。男の陰物は言はば餘つた場所であり女の乳房も同様である。男は精を授ける場合には目を大きく開いて手足を指まで伸ばすが、女は精を受ける時に、目を閉ぢ、手足の指は縮むのである。鳥の羽毛の美しいのは雄であり、人間の容姿の奇麗なのは女である。かうした說は自分の創見ではなく、他の人々から聞いたものに自己の意見を少し加へたに過ぎない。故に若し他人の說を盜んだ淺薄な言だと評したければ左様評せられても宜しい。

〔註〕

襟懷　胸の中。心の中。憒々　心の亂れる狀。

重瞳　瞳の重つてゐることで、聖人の相とされてゐる。

圩頭　凹頭の意で、孔子世家に「孔子生れて圩頭なり、故に丘と名づく」とあるのから由來する。

跛脚　跛足のこと。

駢脇　一枚肋。

駢栂　足の指が四本のこと。

缺唇　所謂「みつくち」のこと、兎唇。

倮　裸體の意。

小桎　小枝。

兎　やまうさぎ。

鮮陳　新舊。

膨脂　膰はちじむ。伸縮。

盌　椀と同じ。

恬靜　安く靜かな意。

懸壅　上蓋の最も奥の部分の突起した場所。

刓缺　けづつて角を去ること。

洞朗　朗らかな狀態。

蹶蹶　早く活潑に動く狀態。

耎　柔かなこと。

鳩尾　胸と腹との間の凹處。みぞおち。

髖骨　腰骨。

三稜　三角形。

隋直　物を容れられない程性急な場合、又それ程狹いところ。

拗曲　撚じまがる。

享保壬子　享保十七年。

烙刑　火烙りの刑。

根岐　根の小枝。

骶骨　尻の骨。

顱　頭骨。

蟆蝦　蛙の一種。ひき蛙に似て背に黑點があり、擧動が早い。

火灼　火が盛んに燃えてゐる狀。

瘢痕　きずあと。

參差　長短不揃ひの意。

蓴蘆　芹に似た水草で食用とする。

狙　いぬなづま。

贏餘　手長猿。

瘀　剩餘。

瘀血　積血。血液の壅滯に依つて生じる血。

孿生　雙生兒。

駢胎　雙生兒――同性の。

品胎　雙生兒――性を異にする。

佗物　他物の意。

蔕　果實が枝又は莖と結びつくところ。

逼發　せまり出る。

詞人　詩文を創作する人々。

折獄者　裁判官。

癥　腹中のしこり。腹結病。

鬢　耳際の髮。

髮　頭部の毛髮。

髭　口の上部に生える毛。

鬚　髮に生える毛。

道聽塗說　訃語の陽貨「道聽而塗說、德之棄也」から出てゐるので、道で聽いたことを又直ちに塗で他の人に話す意で、淺薄な人は善言をきいても深く會得しない意。

安永戊戌秋七月。西肥深山妙宣寺衞上人。遣使。曰。嘗所營枕肱亭成。幸一來臨。灑掃而待。晋以詩代簡。曰。來雁繫書度萬山。書中爲許欵仙關。祇林豫掃閑雲待。幽洞松蘿踏月攀。以八月十有三日出山。以九月朔至。留六日。愛其風景題一律。曰。紺園西北一仙關。縮得乾坤藏此間。磵戸有雲風自掃。煙波無路鳥飛還、海門通海別開海。山際隔山猶望山。滿地桂花香不鎖。憑闌獨對夕陽閑。去遊瓊浦。十月一日將歸又過精舍。而斯詩已勒石。晋蹙然謝曰。石甄終無盡。既去。本月十有三日歸家所聞見十而一二。錄供遺忘。本不期傍人之觀。則非置稿砥筆者。故雖非祕之於帳中。不願人之覽。

○求菩提山橋之坊に過て緣起を見、來由を聞く、其祭る神は顯國靈神、白山權現、役小角の遺跡にして行善和尚中興賴巖、聖武の比の開基、大友の比、破郤、小倉に小笠原侯入國の後、氏族小笠原源八郎其嗣齋より今に相繼で座首たり、知行三成千石

○此山に籠水あり壁立の嶽中瀑布を聞く實に奇跡なり求菩提は上毛郡なり求菩提より澤田シバカミ峠を踰る帆柱迄上毛郡小坂の上分界堠子あり是を過れば高羽郡高羽今作田河此路より北に巖石の古城見ゆ松生ひ茂れり

歸山錄（抄）

安永戊戌の年秋七月、九州熊本の深山に住む妙宣寺の衞上人から消息があつて、「先頃から建立中だつた枕肱亭が最近全く出來上つたから、是非一度御來遊を願ひ度い。綺麗に掃除をして待つてゐますから。」といふ旨を傳へて來た。私は早速詩を送つてその返事に代へた。「來雁書を繫んで萬山を度る、書中爲めに許す仙關を欵くを、祇林豫め閑雲を掃うて待つ、幽洞松羅月を踏んで攀づ」と。私は八月十三日に山を出て九月朔日に其處へ行つた。六日間留つて四邊の風景を愛し、一律を題してかう云つた。「紺園西北の一仙關、乾坤を縮め得て此の間に藏む、磵戸雲あり風自ら掃く、煙波路なうして鳥飛んで還る、海門海を通して別に海を開き、山際山を隔てて猶ほ山を望む、滿地の桂花香鎖さず、闌に憑つて獨り對す夕陽閑なり。」と。去つて長崎に遊び、十月一日、將に歸らんとする途中、又精舍を通ると、もうこの詩が石に彫まれてあつた。私は恐縮して謝して云ふやう、「どうもこんなまづい詩を彫られては石も迷惑するでせうし、汗顏の至りでもあります」と。やがて寺を去り、本月十三日家に歸り著いた。旅中の見聞の十の一二を錄して、遺忘に備へることにしたが、傍人の眼に觸れんことを豫期したものではなく、素より操觚專門の私でないから、故らに帳中の祕とはしないが、他人に示さうとは夢にも思はぬのである。

○求菩提山の橋之坊を通りすがりに立寄つて寺の出來た由緒來歷を聞いて見た。此處には顯國靈神を祭つてあつて、白山權現、役小角を祭つた跡がある所でもある。この山を初めて開いて寺を建立したのは聖武天皇の御代のことで、行善和尚中興賴巖と云ふ人の手に依つたものである。その後大友家の時代に一度すつかり壞れて潰れてしまつたが、小笠原侯が自分の領地である小倉に歸られた後、再建され、その一族、小笠原源太郎と云ふのが後を嗣いで同山の齋となつてから、代々相繼いで今日に及んでゐる。知行は三成千石であるとのことであつた。

○この山には瀧があつて籠水をする所がある。壁のやうに切り立つた山嶽の中で瀑の流れ落ちるのを聞くことの出來る珍らしい所である。この求菩提山は上毛郡にあつて、此處から澤田シバカミ峠を越えて帆柱までは上毛郡小坂の上分界路で、ずうつと里程標が建つてゐる。此處を通り過ぎると高羽郡がある。高羽は今田河と爲つてゐる。この路から眺めると北の方に松の深く生ひ茂つた中に巖石の古城が見えるがそれは彦山である。

○彦山鬼石坊は舊知たるを以て訪つて山の來由を問ふ中岳、當所岳、卽上宮、伊弉冊尊を祭る女體權現と稱す南岳伊弉諾尊俗體宮と云北岳天忍骨尊、法體宮と云是本座にして三岳三尊を併せ祭る此三神降靈八角三尺六寸水晶石上崇神天皇二年水精石現瑞光照帝闕帝以勅使祭之十二所權現とは

白山宮　菊理媛命
中宮　市杵島命
大行事　高皇產靈尊
北山　大巳貴命（田心姫命　湍津姫命）
大南窟　大聖童子
玉屋窟　金杖童子
智室窟　福智童子
鷹巢宮　都良童子

○彦山の鬼石坊は昔の知合であつたので訪ねて山の由緒を聞いて見た。この山の中岳は同山の中心となつてゐる岳で上宮と云ひ、伊弉冊尊を祭つてある。それから女體權現と稱へてゐる南岳は伊弉諾尊を祭つてあつて俗體ノ宮と云はれてゐる。北岳は天忍骨尊（あめのおしほねのみこと）を祭つてあつて法體ノ宮と云はれてゐる。この三岳が本座であつて三岳三尊を併せて祭つてあるこの三神は八角三尺六寸の水晶石の上にお降りになつたため、崇神天皇二年にはこの三神の靈の降りられた水晶石がまばゆくおごそかな光を放つて日本國土を照したと云はれてゐる。これがため天皇は特に勅使を遣はしてこれを祭つたと云ふことである。

さて此處の十二所權現と云ふのは如何なるものかと云へば

白山宮　菊理媛命
中宮　市杵島命
大行事　高皇產靈尊
北山　大巳貴命（田心姫命　湍津姫命）
大南窟　大聖童子
玉屋窟　金杖童子
智室窟　福智童子

三所權現と共に十一社十二所權現とも云下宮は遙拜の處素盞烏尊を相殿に祭る又其說に曰當山は後魏の善正上人爰に來る時に豐後日田郡藤山恒雄と云者白鹿を追て此山に入り上人に遇ひ弟子となり忍辱比丘と云共に力を合せて此山を開くと云今上宮の道恒雄の祠あり神宮の創建は欽明七年玉體加持の事は嵯峨天皇十年より今に至つて斷えず座首妻帶の始は後伏見帝第六の御宮助有法親王を座首となし奉るより始ると云云

○彦山志、肥前釋大潮著す
○宰府神廟の樓門は石田三成建立の由先年詣でし時六度寺の泰賀上人語りき
○天拜山は麓に天滿祠あり新天神と云祠前に衣懸けの石あり頂に小

鷹巢宮　都良（とら）童子

前述した三所權現と合せて十一社十二所權現とも云はれてゐる。

下宮は遠くから拜したところによると素盞烏尊を御本殿として祭つてあるやうに拜する。又一說には同山は後魏の善正上人が此處に來る途中豐後日田郡の藤山恒雄と云ふ者が鹿を追つてこの山に入り偶然にも上人と出逢ひ、そのまゝ弟子となつて忍辱（にんにく）比丘と名を改めて、共に力を合せてこの山を開いたのであるとも云はれてゐる。今でも上宮へ行く道筋に恒雄の祠がある。神宮の創建されたのは欽明七年のことであつて、御本尊に向つて實際に祈禱を籠めるやうになつたのは嵯峨天皇の十年からでそれからずうと今日まで絕えず行はれてゐる、座首が妻帶するやうになつたのは、後伏見天皇第六王子助有法親王が座首になられた時を最初とするのである。

○彦山志は肥前の國の釋の大潮が著したのである。

○太宰府神社にある二階建の門は石田三成が建てたのであると云ふことは先年中お詣りした時六度寺の泰賀上人が話して呉れた。

○天拜山は麓に天滿宮の祠がある。新天神と云つてゐる。祠の前には衣懸の石がある。山の頂上には小さな社が建てあるが、ひどくあれすさんでゐて庭は雜

社あり庭に草生ひ最荒涼たり社東に向ふ菅家登望の地にてもありしにや

○筑後上妻郡江戸村の水道とて大渠あり草野又六と云者の經營する所と云其工甚壯なり渠の末派の溝皆よく舟を通ず

○筑後久留米郭門の外に今の少將五穀神の社を造立す其寺を神田山圓通密寺と云造營甚壯麗なり而して國中の民家風日を蔽ふ者稀なり

○肥前佐賀の城を出でて小田と云驛大木の楠枝葉茂れり其木に行基の刻める馬頭觀音あり殿小なりといへども甚麗はし

○大邨領國豐に農賈饑渴の患あるべくは見えず士皆土著故古風見る樣に思はる

○長崎にして長崎緣起と云書を見る光壽山正覺寺禿法眼記とあり是を見るに長崎は元彼杵郡大村四十八箇村の一昔は深江浦といへり應永の比下總國佐倉より長崎小太郎爲直と云者ここに來り代代住せしより長崎と云とあり瓊浦と云ことを人に問しに玉浦と云一名ある由也

○同書曰慶長八年癸卯東照公長崎奉行として小笠原一庵を下さる今年始めて邪宗を嫌ひ玉ふ翌年有可改邪歸正之命長崎奉行の始なり

草が生ひ茂つて誠に寥々たるものである。社は東向に祀られてある。が、これは恐らく菅原家の人達が、遙かに東を望む登望の地だつたのであらうかとも思はれて、そゞろ感慨も深かつた。

○筑後の上妻郡江戸村の水道と云つて大きな溝渠がある。草野又六と云ふ者が經營してゐるのだと云ふが、その工事が非常に大きく末流の溝までも舟が通るやうになつてゐる。

○筑後久留米郭門の外に今の少將が五穀神の社を建立した。その寺を神田山圓通密寺と云ふのであるが、寺の作り工合が非常に壯麗を極めてゐる。而して國中の民家では風日を蔽ふものは稀である。

○肥前にある佐賀の城を出て小田と云ふ驛に來ると枝葉が茂つた楠の大木がある。その木には行基が彫つた馬頭觀音の像がある。御堂は極めて小さいけれども又非常に凝つた美しいものである。

○大村家の領土は豐かで農家商人も飢ゑ苦しむやうな心配があるなどとは思はれない。武士は多く其處で生れ育つた者だから、全體に極めて古風を見るやうに思はれる。

○長崎に來て「長崎緣起」と云ふ本を見た。表題に「光壽山正覺寺禿法眼記」と書いてある。これに依ると、長崎はもと彼杵郡大村の四十八ケ村が合併してゐて昔は深江浦と云つてゐたのである。それが應永年間に下總國佐倉から長崎小太郎爲直と云ふ者が渡つて來て代々住むやうになつてから長崎と云ふやうになつたとあつて、瓊浦と云ふことを人に尋ねて見たところ別に玉浦と呼ぶさうである。

○同書のうちに又次のやうに書いてある。それは慶長八年癸卯に東照公が小笠原一庵を長崎奉行として派遣なされた。今年始めて外來の邪宗教を嫌ひなされて翌年直ぐに邪宗を改めて正しい宗教に歸れよと云ふ命令を出した。これが長崎奉行の初めであると書いてある。

○同書を讀んで考察して見るのに、その當時の長崎は天主教が非常に旺盛を極め、神社佛閣は一棟をも殘さない程に破壞されて、住民は悉く耶蘇（やそ）の教徒だつたのである。この時森都と云ふ盲目な男があつた。田原紹忍に與する徒で專ら邪宗の教へを宣傳する一方の旗頭であつたけれども、元和二年五月五日に初めて全く改心して、佛法に歸依するやうになつた。これが所謂轉（コロビ）と云つて耶蘇教から佛教に宗旨變へをする始めであると云はれてゐる。其處で當時の奉行長谷川權六は早速江戸にも注進してこれが白狀に因て其徒しれたり是台德院殿の時にして寺方門徒帳の始也

○同書を考ふるに此比長崎は天主教盛にして神社佛閣破壞して一宇も殘らず居民盡耶蘇の徒也この時森都と云盲目あり田原紹忍の徒にして專邪法の棟梁なりしが元和二年辰五月五日始めて心を翻し佛法に歸すこれ轉の始也奉行長谷川權六江戸に注進しこれが白狀に因て其徒しれたり是台德院殿の時にして寺方門徒帳の始也

○采覽異言に耶蘇の徒を誅し玉ふ事二十七萬とあれば島原の一戰は僅の事也今に云傳へて耶蘇の法を倣すれば自由自在を得虛空をも飛行し人の心の內の事をも知り目に金七厘宛生ずるなど云り天地の間に斯る事なし皆彼方邪人に惑はされて妄想したるなり此杵築藩にも百餘年前一向の徒今在家と云村より法義に託し夫婦の緣組を屏風を立て男女を兩方に置き帶を是に懸け其取り合ひたるをば老弱貴賤を隔てず彌陀の引合せなりとて配偶しける其勢甚盛なり國守其首惡を磔にして其徒數人を戮し家臣胥吏をして改宗せしむ衆民旨を承て皆改宗せり管內の敎寺唯寺院のみありされども頑人薫執を改むる事能はず中の原と云處にして死刑に就し者多し今猶其徒ある者は再興せし者也是皆他の蠱說に妄想を生じあると云ふ。

○「采覽異言」と云ふ本に耶蘇敎の門徒を死刑に處したもの二十七萬人と書いてあるから、島原の亂などはそれに比べると極く小さい反亂であつたと云ふことが出來る。その當時のことを今日傳へ聞くところによると、耶蘇敎を信奉することが早ければ早い程、身體の自由自在は直ぐに得られて、空を飛ぶことは勿論、人の心の奧底までも見通すことが出來るし、而もその上每日金七厘づつ生れて來るなどと云つたと云ふことである。然し誠に馬鹿げた話であつて天地の間に斯樣なことが行はれやう筈は絕對にない。これは皆彼等怪しげな說敎者の嘘言と自分の利慾に惑はされて妄らな想像をすることから起つたものである。この杵築藩にも百餘年前に今の在家と云ふ村に迷信を奉ずる宗徒があつた。此處では宗敎の掟に委ねて夫婦の緣組をさせると云ふのである。それは先づ屏風を立て男女をその兩方に置き帶を懸けてそれを取合つたものをば老弱貴賤の差別なく有難い彌陀の引合せであるとして夫婦にさせるのである。當時又この風習が非常に盛んだつたので、政府ではその張本人を始め重だつた者數人をさらし首の刑に處して、一方速やに改宗させるやうに努めた。その結果多くの者は改宗したが中に仲々妄想を固執して改宗しない者もあつて中の原と云ふところで死刑になつた者も多かつた。今尙其妄想を眞と認め邪行を正と思ひ父母に孝し君上に忠を盡すよりも猶廣大無邊の事ありと心得違ひたるより起るなり

今在家傳照寺府內光西寺の末寺にして鸞徒なり秘事法門と云を始めて大に人を譸し惑はす秘事法門に入者は其秘密其盟に預らざれば父子の親夫婦の密といへども之を語らず每月數度の會合あり讃佛了りて酒食の事あり夜深け人靜まりて秘事法門に及ぶ事秘すれば知る者なし漸にして聞に男女兩列に分れ其間屏風を隔つ婦人帶を解て屏風に懸く男子列中を立て其帶を冥搜して取る其相得るの男女是卽無量壽佛の媒する所として子母姑姉妹に論なし奸を行ふ其風愈盛なりこの村に眞言家の僧あり佛法を亂ほかゝる徒のあるのは、さうした輩が再興したものである。如上の風習は皆他に目的があつて、誘惑的に迫つてくるところの私慾をそゝる邪說に惑はされ、常の心を失つて、妄想が妄想を生むやうになる結果、遂に妄想を眞實と考へ、よこしまな行ひも正しいものと思ひ込んでしまふのである。さうしてこの天地に父母に孝行を盡し、國に忠義を盡す以外には更に偉大なものはないものを、尙ほ何事かもつと廣大無邊なことがあると心得違ひをしてしまふ結果から起ることなのである。

今の在家の傳照寺は府內西光寺の末寺であつて鸞門の宗徒である。祕事法門と云ふのを始めて大變に人々を欺き惑はした。祕事法門に加入した者は譬へ親兄弟、夫婦の仲でも口外を禁じて、每月數度會合して法會が終ると酒を呑み、夜も更け人も寢靜まる頃になると祕事法門が始まるのである。これも又婦人が帶を解いて屏風に懸け、男は隊を立てて暗闇の中で帶を搜してこれを取合つた男女は誠に量り知れない佛の御惠みであるとして譬へ親子、兄妹であつても奸を行ふのである。この風習が愈々盛んになるにつれて、佛法の本道を亂し風俗を害することの餘りに甚だしかつたので、この村にゐた眞言宗の僧侶は見るに見かねてこれを代官に告げたのである。時の領主松平市正は直ぐ下役人に命じて彼等一味の者六十餘人を召捕へ拷問に處した上、張本人である名主の中島九

り風俗を誤るを見るに忍びず官に告ふす時の領主松平市正直次命じて其黨六十人を搦捕て拷問す張本處の名主中島九左衞門夫婦を磔にして外に七人の首惡を戮し其他を赦し改宗せしめ寺を毀ち奸僧二人を追ふ奸僧怒を含み訴人眞言僧を山中に出あひ石を以てうち殺せり是寛文四年甲辰の春なり領主鸞徒の衆を惑はし彝倫を亂るを憎んで家臣及群有司をして他宗に歸せしむ群有司旨を承て各其下をして宗を代しむ是君侯の令に非ず君侯の意による也此時田染高田見目眞玉の四組公料にして杵築侯預りなり田染組陽平の莊屋四郎右衞門上野村助三郎衆を結んで改宗せざらんとす侯これを戮す因て皆宗を改む爾後田染組竊に鸞徒を賴んで親を葬る者一人子を葬る者二人あり侯亦これを捉へて戮す豐前中津妙蓮寺隱居素石法橋竹翁鸞徒なり其黨の頹廢を悲み或は本願法主寂如上人に詣つて此事を歎き或は杵築藩に來つて此事を請ひ終に有馬左衞門佐清純吉良若狭守義冬を賴み屢託を入れ自勸めて情願する者をして鸞徒に復らしむ眞玉組十ケ村見目組十二ケ村竹田津十三ケ村來浦十ケ村富來十二ケ村横手十二ケ村小原十九ケ村兩子十一ケ村復歸する者一萬千百八十九人安岐守永の二組は情願の者なき由にて素石中津に歸る爾後安岐守永にも稍稍復歸する者あり田染高田は後松平主殿頭領となるに及んで盡く鸞門に復る領中復宗の事は寛文十年庚戌杵築の國老加藤助左衞門橋本伊織田中興左衞門郡奉行大河内五太夫宮内仁左衞門寺社奉行石田半助佐藤小次郎寛文八年以前は郡奉行寺社を兼帶公料奉行は澤興市右衞門原大右衞門今に是を帶解佛法と云天下の大道と云者は日月天に懸るが如し暗夜曖昧の間に相結ぶ者は奸徒のなす事愚昧の惷民を給き己が私を逞ふす近世江戸にて土藏佛の崩れあり豐に摧破眞妄の訟あり皆鸞徒にあり天明辛丑春我小倉中津に遊ぶ此二藩中妖僧暗夜密誓をなし泉下の幽

郎左衞門夫婦を始め主謀者數名を死刑にした、同時に他の者は放免して改宗させ、寺を燒拂つて惡僧侶二人を追放した。追放されたこの二人の僧は眞言宗の僧を大變怨んで、山中に出合つたのを幸ひに石をもつて打殺したと云ふことである。これは寛文四年甲辰の春のことである。斯樣に惡思想を宣傳して妄りに人心を惑はす鸞門の宗徒を領主は大變憎み家臣や多くの役人と協力してこれを撲滅して改宗させようとした。然しこれは領主の命令ではなくて君侯の意志に依るものであつたため、當時田染、高田、見目、眞玉の四組は幕府の料地であつて杵築侯は幕府から預つてゐたものであつたから田染組陽平の莊屋四郎左衞門上野村助三郎等多勢となつて改宗しまいとする者などあつたため、止むなくこれ等を死刑に處したりなどして多くの者を改宗させ他宗に歸依させた。この時豐前中津の妙蓮華の隱居で素石法橋竹翁と云ふ鸞門の宗徒がゐたが、鸞門の頹廢して行くのを悲しんで、本願寺の法主寂如上人や杵築藩のもとに行つて請願をした。その上又有馬左衞門佐清純吉良若狭守義冬を賴んで再三請願に及び遂に自發的に事情を訴へて願ひ出る者には鸞徒に復ることを許すと云ふやうにしてしまつた。其處で眞玉組十ケ村、見目組十二ケ村、竹田津十三ケ村、來浦十ケ村、富來十二ケ村、横手十二ケ村、小原十九ケ村、兩子十一ケ村、復歸した者が一萬千百八十九人であつた。安岐守永の二組は、請願する者がないため素石は中津に歸つた。その後安岐守永にも復歸する者が出たり、田染、高田は松平主殿頭領主となると盡く鸞門に歸依してしまつた。かうして折角の鸞門改宗も完全には遂行出來なかつた。領中で復宗のことを行つたのは、寛文十年庚戌で、杵築の國老加藤助左衞門、橋本伊織、田中興左衞門等で、郡奉行は大河内五太夫、宮内仁左衞門、寺社奉行は石田半助、佐藤小次郎であつた。寛文八年以前は郡奉行は寺社奉行を兼ねてゐた。公料奉行は澤興市右衞門、原大右衞門等であつた。今日ではこの怪しい宗門を帶解佛法と云つてゐる。思ふに天下の大道なるものは丁度太陽の光のやうに常に明々白々のものでなければならない。前後も分別つかないやうな暗い夜の間に行ふやうな怪事は天下の大道を歩む者のすることではなくて、一にあさましい人間のすることであり、彼等は常に善良で愚かな民を欺いては、私慾をたくましうしてゐるのである。近頃江戸に土藏佛の崩れと云ふ騷ぎがあり、盛んに眞妄を摧き破るといふ訟があるのは皆鸞門の宗徒がなす業である。私は天明辛丑の春小倉中津に遊んだことがあつた。その時はこの二藩のうちに怪しげな僧が居て、暗い夜に密に人を呼んで地下にゐる人間の靈魂を現はして見せると云ふことで屢々愚かな民を惑はして金

魂を現して之を見せしむるを以て愚民を惑し金を攫む二藩皆其妖僧を追ふ是は淨徒なりとかく世間文盲なる時は死生幽明の故に罔し罔ければ惑ひ多しここに於て邪說風靡す故に有國者この弊を改めんとならば世をして文明に赴しむ世文明の化行るれば人死生幽明の故に惑はずここに於て僧徒も其奸をやめて漸く其祖訓に近づく唯奸僧虛に乘じて人を魅するの徒は在家の書を讀むを惡む

西洋の法も國政などは聞くにしほらしき事のみ多し彼國も我國の神あり儒あり佛あり其佛も流を異にし派を分ち一樣ならざるが如くにして一種人を蠱惑するの道あるにやすべて愚民の態は奇異の我不測に出るに氣を移すもの也元の頃外國より來る僧は色色の人の目を驚すことをして人を傾けし也今伊綱と云類也伊綱とて造化を我手に入れて自由にすることはならず畢竟は障眼機なり西人支那に來り口より火など噴て見せしことあり是も其方ある由法苑林にも說けり今度吉雄にきくに是も唯方あることにて口ばかりにてはあらず手にて物をすりても光出る方ありと云り世の人の心は利慾に迷ふ者也正覺山大音寺は長崎にて佛法中興の先魁にて徂徠大音寺の碑あり今石碑の經營ならんとす寺僧に請てこれを讀むに西洋我國を奪はんとして我愚民を欺き人心を移したる謀にして我民に酒食を與へ財貨を贈り或は鏡を示して其面を異形に變し火を口より噴くなど云樣の事をして人を靡かしたりと見ゆ吉雄話の序に曰我竊に國家の爲に東北を患ふ西域の人の人の國を奪ふや多く干戈を動かさず我國東北は蝦夷の地也蝦夷の北邊已に西洋に得らる若蠶食して蝦夷を有せは我國常に北顧の患あらん蓋西洋の人の佗の國を奪ふ或は色を放ち或は酒食を饗をせしめてゐた。二藩では速かにこの怪僧を追放したが、この僧は淨土宗の宗徒だつたと云ふことである。

このやうに世間の人が全く無學文盲な時は人間の生と死とは自から幽明を異にしてゐるので、法律で邪行を罰しなければ結局惑ふ者が多いのである。それがために又人間の道を謬るやうな說も勢ひを得て蔓るのであるから、眞に國家のために思ひ徹底的にこの弊害を改めようと思ふならば、どうしても世の中をもつともつと文化の進んだものにしなければならない。世の中の人の知識が進歩すればするほど、生死幽明の問題について、却つて怪しい教へに惑ふといふことがなくなるのである。從つて邪惡な考へを持つた僧侶も自然と淫らな行ひが出來なくなつて、祖先の正しい教へに近づいて行くやうになるのである。然し人間の虛につけこんで愚かな人達を欺き惑はすやうな惡い僧侶は、得て出家でない俗人が書物を讀んで物の理に明るくなることを忌み嫌ふものである。

○西洋の法も國政などは聞いて見ると馬鹿らしいことばかり多い。外國にも我が國で云ふ神も有れば、儒もなり、佛もある。その佛も流儀を異にし、派が分れてゐて一樣でないらしいが、一種人を惑はすところの道があるのだらうか、凡て愚民の心ばえは自分の想像もつかないやうな不可思議なことに遇ふと、それに心

を移すものである。支那の元の頃、外國から來る僧侶は色々、人の目を驚かすことをして、人を自分の方に引きつけたものである。今、伊綱などといふ類がそれだ。伊綱だからとて自然を自分の手に入れて自由にすることは出來ない。つまるところは、障眼機（てづまからくり）である。西洋の人が支那に來て、口から火などを噴いて見せたことがあつた。それも矢張り方法があるといふことが「法苑樹林」といふ書物にも說いてある。今度吉雄に聞いて見ると、これも唯方法があるのであつて、口ばかりではなく手で物を摺つても光を放つ方法があると云うてゐた。世間の人の心は利慾に迷ひやすいものである。正覺山大音寺は長崎で佛法中興の先魁（さきがけ）で徂徠大音寺の碑がある。今丁度、石碑が出來上らうとしてゐる。寺僧に請うてこれを讀んで見ると、「西洋の國が我が國を奪はうとして、我が國の愚民を欺き人心を收めた謀であつて、我が國の者に酒食を與へ、財貨を贈つたり、或は鏡を示してその顏を異形に變へ、火を口から噴くなどといふやうなことをして、人心を風靡したのである」と書いてゐる。吉雄は話の序に言ふには、「自分は竊（ひそか）に國家の爲めに東北地方のことを心配してゐる。西洋人が、他國を奪ふやり方は、大抵戰爭をしない。我が國の東北は蝦夷の地である。蝦夷の北邊は既に西洋のために占められてゐる。若し西洋の者が、蠶が桑の葉を喰ふやうに段々と侵して來て蝦夷の地を占

し財貨を予へ人心を移し其内己が要害を固め人心已に移るの後一舉して其國を取る干戈を用ゆるを大下策とす某の國某の王名も聞き其書も見しかども忘れたり其王の夫人に弟あり國王最財貨に富めり夫人の弟國王を弑して國を奪ふ夫人宮女の美にして才略ある者八十人を撰み貨財を携へ地を一島に避く而して島民に酒食財貨を予へ出入を縱にす爰に於て男子自然と來りて配偶をなす二十四年を經て壯男數百を得是より兵を募り此精兵を以て終に其弟を亡ぼし其國を復せしとぞ西人の智巧かくの如し今蝦夷我東北にあり帶るに山河の險を以し射に長じ水に得たり其國金銀必多けん土人採ることを知らず而して其國智巧未開けず若我西人の術を用ひ我國の威武により恩を以て撫し敎を以て穀食の美を知らしめ彼平生好む處の煙酒を贈り人心我に歸する樣にせば彼悅んで歸伏せん已に蝦夷の地を有せば金穴開くべし財貨據るべし北門是に由て固かるべし只萬國の地圖を展べ萬國の情態智巧を考へ其事跡を知りて其事いふべしかく取り易き國を取らず若西洋に蠶食せられば國家豈北顧の憂なからんや我竊に西人人の國をとるの術を知て國家の爲に怖懼を抱くといへり是に由てこれを思ふに實にこれ西人の意測り易からず國家防嚴に怠らず可謂其要を得と然して其國の人智巧萬國に勝るよく思ふべし。

○吉雄名は永章字は耕牛幸作と稱す此亭にして松村君紀に會ふ君紀は其字名は元綱安ノ亟と稱す共に

領したなら、我が國は常に北方のことを心配せねばならないだらう。蓋し西洋人が他の國を奪ふやり方は、或は美人の色香を以てしたり、或は酒食を馳走し、財貨を人々に與へて、その心を己れの方に傾けさせ、その中自分達の要害を固めて置き、人心が既に自分達の方に集つて來たと見ると、一舉にしてその國を乘取るのであつて、戰爭をして國を奪ひ取るのを最も下手な策略としてゐる。それについて某の國某の王名も聞き、その書物も見たのであるが、自分は忘れてしまつた。が、その王の夫人に弟があつた。國王は頗る財貨に富んでゐたので、夫人の弟は國王を殺して國を奪つてしまつた。其處で夫人は宮女で美しくて才略ある者八十人を選び、少し貨財を携へて或島に避難してしまつた。そして島民に酒食財貨を與へて住居に出入することを自由にさせたので、男子が自然と集つて來て宮女と緣を結ぶやうになつた。かくして二十四年の歲月が過ぎて元氣壯んな男子が數百人となつたので、それから兵を募つてこの選りすぐりの兵を率ゐて王を殺して國を奪つた弟を攻め亡して、遂にもとの國を取り返したといふことである。西洋人の智慧の秀れてゐる工合はかやうなものである。今蝦夷は我が國の東北に住んでゐる。かの地は山河の險を以てぐるりと四方を取圍まれてゐて弓を射ることが上手であり泳ぎが巧みである。彼等の住む國には金銀が必ず多いことだらうが、土人はこれを採集することを知らない。而も土人の知識は未だ開けてゐないから若し我が國で西洋の術を採用して、我が國の威武によつて恩惠を施してこれを惠しみ敎へを以て知識を開き、穀食の美味いことを知らしめて、土人が平生好むところの煙草や酒を贈つて人心が此方に靡いて來るやうになれば、彼等は喜んで歸伏するであらう。一旦蝦夷の土地を占有してしまへば、物資の源が開けるであらうし北方の門戸の備へが嚴重になるであらう。只萬國の地圖を繰り展げて萬國の情態や文化の程度を考へ、その事蹟を知つて始めてこの考へが云へるのである。このやうに取易い國を取らないで、若し西洋の國に段々奪はれてたならば、國家はどうして北方を顧みるといふ心配がないだらうか。自分は竊に、西洋人が他の國を奪略する術策を知つて彼の方法のまことに恐るべきことを了解したから、國家の爲めに恐れを抱くのだと云つたのである、これに由つて考へて見ると、實際西洋人の心中は測り難いのである。國家は强敵に備へて怠らなければその要を得るといふことが出來よう。尙ほ又その國の人智のすぐれてゐることは萬國に勝つてゐるといふことも、よく考へなければならない。

○吉雄の名は永章字は耕牛幸作と稱する。この亭で松村君紀に會つた。君紀はその字名は元綱安之丞と稱する。二人共に和蘭陀語を通辯する人である。耕牛は

阿蘭陀の舌人耕牛西學に通ず西洋の書を儲ゑて架に滿つ甚客を愛す一日我を招ひで酒を飲しむ其酒數品

一、ゴルトワートル。ゴルト翻金ワートル翻水。
一、マーガワートル。マーガ翻胃。是能養胃者。
一、セルデレイ。
一、カルエー。共不聞其說
一、ゼネーフル。ゼネーフルとはヒムロの實と云こと也ヒムロのみにて造れる酒也ワートルの語下にあるべし
一、オランエワートル。オランエ翻相子

酒は右の如く草木の精英を以て造るセネーフルオランエその外は皆葡萄にて造れり其說に曰穀は人の生命を續く者酒は人の本心を亂るの狂藥人命を續くの良物を費して人心を亂るの狂藥とすべからず酒色同じからず氣味も亦これに從ふといへども燒酒の類を出ず。

○混圓たる一天地畢竟始も無く終

西洋の學問に通じてゐて、書棚には西洋の書籍が一杯詰つてゐる。頗る客を喜んで、一日自分を招待して酒を飲まして呉れた。その酒は數種で次のやうである。

一、ゴルトワートル。ゴルトは金と飜譯し、ワートルは水と飜譯する。
一、マーガワートル。マーガは胃といふ意味である。これはよく胃を養ふものである。
一、セルデレイ、
一、カルエー。この二つとも說明を聞かない。
一、ゼネーフル。ゼネーフルといふのはヒムロの實といふことである。ヒムロの實で造つた酒である。ワートルといふ語が下に續くのである。
一、オランエワートル。オランエは日本語で相子といふ意味である。

酒は右のやうに草木の精分で作つてある。ゼネーフル、オランエその他は皆葡萄で作つてある。その說くところに依ると、穀は人の生命を保つもので、酒は人の本心を亂すところの狂藥である。人の命を保つところの良物を使つて人心を亂すところの狂藥を製造してはならない。これ等の酒の色は同じでなく、氣味も亦これに從つて異るものだと云つても燒酒の類を出でない。

○人間の住む世界も、それを取卷く大宇宙も全く圓球體のものを構成してゐる

も無し各國天地の開闢を說く其說同じからず是其國の譚士意匠を以て其窺察殊なれば也耕牛子架上の書を檢するに我邦神代の卷とも云べき書也其說を聞くに始天よりアーダムと云が肉を取りてエーハルとなれりアーダムとは雄と云が如くエーハルとは雌と云が如し此二神身に光あり終に子を其間に生じ食慾を生じ色色の物を食ふに由て身光出ず終に人となれり以下說長きを以て略す我邦諸冊の二尊を說が如く又佛氏光音天人地膩を食つて身光減ずるの說と髣髴たり彼國是を開闢にして以來安永戊戌の今年に至つて五千七百二十八年耶蘇降誕以來千七百七十八年彼國にては其時の國王一世を以て數へ又の王立つ時は新に數を起し又年號を改元して舊算を棄て別に數を起す樣に數へかけて又數へ始むる樣なる事なし年號もなし甲子も無し唯開闢と耶蘇降誕とよりひた數へに數ふるの二法のみ也最目など數ゆるに七の數を用ゆる事あり今服藥灸治湯治など七目を以て一周と云事あり西洋の習俗より移れる事にてあるにや其七と云は經星の外は唯日月五星也五星本辰星太白熒惑歲星塡星素問等に五行を主張してより辰星は卽水太白は卽金熒惑は

のであつて見れば結局始めもなく終りもないわけである。各國でこの宇宙や自然の開けた最初のことを說くものがあるが必ずその說を異にしてゐるのである。これは云ふまでもなくそれを說明する人が、始めも終りもないものに無理に意匠飾りをつけ臆說するからである。耕牛氏の机上にある我が國神代の卷といふ書物を開いて見ると、天地開闢のことに就て、「始め天からアーダムが肉を取りエーハルとなつた。アーダムは雄、エーハルは雌である。この二神には身に光があつたが、終に子供を生み、食慾が出て種々なものを食べた結果、身光を失ひ、遂に人間となつたとある。」以下長くなるので略するが、これは丁度我が國の伊弉諾伊弉冊の二神の說と同じやうに、又佛氏光音天人が地上のあぶらぎつたものを食べて身光を失つたと云ふ說によく似てゐる。外國ではエーハルが人間になつた時を天地の始めとしてこのかた我が國安永戊戌の今年まで五千七百二十八年耶蘇降誕の日から千七百七十八年である。そして外國では我が國のやうに天皇の卽位される毎に年號も變り年數も新らしく數へ始めると云ふことはなく、唯開闢の時からと耶蘇降誕の年からと二つの方法で數へてゐる。最も日を數へるのに七の數を用ひてゐることがある。現在では服藥、灸治、湯治などに七日を以て一周と云つてゐるがこれは西洋の習慣から來たものであらうか。その七と云ふのは經星の外に日月五

卽火歲星は卽木塡星は卽土終に舊名を失して性を五行に求む五行本人造人造を以て天に求む愈其眞を失す西洋本漢學と相關涉せず故に甲子も無く五行も無くして天眞を見るに損なし漢學の固習を破るべし西洋は七曜を七金に配す是も亦配當にして漢說と魯衞の政也といへども其人造の異に依て天眞に非ざることは識るべし西洋七金の配當は日。金。月。銀。辰星。汞太白。銅。熒惑。鋼。歲星。錫。塡星。鉛

○天經或問渾與外記等にも西洋の四行の事を說り四元行ともあり漢の木火土金水天竺の地水火風空西洋の四行水火土氣其說同じからずといへども畢竟共に造化を說くの具にして同一日の譚也耕牛阿蘭陀には不用四元行と語れり

○西洋天象の圖を見るに日體は燄燄として火もゆるの象也兩邊連山の如き象あり其山間の如く或は山頂の如き處火もえて火山の如し山の如きもの無き處は火體洋をなすが如し其間火井とも謂べき象ありて火もえて其內より出るが如し而して處處煙を起す象あり月の圖は周圍黃赤道あり微茫の中歷歷として山海江湖の勢をなす蓋これ地體水陸の影と是に於て逐一其地名を記す書中必其故を說くならん然して其字讀こと能はず身自學の博からざるを憾むる而已月中の翳其說多多皆迂怪論ずるに足らずこれを山海の影とするも酉陽雜俎かにありと覺ゆ先年綾部璋菴藩に在し時璋菴此說を取らずして曰水及鏡の物の影を含む已光無して物の象を含む也已光を放つて暗物を照らす暗物の彩已を照すの光體に入ること其微を見ずと云し事今猶記せり兎にも角にも月中の翳は何物なるを辨せず今晋をして孟浪に放言せしめば日及五星各其內物を布く事地表山河を羅ぬるが如し月中の體必玲瓏透徹無瑕の珠の如くならんと思ふも推量也月體を無瑕の珠の如くならんと思ふを土臺にして推量る故是を翳となして兎とも蟾蜍とも桂とも闍浮檀樹とも或は嫦娥とも吳剛とも又山河の影とも云ふ也天一面に碧なる事能はず日月星漢あり日體一面の燄燄なること能は

星を云ふのである。五星はもと辰星、太白、熒惑、歲星、塡星である。「素問」等といふ本には五行を主張してから、辰星は水、太白は金、熒惑は火、歲星は木、塡星は土となり、終に舊名をなくし、性を五行に求めるに至つた。五行はもともと人間が考へて拵へたものを天體に求めたのであるから愈々その眞實を失つたのである。西洋のものは漢學とは無關係なものであるから、甲子も五行もないから天體の眞實を見得るのであつて、漢學の舊い習慣を破るものであると云へる。西洋は七曜を七金に配當させてゐる。その配當は日、金、月、銀、辰星、汞、太白、銅、熒惑、鋼、歲星、錫、塡星、鉛である。何れも漢說と似たり寄つたりなもので、唯人間が作つたものであつて、天眞でないことがわかる。

○天經或は「渾與外記」等にも西洋の四行のことを說いてゐる。四元行とも云つてゐる。漢の木火土金水、印度の地水火風空と西洋の四行水火土氣はその說くところが全く同じでないとしても、つまるところは何れも天地自然のことを說くのに元素を以て來て說明してゐるところを見れば又同じやうな說と見て間違ひないのである。耕牛は阿蘭陀には四元行は用ひないと云つてゐた。

○西洋の天體圖を見ると、太陽は盛んに燃えてゐる火の姿になつてゐる。そして兩側に山が連り、その山間か山頂のやうなところは火が盛んに燃え火山のやうである。山のないところは溶岩が燃え流れてゐる。その間から所々に井のやうなところがあつて火を吹き出してゐるやうである。又此處彼處に煙を起してゐるところもある。月の圖は周圍に黃赤道があつて、全體がぼんやりとしてゐる中に、山や海や江湖のやうなものがあり〳〵と目立つて見える。これは地體水陸の影であると圖中に一々その地名を記してゐる。書中には必ずその故を說明してゐることであらうが、書物の字が自分に讀めないので、自分の學問の狹いことが殘念に思ふばかりである。月の中に翳に就ての說明は頗る多いが、何れも皆まはりくどくて怪しげなものであるから論ずるに足らない。「酉陽雜俎」といふ書物には月の中に見える翳を山海の影だと說いてゐたと。先年綾部璋菴が藩に居つた時璋菴は此の說を採用しないで說明して云ふには、「水や鏡が物の影を映すのは、水や鏡に光が無くて物の象を映すのである。自分が光を放つて暗物を照らし、暗物の彩が自分を照らしてゐるところの光ある物體に入るといふ例は見たことがない、」と。兎に角にも月中の翳は何物であるか知ることが出來ない。今私をして取留めなく放言せしめるならば、日や五星が各々その內に物を布くことは、丁度地の表面が山河を羅るやうなものである。月の中の體は必ず明かで透き徹つて居り瑕の無い珠のやうであらうと想像するのを土臺にして推量するから、これを翳として兎であると

ず物有つて連山の如し地一樣の禮なること能はず山島江海の紛雜あり熒惑太白歲星塡星各其文あり唯辰星のみ文なきが如きも日に近うして其體小なるを以て其分明を盡さざるかも知る可らず然れば天地四曜皆文あれば月體元玲瓏透徹の無瑕の珠にあらす地球に山島江海の兩體雜はり居るが如く月表亦如此二體文をなして能地の文に類するかも知るべからず五星の象如左

（圖略す）

○吉雄亭奇貨多し只此時長崎熱鬧其奇貨を遍く見其說を詳に盡す事能はず今に是を憾む亭上阿蘭陀琴、望遠鏡、顯微鏡、天球、地球、ヲクタント、タルモメートル、其外奇物種々を見るタルモメートルは變書を考えて吉雄自製する器と云譯せは寒熱升降器と云べし其形ビイドロにて如此拵たる物也此內

か蟾蜍だとか桂だとか閻浮檀樹だとか或は嫦娥だとか吳剛だとか又山河の影とも云ふのである。天はその一面が碧であることは出來ない。日月、天の河があり、日體は一面に火が燃え上つてゐるといふわけには行かない。其處には物が有つて連山のやうである。地の表面は一樣であるといふわけには行かない。山や島や江や海といろ〳〵に凹凸のあるものだ。熒惑太白歲星塡星には各々その形象がある。唯辰星ばかりが形像が無いやうであるけれども、日に近くてその體が小さいから、その形象がはつきりせぬのかも知れない。このやうなわけで天地四曜には皆形象があるのだから、月體と雖ももと〳〵玲瓏透徹の無瑕の珠ではない。地球には山島江海の兩體が雜つて居るやうに、月の表面も亦このやうである。二つの體が形象をなして、地の表面の形象に似たものであるかも知れない。五星の象は左の如くである。

○吉雄亭には珍しい品が多い。唯この時長崎は熱苦しく、喧ましかつたので、その珍品を遍く見て詳しい說明を聞くことが出來なかつたのは今でも殘念に思ふ。亭上には阿蘭陀琴、望遠鏡、顯微鏡、天球、地球、ヲクタント、タルモメートル、その外珍しい品々を見た。タルモメートルは外國の書籍から考へて、吉雄が自分で製作した器だといふことである。タルモメートルといふ語を、日本語に譯すと

藥水ありイベリコンの油を見る樣の色也是を立てて見るに熱盛なれば水上口に著く寒盛なれば水動かず溫冷の分に從つて升降す試に手を溫めて下の珠を握れば其人の手の溫まりに從て水下より升る畢竟寒暖をはかる等子と謂んも可なり

（圖略す）

○顯微鏡にてうかがふに人の髮はひらみ有り獸毛はまるし小兒の髮は中一條すく

○天球は星の圖也星の統屬漢法と大に同じからず曆算全書に由て考ふるに黃道に十二宮を分ち星を南北兩部とす北部二十一象南部十五象されども極南の天は北地より見えざるを以て知れず明の弘治の頃西洋の人吳默哥安德助など云人極南にゆき其星あるを見萬曆の比西人胡本篤再たび行て其星を測定して十二象をまし二十七象合せて六十象を天球に繪がく架上四脚を設け地平環を設け極軸これを貫くことは兩球共に同じ但天球黃極を主とし地球赤軸を主とす共に印圖也天球をヘーメルゴローピス地球を

寒熱昇降器（寒暖計）といつてよからう。その形は、ビイドロでこのやうに拵へた物である。この內には藥水があつて、イベリコンの油を見るやうな色である。これを立てて見ると、熱が盛んであると水は上に著き、寒が甚しいと水が動かない。溫冷の分に從つて器中の水は上下する。試みに手を溫めて、下の球を握つて見ると、その人の手の溫りにつれて水は下から昇つて行く。つまるところ寒暖を計る器と謂つてもよいだらう。

○顯微鏡でよく見ると、人の髮はひらみが有つて獸毛はまるい。子供の髮は中一條がすいてゐる。

○天球は星の圖である。西洋の星の統屬は漢法と大變異つてゐる。曆算全書に由つて考へて見るのに、黃道に十二宮を分け、星を南北兩部としてある。北部は二十一象南部は十五象に分けてあるけれども、極南の天は北地から見えないからわからない。支那の明代弘治の頃に西洋の人で吳默哥安德助など云ふ人が極南に行つて、その星の有るのを發見した。萬曆の頃に西洋人の胡本篤が再び極南に行つてその星を測定し、南北兩部に各十二象を增して二十七象となし、合せて六十象を天球に繪がいた。架上に四脚を設け、地平環を設け極軸がこれを貫くことは兩球共に同じである。但し天球は黃極を主として地球は赤軸を主としてゐる。兩方共

アールドゴロービスと云ヘーメルは天也アールドは地也ゴロウビスとはまると云ふこと也西洋は我邦節を冬至に起すが如く節を春分に起す故春分の宮より數へ始むる也

○國家耶蘇の亂に懲りて舌人といへども猶西洋の書を讀ことを許さず況や其他をや故に西洋の學の書一切に之を禁ず其禁目

天主　耶蘇　西洋　歐邏巴　利瑪竇　利太西太一作泰　利山人　陽瑪若　湯若望　游藝字子六　景教　彝學夷　西學

書に三十四種の禁書あり

○天學書函　、天文略
天主實記　天主續編
○計開　畸人
十慰　西學記
、交友論　辨學遺牘
七克　彌撒祭義
、幾河原本
代疑篇　、泰西水法
表度說
三山論學記
教要解略　唐景教碑附
聖記百言
二十五言　靈言蠡句
、職方外記　況義
、同文算指　勾股義
、圜容較義　、測量法義
、渾蓋通憲圖說　簡平儀記
萬物直原　滌罪正記
滌平儀記
其外語禁目にわたる書は悉焚塗す是を査する役は聖堂豫りの向井氏春德寺の和尚兩人也右の外焚塗に及ぶ者

寰有詮
貞享二年乙丑拾五番船持來官命船上焚之
天經或問後集　游子六著
貞享四年丁卯廿二番船塗抹
福建通志
貞享三年丙寅拾五番船持來船上焚之
地緯
貞享三年
帝京景物略
元祿八年乙亥拾六番船持來
譚友夏合集　共六本廿三卷
同年第四卷七言律有過利泰西墓商吊之
西堂全集
元祿九年丙子六拾二番船塗抹晉按
燒船下當有共字
三才發秘
元祿十二年塗抹　共十本八卷　鄒元標著
顧學集
元祿十二年己卯廿三番船塗抹
西湖志　共八本　志八卷田汝成撰　志餘十八卷姚靖撰著
同年塗抹

に印圖である。天球をヘーメルゴロービス、地球をアールドゴロービスと云ふのである。ヘーメルは天である。アールドは地である。ゴロウビスとはまるといふことである。西洋は我が國が季節を冬至に起すやうに季節を春分に起してゐる。であるから春分の宮から數へ始むるのである。

○我が幕府では耶蘇の亂に懲りてしまつたから、外國語を通辯する人でも猶ほ西洋の書物を讀むことを許してゐない。ましてやその他の普通一般の人に於ては尚ほ更である。であるから西洋の學問の書籍一切にこれを禁じてゐる。その禁止した禁目は

天主　耶蘇　西洋　歐邏巴　利瑪竇　利太西太一作泰　利山人　陽瑪若　湯若望、游藝、字子六　景教　彝學夷　西學

書籍には三十四種の禁書がある。

○天學書函　、天文略　天主實記
天主續編　○計開　畸人
十慰　西學記　、交友論
辨學遺牘　七克　、幾河原本
彌撒祭義　、泰西水法　代疑篇
表度說　三山論學記
教要解略　唐景教碑附　聖記百言
二十五言　靈言蠡句
、職方外記　況義
、同文算指　勾股義
、渾蓋通憲圖說　、測量法義
萬物直原　簡平儀記
滌罪正記

その外語禁目になつてゐる書は悉く焚塗してしまふ。これを檢査する役は聖堂係の向井氏、春德寺の和尚の二人である。右の外焚塗に及ぶものは

寰有詮

貞享二年乙丑に拾五番船が西洋から持つて來たが、役人は命じてこれを船上で焚かしめた。

天經或問後集　游子六著

貞享四年丁卯廿二番船が持つて來たがこれを塗抹せねばならなかつた。

福建通志

貞享三年丙寅拾五番船が持つて來て、これを船上で焚かされた。

禪眞逸史（俗話小說也雖有天主事非耶穌所謂）
元祿十三年庚辰六番船持來塗抹
方程論　四本四卷　勿菴梅文鼎著
元祿十四年辛巳四拾二番船持來塗抹
算學也序及餘論存右序中載西學算法之題名及蠻徒之名號並禁書題號塗抹
西堂全集
寶永三年丙戌五拾五番船持來塗抹
西湖志後集
寶永四年丁亥四十一番船持來塗抹
、增定廣輿記　二十四卷　蔡九霞先生增定
寶永七年十六番船持來塗抹
、名家詩觀　康熙戊午漢鄧儀淸詩
元祿十五年持來第六卷有贈太西洋湯若望詩七言律一首吳統持詩也
○增補山海經廣註　六本十八卷仁和吳任臣注
元祿十五年
檀雪齋集　十二本四十卷
勾股義　二本
享保十二年晉按此三部下必脫焚塗抹等字
これ禁目の外西學に觸るることある也其內只贈西士過西士墓の詩一首を出すも其集これが爲に廢すれば國禁の嚴なること知るべし晉聖堂に詣し向井氏に過つて此事を問ふに此禁も亦古今あり國初耶蘇一亂の後深く懲り給ひて一言天主に及ぶも忌み給へりされども西洋の學は天文地理に深く通ずれば其書國禁なる時は天文曆術の學缺事たるに因て享保二年官命有て其禁ゆるぶ曰噂と名目とは免ず唯其敎を說の書のみ禁之云これによつて西學稍稍世に出て禁書の內天文略交友論幾河原本泰西水法職方外記同文算指圜容較義渾蓋通憲圖說測量法義等皆世に行はる已來曆算全書等官禁にあらず西人の名目を出せる詩集世に行ふことを得ざる時と大に異なり國家の學者に賜する事大也これより世の學者稍稍西書を讀む事を知つて開闢の翻書等頻頻として出づ吉雄子の宅にして西書を覽るに其書我尾とする處彼書の閉卷にして其板は銅を用ゆ精巧言ふべからず表紙獸皮をなめし漆にてぬる壯夫といへども十卷を擔ふ事能はず大册なる者は一卷の價金四五十片に至る天象地理の書より物產の書には天竺本草阿蘭陀本草を見たりこれを見て和漢本草の類物產の窄狹なるを覺ゆ諸國の志亦多しケンフルと云書は遲遲と日本との志なり初に日本の總圖ある客

地緯
貞享三年
帝京景物略
元祿八年乙亥拾六番船が持つて來た。
譚友夏合集　共六本廿三卷
同年第四卷七言律、利泰西の墓を過ぎて之を吊ふ文あり。
西堂全集
元祿九年丙子六拾二番船塗抹、按ずるに、疑ふらくは船下當に共字あるべし。
三才發秘
元祿十二年に塗抹
顧學集　共十本八卷　鄒元標著
元祿十二年己卯　廿三番船塗抹
西湖志　共八本志八卷　志餘十八卷　田汝成編輯　姚靖增補
同年塗抹
禪眞逸史　俗話小說也。天主の事を記するありと雖も耶蘇に非ず。謂ふ所の天主はその名を惡んでこれを斥くるのみ。
元祿十三年庚辰に六番船が持來塗抹

方程論　四本四卷　勿菴梅文鼎著
元祿十四年十四年辛巳に四拾二番船持來算學なり。序及び餘論存す。右の序中西洋の學算法の顯名及び蠻徒の名號竝に禁書題號を載す、塗抹。
西堂全集
寶永三年丙戌に五拾五番船持來塗抹。
西湖志後集
寶永四年丁亥に四十一番船持來塗抹。
、增定廣輿記　二十四卷　蔡九霞先生增定　寶永七年十六番船が持來塗抹
、名家詩觀　康熙戊午漢の鄧儀淸詩を選す。
元祿十五年に持來る第六卷に太西洋の湯若望に贈る詩七言律一首あり。吳統持の詩なり。
、增補山海經廣註　六本十八卷仁和吳任臣註元祿十五年
檀雪齋集　十二本四十卷
勾股義　二本
享保十二年　案ずるに此の三部必ず焚塗抹等の字を脫せしならん。
これは禁目の外に、西洋の學に及んでゐることがある。その內唯西士に贈る、

館中明の新安の胡宗憲所著の籌海圖編を見る一套十卷あり日本の事を記せる書なり明人の國圖は布置位を失する者多し西人の圖は漸く正し長崎上關大坂京師江戸の圖は言ふに及はず西海山陽畿內東海道等の山川歷歷として見るが如し三十三間堂には的射あり東都の殿中には將軍家簾を垂れて紅毛人の舞を覽給ふの圖あり草木禽獸魚鼈の如きは訓蒙圖彙如き書によつて寫したりと見えて正しからず神には大黑惠比須壽老人元三大師又位牌數珠寶貨は壹步判小判大判豆板鋌銀錢大名の諸道具定紋いろは片假名あり代代の帝統治亂沿革もある由也櫻蔭比事の譯書などもある由耕牛語りき

西士の墓を過ぐの詩一首を出しても、その集はこれがため燒却に遇ふところを見ても如何に國禁が嚴重であることが知れよう。自分は聖堂に行つて向井氏に原書には「過つて」とあるも遇つての誤植ならん？と聞いて見たところ、この禁も亦昔と今では相違するさうである。初め耶蘇教の亂があつた時、公儀では大變懲りて一言でも天主のことに關係しても、これを忌み嫌はれたのである。けれども西洋の學問は天文地理に詳しいから、その書物が國禁であると天文曆術の學問が發達しないので、享保二年に公儀では命令してその禁を弛められた。それには「噂と名目とを免ず。唯その教へを說くの書のみこれを禁ず」とある。これによつて西洋の學問が稍々世の中に出て、禁書の內、天文略、交友論、幾何原本、泰西水法、職方外記、同文算指圜容較義、渾蓋通憲圖說、測量法義等は皆世間の人に讀まれた。それ以來曆算全書等は官禁でなくなつた。西洋人の名目を出した詩集が世の中に出ることが出來ない時と大變な變り方である。國家が學者に便宜を賜はることを頗る大であるといふべきである。これから世の中の學者が稍々西洋の書物を讀むことを知つて、人間の臟腑の解剖に關する飜譯書等が頻りと出版された。吉雄子の宅で西洋の書物を見たところ、その書物は日本で卷尾となつてゐるところは西洋では卷の始めであつてその板は銅を用ひてあり頗る精巧に製作されてゐる。

表紙の獸皮をなめし漆で塗つてあるから、書物の目方が重く、元氣壯んな男子でも十卷と擔ふことは出來ない。大冊なものは一卷の價が金四五十片にもなる。天象地理の書物から物產の書には天竺本草、阿蘭陀本草といふのを見たことがある。これを見て和漢本草の類は、物產の範圍が狹いやうである。地理の本も亦多くある。ケンフルと云ふ書物に暹羅と日本との記錄である。初めに日本の總圖がある宿屋の中で明の新安の胡宗憲が著した「籌海圖編」の存するを知つた。これは一套十卷ある。日本のことを誌した書物である。明人の地圖は布置の正しくない物が多い。西洋人の製作した圖はまづ〳〵正しいにちかい。長崎、上關、大阪、京都、江戸の圖などは勿論のこと、西海、山陽、畿內、東海道等の山川はありありと見るやうである。三十三間堂には射的が描いてあり、東都の殿中には將軍家が簾を垂れて紅毛人の舞を御覽になつてゐる圖がある。草木禽獸魚鼈のやうなものは「訓蒙圖彙」の書物によつて寫したと見えて正しいものでない。神には大黑、惠比須、壽老人、元三大師、又位牌數珠があり、寶貨には壹步判、小判、大判、豆板、鋌銀錢、大名の諸道具、定紋、いろは片假名もある。代々の帝統及び治亂の沿革もある由である。西鶴の「櫻蔭比事」の譯書などもある由を耕牛から話を聞いた。

○阿蘭陀にては字の事をベットルと云此字皆西洋に通ずベットル總て二十五昔は二十四今は二十五眞行草あり則活字板を出して印して我に贈る其墨をエンキと云其板をドカクベッテルと云也其所謂二十五字は

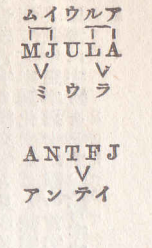
Hハ　Q(キ)ワ
Y(エ)イ　Gゲ
Pペ　X(エ)(キ)ス
E(エ)フ　Oヲ
W(ド)(ブ)(ル)(ト)(エ)フ
D(エ)　N(セ)ン
Vユフ　Dデ
M(エ)ム　Uユ
Cセ　L(エ)ル
Tテ　Bベ
Kカ　S(エ)ス
Aア　Jイ
Rエ(ル)　Z(セ)(ダ)(ツ)ト

此時艸々其說を盡すこと能ず今に以て憾とす大抵文字の不足は反切を以て足す吉雄席間に於て我姓字を寫して

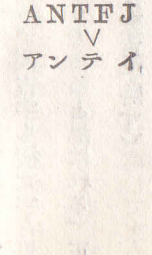
○阿蘭陀では字のことをベットルといふのである。この字は皆西洋に通用するものである。ベットルは總て二十五あり、昔は二十四で今二十五となり、眞書體、行書體、草書體の字がある。活字板を出して印刷し自分に贈つて呉れたが、その墨をエンキといひ、その板をドカクベッテルと云ふさうである。そのいはゆる二十五字は、

Hハ　Q(キ)ワ　Y(エ)イ
Gゲ　Pペ　X(エ)(キ)ス
F(エ)フ　Oヲ　W(ド)(ブ)(ル)(ト)(エ)フ
Dエ　N(セ)ン　Vユフ
Dデ　M(エ)ム　Uユ
Cセ　L(エ)ル　Tテ
Bベ　Kカ　S(エ)ス
Aア　Jイ　R(エ)ル　Z(セ)(ダ)(ツ)ト

右の通りであるが、この時急いでその說明を十分聞くことが出來なかつたのは、今でも殘念に思つてゐる。大抵、文字の不足は反切（はんせつ）を以て足しとしてゐる。吉雄は席上に於て私の姓字を寫して次のやうに綴つた。



予依て吉雄幸作の字を書して出すに吉雄領せりセダツト松村はセイダトいへり然ればトと云も濁音なるべしQ松村はキユエといへりFVの別Fは中聲Vは口を閉て火を吹く勢をなす聲Hは半濁Lは半濁Rは馬の子を呼ぶ樣に舌を口裏に轉ずる聲(エ)ムなどと○を用ひたるは助聲と見えて實用無しと見えたり條理たちたる事は萬國を隔てても一轍に出づ我邦天竺と域を隔てて古昔相通ぜずされども悉曇字記などを見るにアイウエオ長短呼を以て音韻をたつ我古語を察するも此五音の反切詳略也漢人三十六字母も此藩圍の內にあり松村に聞くに其字經緯あり其アベセデエは緯也五音を以て經とす五音の次第はアエイヲユと立つと也西洋にも詩あり或は三百篇の詩の如く又梵書の偈の如く五音相類を韻とし踏と同人いへり詩の事をゲテイキ又ハアルスとも云晉次に因て思ふに本邦の古字ありと云說あり先達と



自分は其處で吉雄幸作の字を阿蘭陀字で綴つて見せたところ、吉雄は「それでよろしい」と頷いて見せた。セダツト松村はセイダトであると云つた。であるからトといつても濁音であらう。Q松村はキユエといつた。FVの別は、Fは中聲でVは口を閉ぢて火を吹く勢ひをする聲である。Hは半濁でLは半濁、Rは馬が子を呼ぶやうに舌を口裏に轉ずる聲である。(エ)ムなどと○を用ひたのは助聲であると見えて實際に使用することが無いやうに思はれた。西洋語に於てこのやうに條理の立つてゐることは萬國を隔てても同樣である。我が國は印度と土地を隔てゐて、昔は互に交通してゐなかつた。けれども「悉曇字記」といふ書物を見ると、アイムエオを長く呼んだり短く呼んだりして音韻を立ててゐる。我が國の昔の言語を考察してみても、その五音の反切の詳略である。支那人の三十六字母もこの範圍の內にある。松村に聞いて見ると、その字には經緯がある。そのアベセデエは緯で、五音を經としてゐる。五音の次第はアエイヲユと音韻を立てるのぜ

らず今の國字は漢字より來る者也梵字は則悉曇也蒙古字は正字通に出せり我未得要領朝鮮字藤原明遠の學山錄に出せり其說曰朝鮮國世宗莊憲王設諺文廳命甲高靈成三閒等製諺文其字正音合十三行一行各十一字又有九字旁音以旁音迭合於正音而變通曲折無處不合天下萬國語音文字所不能記者悉可譯而通之矣（朝鮮字略す）

右旁音九字正音一百四十三字其字體依梵字爲之是本書誤りあり今改正すこれは竪文字也阿蘭陀は横文字也蒙古字も横文字と見ゆ又反切に依て文字變化すること梵字の如しと見ゆ正字通十二韻の首字を擧て兒童に字體を示す（蒙古字略す）

ある。西洋にも詩がある。或は三百篇の詩（詩經）のやうに又梵書の偈のやうに五音相類を韻として讀むのだと同人が敎へてくれた。詩のことをゲテイキ又はハアルスともいふさうである。其處で自分が考へて見るのに、我が國の昔に文字があつたといふ說があるが、先進の學者はこの說を採用しない。今の國字は漢字から來たものだと說いてゐる。梵字は則ち悉曇（しつたん）である。蒙古字は正字通りに出てゐる。自分には未だその要領がわからない。朝鮮字は藤原明遠の「學山錄」に出てゐる。その說いてゐるところによると、朝鮮國の世宗莊憲王は諺文廳を設け甲高靈成三閒等に命じて、諺文を作らせた。その字は正音が合せて十三行で一行は各々十一字有り又九字の補助音が有る。この補助音を以てかはる〴〵正音に合せて變通曲折させ合しないところはないのである。天下の萬國の語音文字の記することの出來ないものを悉く譯してこれを通ぜしめる。（朝鮮字略す）

右の補助音九字と正音一百四十三字はその字體を梵字に依つて作つたものである。この本には書き誤りがあつて今それを改正した。これは竪文字である。阿蘭陀は横文字である。蒙古字も横文字と思はれる。又反切に依つて文字が變化することは梵字のやうであると思はれる。正字通り十二韻の首字を擧げて兒童に字體を示して見た。（蒙古字略す）

子細に看來れば經緯條理ある事朝鮮字と同じ和字と其撰元より別也今淸明の地を有してより故國韃靼を滿洲と云今の中には淸語滿語兼用ひ淸字滿字雙べ行ふといへり

○松村翠崖曰今南懷伯仁の渾輿外記は西洋のプリニウスと云人の造れる書の拔書の樣なるもの也本書事甚廣し直に其書をプリニウスと云

○翠崖又曰西洋百年來の說は日動

よく〴〵看て來ると蒙古字にも經緯條理があることは朝鮮字と同じである。日本字とはその撰む根元から別である。今淸明（しんみん）の地を有してから故國韃靼を滿洲といふのである。今の中には淸朝時代の言語、滿洲語を兼ね用ひて淸字滿字が共に使用されてゐるといふことである。

○松村翠崖が言ふには、今南懷伯仁の「渾輿外記」は西洋のプリニウスといふ人の造つた書物の拔書のやうなものである。本書は內容が多方面に亙つてゐるから直ぐにその書をプリニウスといふた。

○翠崖が又言ふには、西洋百年來の說は、日が動くのではなく地が止まるので

くに非ず地止まるに非ず日よく止まり日の外なる者皆動ひて日を周る其製の渾天儀あリローベンデアードコロートと云クトロメンスと云人これを造れりと云ローベンデとは動の義也コローと翻珠

○明祚已に衰へ韃靼入て支那を有す即清也長崎の施藥院直野英伯と云が語りしは清帝后妃必明國より迎ふ文官は清に求む武官は滿人を用ゆと韃靼は大國也其版圖に歸する處を松村に問ふ其對に曰韃靼即タルタリヤ其地最洪廣大築七分也清國興るの地靖慶府を置て鎮す即所謂滿洲にしてこれ支那より東北にあたるの韃靼其佗支那に屬せず內中滿語文官漢語といへども雜へ用ゆべしとの上諭也大韃靼小韃靼あり大韃靼は西北にありゴロートタルターリヤ小韃靼はケレイニータルターリヤ西にあり今ムスコービヤの者之を有す又ムスコービスタルターリヤ又スネースタルターリヤスネースは支那也支那韃靼と云亦一種也それに東西の二韃靼あり

はない。日は止つてゐて、日以外の者が皆動いて日を周るのである。それを製したものに渾天儀といふのがある。ローベンデアードコロートといふのである。クトロメンスといふ人がこれを造つたさうである。ローベンデとは動といふ意味である。コローとは珠と飜譯する。

○明の朝廷が衰へて韃靼が侵入し、支那を占有した。即ち清である。長崎の施藥院直野英伯といふのが語るところに依ると、清帝はその妃を必ず明國から迎へ、文官は清から採用し、武官は滿洲人を用ふるといふことである。韃靼は大國である。その版圖に歸するところを松村に聞いて見ると、その答へに、韃靼は即ちタルタリヤであつて、その地は最も廣く凡そその地の七分を占めてゐる。清國が興つた地には靖慶府を置いて支配してゐる。即ち所謂滿洲であつて、これが支那から東北にあたる韃靼でその他は支那に屬してゐない。朝廷に於ては滿洲語、文官は漢語であつてもその中へ雜へ用ひよといふ達示である。大韃靼小韃靼とあつて、大韃靼は西北に在る。ゴロートタルターリヤ小韃靼はケレイニータルタリヤの西に在る。今はムスコービヤの者がこれを占めてゐる。又ムスコービスタルターリヤ又スネースタルターリヤスネースは支那である。支那韃靼といふのも亦韃靼の一種である。それに東西の二韃靼がある。

○歐邏巴の地阿蘭陀などの組合の國七箇國あり其帝統は右の七箇國の王輪番にて入てこれを嗣ぐ國王葬禮圖一卷あり其禮甚盛也棺郭喪服大に備はる兵器は皆倒に持つ當年カビタン船中に死し長崎に葬る葬儀墳墓最壯也俗に阿蘭陀は死すれば之を海に投ずとは久しく海上に浮む時船中藏め難きを以て兼て沙を船に貯へ置き若死する者あれば棺中沙を以てこれをつめ浮まざる樣にして水葬する也長崎の人も朝暮其人を見るなれども世の常の人は其實をば知らず阿蘭陀人は短壽也といふも虛說也クロンボは身輕捷にして色黑く殆猿などの樣なる者の樣に云思へどもやはり常の人也最熱帶一條は人色黑く性暴に聰慧も亦劣れりクロンボも就て見るに少し黑き面にて替れる事なし松村曰輕捷江戸トビの者ほどの働はなし即閣龍渤印度あたりの國也即齊浪の地西洋の大臣キリストフスコロビスと云者齊狼の地を開きたり是故に齊狼の城下をクロンボと云コロンビスの轉音にして和語の黑ン坊と云にあづからず崑崙勃古龍盤皆一音の轉、漢人の所謂烏鬼是也

○歐邏巴の地、阿蘭陀などの組合の國が七箇國ある。その帝統は右の七箇國の王がかはるゞ代つてこれを嗣ぐのである。「國王葬禮圖」一卷がある。その禮は甚だ盛んなもののやうである。棺郭、喪服は大いに備はつてゐて、兵器は皆倒に持つもゐる。當年カビタンが船中で死んだので長崎に葬つたが、その葬式や墳墓は最て壯んである。阿蘭陀では船が航行中、人が死ぬとこれを海に投ずるといふのは、長い間航海してゐる時は死骸を船中に留めて置くことが出來ないので、出帆する時から沙を船中に貯へて置き、若し死者があると棺の中に沙を詰めて棺が浮ばないやうにして水中に葬るのである。長崎の人も朝暮その人を見るのであるけれど世間尋常の人はその事實を知らない。阿蘭陀人は壽命が短かいといふ說も誤つてゐる。クロンボは身が輕くて素ばしこく色は黑くて殆んど猿などのやうな者に云ふけれども、クロンボもやはり普通の人である。最も熱帶一條は人の色が黑くて性質が荒々しく智慧も亦普通の人より劣つてゐる。クロンボもよく看れば、少し黑い顏で普通の人と變つてゐるところはない。松村が言ふには、「クロンボの身輕で素早いことは江戸のトビの者ほど働きはない」と。即ち閣龍渤（くろんぼ）は印度あたりの國である。即ち齊浪（せいろう）の地である。西洋の大臣キリストフスコロビスといふ者が齊狼（せいろう）の地を開いたのである。これからして齊狼の城下をクロンボといふのである。

海保青陵集

○阿蘭陀にては故きつつれ故足袋等の樣なる物にて紙を造り出す紺に染たるは紙色青し

○阿蘭陀文武の二官あり武官は甚落たる者也カピタンも文官也

○阿蘭陀の醫治內療に長ず內科外科の別あり自血や疵の取なやみする者は人斬と同じく品流甚卑し本科の人能さし圖をなし之を役使す其人平人と同席を許さず牛豕を殺す人は還て然もあらず

○阿蘭陀には灸法なし熨法有りノシ灸と云其法燒酒壹升樟腦拾貳錢大茴香紅花各四匁一度に燒酒に浸し置き用ゆる時布にて漉し用ゆ熨し樣は木綿手拭位のきれを疊み右の藥水に浸しノシガネは壁を塗る鏝の樣に長さ五寸厚さ三分程さきを圓くし三枚火鉢の上にて燒ききれの上を取り替へ取り替へ熨す肌に熱を强く感ゆればひく折傷死血積聚筋骨痛等に用ふ

コロンビスといふ發音から轉じたもので、日本語の黑ン坊といふのと關係はない。閣龍勃崑崙勃古龍盤等は皆一音の轉じたもので、漢人のいはゆる島鬼である。

○阿蘭陀では古いつつれ、古い足袋等のやうな物で紙を造り出すのである。紺に染めてあるのは紙色が青い。

○阿蘭陀には文武の二官がある。武官はその官位が甚だ落ちた者である。カタビンも文官である。

○阿蘭陀の醫術は內科の治療が進步してゐる。內科外科の區別があつて、自血や疵などを取なやみする者は人斬と同じく、人がらが卑しく、本科の人が指圖してこれを使つてゐる。その人は普通の人と同席を許されず牛や豚を殺す人は却つてさういふことはないのである。

○阿蘭陀には灸法といふものがないが、熨法といふのが有つて、ノシ灸といふのである。その方法は、燒酒壹升樟腦拾貳錢、大茴香紅花各四錢を一度に燒酒に浸して置いて使用する時はこれを布に漉して用ふるのである。熨し方は木綿手拭位のきれを疊んで右の藥水に浸し、ノシガネは壁を塗る鏝のやうに長さ五寸厚さ三分程さきを圓くして三枚ほど火鉢の上で燒き、きれの上を取り替へ取り替へ熨すのである。肌に熱を强く感ずるとこれを取去る。折傷死血積聚筋骨痛等に用ひる。

樂所でも一切國營とし、金を出さなくてもプロレタリヤが自由に教育を受け、病氣にかゝれば無代で診療して貰ふと云つたやうに彼等のために凡ゆる便利な施設をなすことを力説した。

それと共に、國家の産業を盛んにする種々の方法を提言し、徒らに消費に傾いて生産力を減退しつゝある當時の弊害を矯正しやうと努めた。その説は農政及び經濟の知識にもとづくところがあり、文化的地理學の知識にもとづいてゐるので、在來の儒者連中が云ふところの如き迂遠な點が少しもない。その思想は雄大であり、その着眼は非凡である。今日日本改造家を考へてる人々に對しては殊に教へるところが多い。

三浦梅園集

三浦梅園は、九州方面に於ける哲學者として殊に非凡な人であつた。彼は早くからこの宇宙の根本生命に就いて疑ひを抱き、その究極を究めなければやまないと云ふ決心をした彼の一生は殆んどそれがために費されたと云つて宜しい。

彼は支那の哲學者の如く、科學と云ふ方面を輕く見なかつた。それ故彼は醫學の研究にこゝろざして此方面でも醫學者として優に一家をなしたのである。その醫學の説き方は單なる醫學者の説ではなく、哲學者として説いてゐるところに彼獨特の面白味を持つてゐる。

それから彼は、宇宙の根本生命に就いて解決を下すために、條理學なるものを打立てた。條理學とは此現象界が種々に複雜な作用をしてをつていろ〳〵に分岐してゐるが、實はその根本を貫く條理なるものが整然として存在してゐると云ふ意味にしか外ならない。即ち多元的な現象に對して一元的解釋を下したのである言ひ換へると此現象界は、春逝き夏來り、秋去つて冬來るにつれていろ〳〵の變化いろ〳〵の流行を示すがその根本に於て一貫した條理があつて、その條理のもとに以上變化及び流行が少しも軌道をはづれないで整然として行はれると云ふことを明か

にしたものだ。その説き方は少し六ケ敷しいが如何にもその考へ方の深いのに心を打たれる。

その他彼は、在來の儒教道德に就て彼一家言を述べてゐるが頗る見識の見るべきものがある。殊に價原に於て彼が經濟上から如何に日本を改造するかと云ふ問題を解釋してゐるところは、中々當時の弊害を穿つてゐてその道德的經濟學の建設に貢獻したところが多い。

海保青陵集

江戸時代は日本でも有力な經濟學者を多く出したのであるが、或る四五人の人をのぞくとその多くは、農民本位の勤儉論及び節約論一點張りである。且つ實際の事情に疎く行はれ難いものが多い。それは當時武士階級に屬した儒學者が少しも經濟上の實際に通じないので、机上の空論を發表するものが多かつた結果に外ならない。

ところが海保青陵は、儒者から身を起した人であるが、在來の經儒學者とは、全く行を方を異にしてゐたこれを新聞記者にたとへて云ふと、明治時代の新聖記者は、その社會記事の多くを机の上で製造したが、大正時代の新聞記者は社會記事を足で書いたと云つた工合である。即ち青陵は彼の足で彼の經濟學を書いた、と云ふ譯は彼自身日本全國を歩いて親しく經濟上の實際を研究し、農民や商人共と話して生きた材料を扱つたのである。

このことは彼の稽古談を讀んでもよくわかるが、大名武士及び、般民衆を經濟的に救ふに就いて、どうしたらよいかと云ふ名案を豐富なる實際上の材料によつて、痒いところに手が屆くやうに説いてゐるのでもわかる。彼が經濟學者としての價値は今後一層明かに增大して行くだらうと思ふ。

新刊

原　正男・著

神道の根本研究

日本思想の根本をなすべき良書出來

定價　金參圓八拾錢

送料　金貳拾貳錢